
崩壊した街

椿山 昇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

崩壊した街

【Nコード】

N2618K

【作者名】

椿山 昇

【あらすじ】

冷蔵庫に閉じ込められた大学生。ロッカーに閉じこもる高校生。レジスタンスに拘束された客とホテルボーイ。レジスタンスも予想していなかった恐怖。彼等は無事に街から脱出できるのか？

脱出ゲーム

何もない小さな村で俺達は、何も無いながらに楽しく遊んでいた。

貸し切りの状態の道路を、駆けつこに使い。草むらが生い茂る場所で、かくれんぼや、鬼ごっこ、ボールがあればサッカーやドッジボール……。

両親は、汚れてもいいように、ランニングシャツに黒い短パンを子供達に履かせ、子供達はお揃いの服で、村を駆け巡っていた。

「豪ちゃん。あれ……」

気の小さい少年、笹谷 仁志が、リーダー格の真西 豪に話しかけ、指をさしていた。

その方向にいたのは、俺達のように汚れた服で村を走り回る村っ子ではなく。

純白のワンピースを着て、帽子を被り、見知らぬ村にやって来た所謂、都会っ子だった。

「誰だべ？見ねえ顔だな」

思わず見とれていた豪に、隣の家に住む加畑 淳が話しかけてきた。

「さ、さあ……でも綺麗な人だな。」

「「そうだな」」

男五人が、ボケっつと見つめる中、少女はこちらに気付き、男五人は気付かれた事に体を強張らせる。

少女は、そんな汚れた五人に微笑みかけ、五人はまるで蕩ける^{とろ}かのような微笑みに蕩けてしまった。

「ホラっ、早く昇つてこいよ。」

気が付けば、その綺麗な少女も、汚れた五人の仲間入りを果たし、今は木登りに挑戦していた。

「そこに足を置いて、手え伸ばせ……俺が引つ張つてやる。」

白いワンピースは、すでに草や土にまみれ、都会っ子も村の仲間入りを果たしていた。

少女の伸ばした手を取り、豪は勢いよく引つ張り上げた。

「ここに腰掛けて・・・どうよ。凄くね？この木に登れば、村が見渡せるんだ。」

少女は恐る恐る、目を開くと、田畑や集落が広がる光景に「すごい」と声を洩らしていた。

「ここ、俺達の秘密基地なんだ。・・・由美ちゃんもだから、みんなには内緒だよ。」

仁志が、豪や鷺田 由美が座る枝の上から頭を逆さまに出し、由美に話しかけてきた。

「うん！・・・お父さんに言ったら、きつと腰を抜かしちゃうもん、きつと。」

「・・・お父さん、まだ仕事には戻れないの？」

村では、情報漏えいはかなり早く、少年達の耳に入るのも時間の問題だった。

親から聞いた話だと、かなりいい話ではなかったが、少年達にとっては理解できない内容だった。

「うん・・・でも、私、この方がとっても楽しい。外ってこんなに気持ちいいって知らなかったもん！」

足をばたつかせ喜ぶ由美に、五人も喜び、こんな時間がずっと続けばいいと思っていた。

小さかった少年達も中学生になり、進学の話や色恋沙汰が巡ってくるのは時間の問題だった。

「私・・・淳に、告白されたの。」

学生服を身にまとい、柔道で汗を流していた豪に、あの秘密基地で

由美にそう告白された。

中学卒業と同時に、由美は親父さんの移動に付いて海を渡る事が決定したのだ。

「そうなんだ……。よ、よかつたじゃん。淳はあいつ、野球部で部長もやってて、頼れる奴だよ。さすが、俺の親友って感じかな？」

「違うの。私は、そういう事を言っただけじゃなくて……」

「それにさ……。淳は結構女子の間でも人気あるだぜ。」

「もう！淳、淳、淳って……。私は、豪の気持ちを知りたいの！私、もう離れ離れになっちゃうんだよ！もう会えないかもしれないんだよ！」

「お、俺は……」

自分の気持ちに正直になれない豪は、体を震わせながら縮こまってしまった。

「もう！豪の馬鹿！」

由美は木から飛び降り「知らない！」と言い残し、秘密基地から去って行った。

引きとめようとする手が豪から伸びるが、その手は、完全に伸びきる前に、落ちてしまった。

好きだと言った言葉が、これほどにも重く、そんな単純な、一言で人を狂わせるとは思ってもいなかった。

その出来事は、由美が中学卒業と同時に襲いかかり、豪は唯一無二の親友を失ってしまった。

「ああああああっ！」

豪は、自分の片眼に激痛を覚え、目を両手で抑えながら、その場で倒れ、更に襲いかかろうとする淳を仁志や、他の二人に抑え込まれている光景を豪は生き残っているもう片方の目で捕えていた。

『今日は、当ホテルで知事の誕生祭を迎える事が出来、大変喜ばしく思います。』

大きなホールに大量のテーブルが置かれ、その上には見た事のない料理がぎっしりと敷き詰められていた。

「おい、あれ！・・・テレビで見た事あるぜ。」

「馬鹿！・・・そんな事より、これ燕の巣だよ。ぜってえそうだ！」
人よりも料理に目が向く蒲原 正也。そして、芸能人を見て興奮する志村 幸助は、ホテルボーイの正装に象られた仁志に注意を受けていた。

「ちよつと、俺達はお客さんじゃないんだからな。・・・俺の紹介で、せつかくバイトさせてるのにそんなんだつたら、給料払われな いぞ。」

「わゝかつてるよ。仁志。」

そう言いながら、正也は料理を一つ取り、仁志の口に突っ込んだ。

「どお、おいしいだろ？」

「うん、おいしい。・・・じゃない、俺まで同罪にするつもりか！」

「ちよつとぐらい、女性を見てはしゃいだって罪にはならないだろゝ。仁志」

そう言いながら、幸助までも仁志の上に乗っかってきて、バランスを失った仁志は、そのまま倒れ込んだ。

「いててて・・・何すんだよ！」

そう言つてテーブルクロスを掴んでいたつもりの仁志は、女性の悲鳴に驚き、掴んでいるのがテーブルクロスではなく、女性のドレスだと気付いた。

「わ、わわわ・・・申し訳ございません！」

仁志の謝罪に女性はビンタで返し、赤い頬を残した仁志は、原因となった二人を睨みつけるが、ちゃんとした接客を行つていて、

怒るにも怒れない状況だった。

口を尖がらせて拗ねる仁志を見て、二人は駆け寄って来た。

「悪かったよ。お前のお陰で大学の生活費を稼げてるんだ。仁志、お前には感謝してるんだぜ。」

「そうだよ。仁志・・・ただ昔から、チヨ（いじる）したりするの
が、面白いからしてるだけでさ・・・」

幸助の言葉に「そうそう」と頷いて見せる正也。

「そのチヨされるのが、俺は嫌なの！」

仁志の甲高い声の怒りに、二人は声を上げて笑い、二人の態度に怒る気も失せる仁志。

「ああゝあ、豪や淳がいればな。」

落ち込む仁志に、二人は笑うのをやめた。

「おい、仁志・・・豪と淳を一括りにするのは、やめろ。」

「そうだ。淳がした事を、お前は許せるのか？」

「でも・・・二人はすごく仲が良かったじゃないか・・・」

指をいじりながら、仁志がそう言うのと、幸助が仁志の頭を軽く叩いた。

「だとしてもだ・・・豪は、あいつは何も悪くねえ。それなのに
淳が・・・」

「おい、もうやめようぜ。そんな話・・・」

幸助の肩を叩き、正也が止めた。

「それに、豪が俺達がそんな話してたって聞いたら、悲しむぜ。」

「そ、そうだね・・・でも、豪も接客業に回されたりしないかな？」

仁志の言葉に、二人は一瞬黙るが、次の瞬間、大きな声で笑った。

「あいつが・・・接客？」

「無理無理無理・・・お前、あの顔で接客なんてしたら警察沙汰
だぜ！」

笑いまくる三人に痺れを切らせたオーナーが「ちよつとこつちへ」
と笑いながら案内されたが、心が笑っていない事に気付き、素直に
お叱り部屋へと三人は入って行った。

静かな音楽が流れ会場は、静かなひと時を過ごしていた。

場所は一变し、厨房では新たな料理を急ピッチで作り、戦場と化していた。

「おい、パスタあ！・・・さっさと茹でろよ！」

「はい」

「注文入りました！」

紙を手渡されると、その注文を読み上げ、それに対し料理人は「おう」やら「はい」とか「なんで！」とかで返していた。

そんな戦場で、右目に大きな切り傷を作った真西 豪は黙々と、皿を洗いをし続けていた。

「注文入りました！」

「おう」「はい」「またあ？」

皿を洗っても洗っても、次々と洗い物が増え、手が腱鞘炎を起こしそうになっていた。

洗い場には、豪を含め三人の作業員がいるが、どれも死にそうな顔をしていた。

「注文入りました。」

「おう」「はい」「勘弁してくれ」

料理人は、各々の担当料理を作り、大忙しだが、豪が目を見ると、一人だけ暇そうにしている人がいた。

「おいおい、なんで俺の所には注文来ないんだよ！」

そう言いながら、男は自分の前に置かれている調理台を蹴っていた。もちろん、注文が来ていない訳ではない。まわりの人と同様に、注文は来ている。だが、彼はそれを難なくこなし、驚異的な速さで、料理として出してしまうのだ。

「注文来ました」

「おうよ」「はい」「もう嫌だ！」

「ああ！暇だ！・・・お前、そんなに嫌なら、俺と変われ！ちょっと休憩して来い！」

勘弁してくれと叫んでいた料理人を蹴飛ばし、男は上に張られている料理の品を作り始めていた。

そして、彼の驚異的な調理法に、周りからは嫌な目線が飛び、だが、彼の腕を誰もが認め、料理長ですら、彼の言動を注意することが出来ずにいた。

「君、手止まつてるよ」

「あつ、すみません」

豪は、料理の方に目が行き、自分の仕事を少々放棄していた。

「君、バイトだよな。」

「ええ、友人の紹介で・・・。他にも二名、接客の方に行っています。」

手を動かしながら、新米の料理人は、黙々と皿やフライパンを洗っていた。

「でも、君・・・凄い傷だね。その・・・答えたくなければいいけど。

・・・ああごめん、気を悪くしたかな？」

「ああ、いえ・・・餓鬼の頃、転んじやつて。その時の傷です・・・

・このせいで結構、高校時代は大変でした。」

「へえ大学生なんだ。」

「ええ・・・まあ三流大学ですけど。」

「恋人とかは？」

おそらく場を和ませようとしているのだろう。だが、その言葉に一瞬、由美と淳の顔が思い浮かぶ豪。

「この顔ですよ。いる訳ないじゃないですか」

なんて笑って見せるが、心から笑っているのかは正直、自分でもわからなかった。

和やかになった洗い場だが、豪以外の新米料理人が何故か、蹴飛ばされた。

「どけつ、休憩に入ってる。」

もう料理、完成させたのかよ！

豪の心の叫びが、見上げるほどの男に通じたのか、男は豪を見下ろしてくる。

「ああ？・・・おいお前」

「は、はい・・・なんでしょう」

野太い声に圧迫感を覚える豪。豪もかなり長身の方だ。それなのにこの男は、豪をまるで小物扱いのように見下ろしてくる。

「いい匂いがするな・・・」

「へええ？」

まさか、そっち系？

「名前は？」

「あつ、真西・・・豪です。」

「そうか・・・俺は、真城 築地^{つきじ}だ。よろしくな」

「は、はい・・・。」

「お前等は、休憩行ってこい」

そう言われた二人は、急ぎ足で厨房から逃げていった。待つて！見捨てないで！

豪の叫びも虚しく、二人は厨房から逃げていった。

「おい、さつさとやるぞ。」

「はい・・・。」

豪は、隣の巨人兵に身を震わせながら、作業を続けた。

「おい、どうするよ。」

「好都合だ。俺達は作業に移るぞ」

先ほど出ていった新米料理人は、そんな事を口に出し、休憩部屋から出ていった。

「もうすぐだ。・・・この場所は地獄へと変わる。・・・いや、地獄にしては生ぬるい。」

黒いレインコートを身にまとった人が、廊下を歩き、白い純白のドレスを身にまとった女性はその男と、すれ違い変な言葉を呟く奴だと首をかしげ、広場へと向かっていった。

白いドレスを身にまとい、螺旋階段を下りてくる女性はかなりの絵になる。

お叱り部屋から出てきた三人を励ますにはちょうどいいものだった。

「あれ？・・・由美じゃね？」

幸助の言葉に二人は頷き、全員が由美だと確信した。

「おおーい、由う！」

仁志が手を振り、由美に声をかけようとするが、幸助と正也がそれを止めた。

「馬鹿か！呼んでどうする！」

「そうだよ。もし来たらどうするんだ！何て言うんだよ。絶対に豪や淳の事聞いてくるに決まってるんだろ！」

「そ、そうだったね。ごめん」

落ち込む仁志。そして、螺旋階段から姿を消した由美を見て、一難去ったため息を漏らす二人。

「あつ、もしかして、仁志と幸助と正也？・・・ウツソ、久しぶり」

「ああ・・・神様」。

天を仰ぐ二人と能天気 hands を振る仁志。

「えっ、えっ？なんでここにいるの？」

「俺達、ホテルボーイのバイト中なんだ。」

「そうなの？じゃあもしかして、他のパーティの時もバイトとかしてたの？」

「そうです。・・・だけど、由美にばれないようにコソコソしてまし

た。と心の中で呟く二人。

「ねえ、豪と淳は？・・・元気にしてる？」

やはり来た！どうする？どう対処する？

「うん、二人とも元気だよ。・・・最近、淳には会ってないけど、豪なら厨房でバイト中。」

おお！さすが能天気野郎！難なくすり抜けやがった！

「そうなの？私、豪に会いたいな・・・。」

そう言っただけ厨房の方へ歩もうとする由美。

「あつそれは・・・」

二人は、何て理由をつけて由美を引き留めようか、悩むがその前に能天気が「駄目だよ」と答えた。

「駄目だよ。今厨房は、大忙しなんだから、迷惑掛っちゃうよ」

「それもそうね。」

ああ！神様、能天気野郎に神の御加護を・・・！

天を仰ぐ、二人・・・その時、

パン

乾いた癪癪玉が、破裂する音が広場に鳴り響いた。

「おう、豪。ちょっとこの紙に書いてある物を、冷蔵庫から持ってきてくれ」

巨人兵築地にそう紙を手渡され、皿洗いだったはずの豪は少々戸惑っていた。

「えっ、でも俺・・・肉の種類とかわかりませんよ。」

「大丈夫だ。肉は部位分けしてあるし、野菜は名札が貼ってある」

「わ、わかりました。」

巨人兵築地に気に入られた豪は、周りの痛い目を感じつつ、冷蔵庫へと歩いて行つた。

休憩に入つたまま帰つてこない新米料理人の代わりに、調理をしていた料理人が築地に蹴飛ばされ「お前等、洗い場」と指示され、文句をグチグチと言いながら皿洗いをしていた。

「まったく、洗い場なんて何年ぶりだよ」

「くそつ、バイトのくせに・・・」

そんな料理人に「ごめんなさい」と呟きながら、豪は大きな冷蔵庫へと入つて行つた。

さすがは、有名ホテルの冷蔵庫と言つた感じで、大きな部屋にいくつもの肉の塊や、新鮮な野菜が並べられていた。

「うわっ・・・すっげ・・・」

豪は少しくらいかじつてもばれないよな？・・・とか思いながら、紙に書かれた食品を探していた。

「ええつと・・・羊のもも肉つて・・・どれだ？」

寒い部屋で、目的の品を探しながら、冷蔵庫を行ったり来たりを繰り返す豪。

ようやく、全ての品を揃え、冷蔵庫の外へ出ようとすると、最悪な音が冷蔵庫内に響き渡つた。

ボタン・・・ガチャ。

「えっ？」

豪は、駆け足で出口に向かい、押し戸の扉を開けようとするが、開かない。

「えっ・・・マジで！嘘！」

扉を挟んで聞こえてくるの声に豪は身の毛もよだつた。

「まったく、誰だよ。冷蔵庫開けっ放しにしてた奴。」

「まったくだ。衛生管理に悪いだろ。」

「いやいやいやいや・・・ヤバイって！」

「すみませうん、まだ中にいるんですけどお！」

何重にもなった保温室で、どんなに叫ぼうが、外には全く聞こえなかった。

「嘘でしょ！馬鹿、馬鹿！お願いだから気付いてください！」

閉じられた冷蔵庫は、上昇した室温を下げようと稼働し始め、その音に豪は「ヤバイ・・・死ぬ」と呟いた。

「申し訳ありません」

一人のホテルボーイが、サプライズで準備していたクラッカーを中央で破裂させてしまったと頭を下げ、炸裂音の原因を説明していた。
「なんだ、びっくりした」

由美は、ホッと胸をなでおろし、幸助と正也もため息を漏らしていた。

「でも、おかしいな・・・今日はそんなイベント無いと思うけど・・・」

事実、クラッカーは最初に知事の挨拶が終わると同時に、全て鳴らし終えたはずだった。

首をかしげる仁志に幸助が飛びついた。

「一個残ってたから、間違ったとか言ってワザとあいつが鳴らしたんじゃないの？」

「いててて、抱きつくなよ」

「何を言うか、俺達、親友だろ。」

そう言いながら正也も仁志に飛びつき、倒れる様を見て「相変わらずね」と由美は笑っていた。

久しぶりに見た由美の微笑みに、三人は少年時代を思いだした。

「でも、懐かしいな。・・・中学卒業からだから・・・3年、4年振りか？」

指を折って数える正也。

「そうね。そんなぐらいかもしれないね。・・・みんなは高校時代どうだったの？」

「ああ・・・みんな同じ高校に入学してな。」

続きを言おうとする幸助だが、淳の事を思い出し、言葉がつまった。
「何？どうかしたの？」

「いや・・・なんでもない。相変わらずのお調子もんで、高校生活も過ごしてました。」

正也の助言に幸助は救われた。

「ああ、なんだか、簡単にみんなの高校生活が想像できそう。」
と由美は笑っていた。

「由美の方は、どうだったんだ？」

「私は・・・女子高だったから、活発的な女子が一人だけ浮かれてた感じかな？」

「うわゝ、浮いてたんだ。」

「まあ・・・ね。」

胸を張りながら、由美はそう言い、明らかに嘘を付いている事がバレバレだった。

本当に村の情報網は、どうなってるのかわからないが、由美が高校生活を楽しめていないという情報は三人の耳にも届いていた。

「そっぴや、今度の夏休み、俺達村に帰るんだけど。由美も来ないか？」

「えっ？・・・ああ、そうやって私にお酒飲ませて何する気？いやらしい。」

「馬鹿。そんなことしないよ。」

正也は軽くあしらう。

「あつ、それはそれで、ちょっと残念かも。」

「じゃあやつてやろうか？」

との幸助の言葉には、

「それは、嫌」

と由美が答えた。

そんな中、会場の照明が全て落ち、会場はざわつき始めた。

「おいおい、サプライズってこの事だったのか？」

正也が立ち上がりながら、辺りを見渡すと、会場の上のギャラリーで人が忙しく動くのが見えた。

倒れている幸助に手を貸して、正也は上の会場を指差していた。

「でも、おかしいよ。・・・そう言うイベントがあるなら、僕達にも伝わるはずだ。」

一番下になっていた仁志が、辺りを気にしながら、立ち上がった。

「だから、考えすぎだって・・・大体、仁志はな・・・」

能天気なことから、と言おうとする幸助の言葉を遮るように、癪癪玉が何発も会場に響き渡り、あまりの大きな音に、その場にいた四人は耳を抑えて、頭を反射的に下げた。

会場の人達は、イベントだと思い込み、面白おかしく叫び声を上げる声や、何やら思わしくない事が起こっていると思っただ人達はその場に伏せていた。

「みなさん。こんばんわ・・・正義のブルーソルジャーです。」

スピーカーからは、そんな声が会場に響き渡り、ブルーソルジャーと名乗るレジスタンスを四人は思い出していた。

「ブルーソルジャーだって？」

「まさか・・・なんでレジスタンスがここに？」

二人は、暗がりの会場で話し合い「まさか、ここに本拠地を置こうと・・・」と連想する仁志に「ないない」と答えた。

「大体、知事はもうここにはいないんだから、意味がないだろ。」

「もしかして、他にも政治に関係する人がここに居るのか？」

仁志は、袖をまくり上げ、コンピューターを立ちあげると、名簿記録を探した。

「・・・あつ、いる。北海道水産大臣の保佐と、・・・金田知事の補佐、鷺田の娘。」

「由美・・・」

仁志の言葉に、三人は由美の方を見ると、由美は体を震わせ、その場に腰を付いていた。

その頃、厨房にも武装グループが突入し、料理人を確保し、その武装グループの中には新米料理人の二人も含まれていた。

「会場に集まってもらおう」

全員が、両手を上げ料理を中断し、武装集団に従う中、巨人兵築地だけが、料理を黙々と続けていた。

「おい、何をしている。・・・さつさと歩け」

「ああ？ちよつと待つてろ。今ようやく忙しくなったんだ・・・この料理が終わったなら、すぐに行く。」

「おい、ふざけるなよ。」

「ふざけるう？・・・ふざけてんのはてめえの脳味噌か？こつちは料理に命張つてんだよ。邪魔すんな。」

巨人兵に圧倒され「どうする？」と指示を仰ぐブルーソルジャー。

「仕方ない。・・・そいつが料理を終えるまで、お前はそこで待つてろ。」

側にいた二人に指示を出し、二人は嫌々、それを了解した。

一方、冷蔵庫に押し込まれた豪は、ブレーカーが落ちた事に、鼻水を垂らしながら喜び、外で一体何が起きているのかわからず。呑気に卒業式に歌わされた蛍の光をうたっていた。

「ヒヤッホい、なんでか知らんけど、電源が落ちたって事は、これ以上、空調で温度が下がらないってことだ！・・・ってあれ？空調止まったら駄目だろ！窒息しちまう！」

糠喜びに終わった豪は、再び扉を叩き「誰か助けてー」と叫んで
いた

脱出ゲーム（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
いかがでしたでしょうか？

これからも更新頑張ろうと思いますので、よろしく願います。
ご意見ご感想があればお待ちしております。

さあ、殺し合いの始まりだ。

「会場にいる皆さん。我々は、協力的な方には危害は加えません。ですが、邪魔立てする方には、我々は容赦はしない。」

会場のステージにライトを当て、ブルーソルジャーの幹部だと名乗る男は、保佐と鷺田の娘に出てくるように言ってきた。

武装集団は、テーブルクロスの下に誰かが隠れていないか探し、事実隠れていた奴は、中央に行けと指示していた。

「おい、やばいって・・・こつちにもそろそろ敵が来るぞ」

ホテルボーイの三人は、汚れたテーブルを片づけるふりをしながら、呟く。

「おい、お前等・・・そこで何をしている。」

銃を携帯した男が、こつちへとやって来た。

「いや、俺達アルバイトの身でして、汚れたテーブルを片づけないと、上からきつく言われるもんで・・・片付いたら、そつちに行きます。」

「そんな事はどうでもいい、さつさと中央に行け」

「そうは、言われなくても・・・」

銃を突きつけられ、後ずさりする正也。

そして、後ずさりをする際に、テーブルに足がぶつかり、机の下から「ヒイ」と言う声が漏れてしまった。

「なんだあ？」

「ああ、馬鹿！」

男は正也を突き飛ばし、テーブルクロスを引き上げた。

「ひい、お願いだから撃たないでえ！」

机の下に隠れていたのは、私服姿の仁志だった。

「なんだ、男か・・・お前等もさつさと中央に行け」

男はそう言つと、四人の前から去って行った。

「はい」。

正也が、男に適当にそう答えながら、中央に移動し始める。

「案外、うまくいくもんだな……。暗闇だからってさすがに、あいつ間抜けだな。」

正也の呟きに「さすが演劇部」と冗談を吐く幸助。

「いや、俺も演劇がこんな所で開花するとは思わなかった。……でも、一番開花したのは仁志だな。お前、演劇部はいらねえか？」

「冗談でしょ。僕のあれは素だよ。」

「けど、仁志……。お前、私服の上に制服着てて暑くなかったか？」

「えっ？だって着替えるの面倒でしょ。」

「まあ今回はそれに救われたけどな……。大丈夫だ、由美。救助が来るまでの辛抱だ。」

白いドレスをテーブルの上に敷き、仁志の制服に身を包んだ由美は、正也の励ましに黙ってうなずいた。

「保佐を発見しましたが、逃げられました。」

「なんだと、何をしていた！」

ステージに走ってやって来た部下に怒鳴り散らす幹部。

「それが、保佐の部下が武器を所持していて……。こちらに被害が出ました。」

「部下か……。何人だ。」

「ひ、一人です……。それがかなりの使い手で、死者が四名、負傷者は八名です。」

「一人だと……。お前はそれで逃げて帰って来たと言うのか！」

「それが、残りの小隊で追跡を試みましたが、音信が途絶えました。」

「新たな小隊を追跡に回せ！と部下に怒り、厨房からカートに大量の食べ物を載せてやってきた部下に怒鳴っていた。」

「なんだ！その料理は！」

「い、いえ、料理を作っている奴が一人いまして、冷めちまう前に喰えって言われて、俺一人じゃ無理なんで、皆さんもどうかなくて思いまして・・・」

「そこに置いておけ！それから、その料理人もこっちに連れてこい！」

部下は命令に従い、会場から駆け足で去り、幹部は「まったく、使えん奴等だ」そう言っただけ取り出し、火をつけた。

一服する幹部は、煙を吐き出すと同時に小さな咳を出した。

幹部が、咳を出したほぼ同時刻、中央に集められた人達にも数人。咳をし始める奴等が出てきた。

それは、幸助も同じだった。

「おい、どうした？幸助」

咳き込む幸助を心配し、正也が声をかけるが、「いや、大丈夫だ」と答えた。

「もうすぐだ。・・・地獄が始まる。フッフフ・・・ハーツハハハハハ！」

黒いレインコートを身にまとった男は、会場を見下ろすように下を覗きこみ、足元にはブルーソルジャーの死体がいくつも転がっていた。

「もうすぐだ・・・もうすぐ、極め切れる！」

築地はそう言いながら、素早く料理を作り、一人残ったブルーソルジャーに出来上がった料理を喰わせていた。

「もうこれ以上、喰えねえよ！」

「やかましい！料理つてのは、食べきつてようやく完成なんだよ！」
「そう言つて、俺に何皿、チャーハンを喰わせた！たまにはデザー
トも出せ！」

声を荒げるブルーソルジャーも小さく咳を洩らした。

その頃、下にうずくまり、救助を待つ豪もまた、小さく咳をしだした。

「ぶあつくしよい！ああ！こんチキシヨウ・・・」

勢いよく、くしゃみをし、鼻を啜る豪。

「風邪引いちまうじゃねえか・・・」

体を折り曲げ、寒さを耐えしのぐ豪。

「おい、幸助・・・本当に大丈夫か？顔色が悪いぞ」

咳き込む回数が次第に増え、額からは脂汗がにじみ出し始める幸助。

「ああ・・・ちよつと気分が悪くてな。」

そう言つて前かがみになる幸助。

そんな幸助を心配し、背中をさすりながら声をかける正也。

咳き込むのは幸助だけではなく、客やブルーソルジャーの中にも数人、出始めていた。

「ねえ、なんかおかしいよ。・・・幸助以外にも、咳き込む人がいる」

「そんなの関係無いだろ。・・・こんな状況なんだ、気分を悪くする奴だっているさ。」

心配症の仁志にそう伝える正也

「悪い・・・なんか腹減ってきた。」

「腹？・・・だったら、さっきブルーソルジャーの奴が持ってきた料理でも喰えばいいんじゃないか？」

幸助の顔色は、すでに血色を無くし、青白いと言つよりも緑がかった。

「そうだな・・・ちよつと俺、喰ってくるわ。」

ふらつきながら幸助は会場の隅に置かれたカートの方へ歩いて行った。

「あいつ・・・気分悪いってのに飯なんて食って大丈夫なのか？」

正也と仁志が顔を見合わせる中、由美は顔を下に俯いたまま体を震わせ、その由美に気付いたブルーソルジャーが声をかけた。

「おい、そのの！」

「やば・・・」

さらに体を震わせる由美。

近づこうとするブルーソルジャーの前に正也と仁志が立ちはだかる。

「いや、違うんですよ。こいつ、こうホテルの仕事に慣れてなくて・・・ちよつと具合が悪いだけで・・・」

二人を銃先で払いのけ、男は、由美の前に立ち、「顔を上げろ」と強い口調で言ってくる。

上げるな・・・と心の中で、思う二人。

由美は、恐る恐る顔を上げ始め、男はそんな由美の顔にライトを向けた。

ガシャーン・・・

会場で、食器が大量に割れる音が鳴り響き、由美にライトを向けていた男は、何事かと音が出た方にライトを向けた。

そこには、幸助が食べ物を食べに、行った場所で、他にも食料を食べに向かつていた人が群がり、カートを倒していた。

「な、なんだよ・・・あれ。」

地面に転がる食べ物を手でかき集め、乱暴に口に放り込む。

それは、幸助も同じだった。

「お前等！何している！」

男は銃先を、向け、食料をあさる人達に、中央に戻れと指示を出す
が、全く聞き入るうともしなかった。

男は、見せしめに銃を上に向けて威嚇射撃をしようとするが、群がる人の中に仲間がいる事に気が付いた。

明らかにおかしいと感じ始めた客からは声が出始める。

「おい、どういう事だ！・・・俺達にはなにもしないって言うてただろうが！」

会場のステージに向けて声を飛ばすが、ステージに立っていたはずの幹部もまた、喉を押さえて苦しんでいたのだ。

「ハーツハハハハハ！！」

会場全体が恐怖に押し込められる中、ステージの上から黒いレインコートを身まとった男が飛びおりてきた。

「地獄だ！地獄の始まりだ。」

男は笑いながら、喉を押さえ苦しむ幹部の元へやってきた。

「お前の苦しみ方は、まだこいつ等には早い。」

そう言つと、大きなナイフを取り出し、幹部の胸に男は突き刺した。悲鳴が会場全体を、包み込み、ブルーソルジャーの人達は、男に向けて発砲する。

男は目にも止まらぬ速さで、飛んでくる弾丸を全て交わした。

「なんだこいつ・・・」

男の異常さにソルジャー達は銃を撃つのをやめた。

「いいか！よく聞け。ここにはあるウイルスが充満した。そして、初期の症状は咳、そして過剰なまでの食欲。そいつ等はすでに喰う事しか考えられない。」

ステージに立つ男は、大声で言い放ち、姿を消した。

「そして、こいつ等はすでに喰う事しか考える事が出来ない」

次に男が現れたのは、喰い物をあさる人達の前だった。

「この食材が、費えれば次に向かってくるのは、人間・・・お前達だ。」

男はそう言つて幸助の首元を掴み、持ち上げた。

「幸助！」

正也が叫ぶが、その声は男には届いていなかった。

幸助は、男に首根っこを掴まれたと言うのに、苦しむ事はなく、なんと男の腕に噛みついていた。

そんな幸助の異常さは、行動だけではなく、顔色は完全に緑になり、目はどこを向いているのかわからなくなっていた。

「こいつ等は、四肢を切り取られようが動く。・・・お前達に助言してやろう。この化け物を殺す方法はなっ！」

男は大きな鉈をレインコートの中から取り出すと、大きく振り上げた。

「やめろーっ！」

正也が叫び、仁志は目を覆い隠した。

「首を切り落とす事だ！」

男はそう叫び、鉈を幸助の首元目かけ、振り下ろした。

「なあ、早くしてくれよ。料理まだかよ」

野菜を切り刻みながら「もうすぐだ」と築地は呟き、顔色が緑に変わりつつある男は、料理の完成を待ち望んでいた。

その男の足取りも、ふらつき、立っているのがやつの状態だった。肉の塊を、包丁で砕き、築地は「極める」と言う単語を繰り返していた。

そして、料理を完成させた築地は「極めたあ！」と大声で叫び、料理を男の足元に投げた。

男はそれに食らいにつき、マナーも関係なく犬食いでその料理を喰い散らし始めた。

「遂に極めた・・・もう料理なんてなくていいんだよな。オイ・・・次は何にしようか？」

築地は自分の満足感を満喫しながら、へらへらと笑っていた。

「駄目だよ。おい・・・それはやばいって。俺ってヤバイって・・・

でも、我慢できねえ」

調理場に置かれた中国包丁を手に取り、飯にがつく男の首根っこを掴み、調理場に男の顔を叩きつけた。

「次に極めるのはな・・・」

「お、おい・・・なんてやがる。」

まな板の上に男の顔を乗せてる築地の目は完全にいかれていた。

中国包丁を高高くあげ、叫び声を上げる男に関係なく包丁を振り下ろした。

銀色の台所は、男の血で赤く染め上がり、築地は痙攣を起こす体を乱暴に投げ「まだ、考えなくていいや。」と呟き、料理場から出ていった。

会場には、恐怖の悲鳴が響き渡り正也は、首を切り落とされた友人を見て恐怖に叫びながら、その場に腰を下ろした。

「いやーっ、幸助・・・幸助！」

由美は、指の隙間から幸助の首が飛ばされるのを見て、ヒステリックを起こし、仁志は完全に目をつぶり、その場で頭を抱え込んでいた。

「さあ、人間。俺から言えるのは以上だ。頑張つて生き残れ。」

男はそう言つと、「楽しい殺し合いの始まりだ。」と言葉を残し、姿を消した。

男の言葉を合図に、中央で怯えていた人達は出入り口へと、走り出した。

ブルーソルジャーも自分の持ち場を離れ、走り出し、数人が持ち場を離れるな！と叫ぶが、事態の収拾が無理だとわかり、逃げ出す人達に混ざって行った。

「正也！由美！・・・俺達も逃げよう！」

ヒステリックを起こし、その場で硬直する二人を無理に立たせ、仁

志達も逃げ惑う人達の集団の後を追った。

その頃、何も知らない豪は、自分を勇気づけようと、24時間で100キロを走る人を勇気づけるために歌う歌を歌い
「なんで、俺が24時間も走らなくちゃ、いけないんだよ！」
と自分に突っ込みを入れていた。

西暦20XX年、バブルが弾け経済不況に陥るのを合図に、中央政
権は地方分権を名乗り、責任転換を行った。
道州制がスタートし、地方は各々の判断で、育児や教育、消費税や
なんとやらの課税方法を組み換え、国民は、住みやすい場所に移動
を開始した。

ほとんどの人間は、安い方、住居の数が多く、住みやすい方を目指
し、中央へと移動した。

始めはそれでよかったかもしれない。だが、年月が経つにつれ、中
央は付けが回り始め、衰退の一途をたどり始めた。

原因は食料自給率である。人が集中しすぎ、海外や中央外からの輸
入に頼っていた中央では、次第に物価が上昇し、キャベツ一つがな
んと2千円にまで上った。

その分、所得が上がりはしたが、食材の高さに、主婦達は家計のや
りくりをしなければならなかった。

そんな中、中央のお偉いさんが、高い水や高い食材をまるで、普通
の喰い物かのように、自分のペットや自分で食べる映像を取られ、
経済格差の廃止を求めストライキを起こした。

下が動かねば、上はどうする事も出来ない。

中央の経済力は一気に落ちた。

さらに追い打ちをかけるかのように、北海道と北東北地方が協定を結び、中央を捨てて、自分達で輸出入を繰り返すと言った経済対策を取った。

中央の物価はさらに上昇し、記事になったお偉いさんは、海外に逃げ、中央の崩壊は秒読み状態となった。

北の地方を合図に、四国や九州、沖縄までも中央を見捨て、経済の安定を志した。

中央は、すでに衰退し、中央にいた国民は、地方に逃げようとするが、どこの地方も受け入れを拒否し続け、中央にいた人間は人間以下の生活を余儀なくされた。

中央では、それに付け込んだマフィアやヤクザに支配され、暴力が支配し始めた。

中央政権の時代は、経済不況の狼煙^{のろし}を合図に、終了した。

北と南に分けられた日本。そして、中央に置き去りにされたゴースト達。

ゴースト達は、武器を持ち、レジスタンスとして北と南に、解放を求めるよう、活動を開始した。

今回、ホテルを襲撃したブルースルジャーも、関東で旗を掲げ、南や北関係無く、襲い続けていた。

小学生の頃は、そんな事になっているとは知らず、高校に入り豪達もそれを学んだ。

そして、由美の父親も実は、中央から逃げ出し、北にやってきた事は高校生になってからようやく気付いた。

「はっ！」

昔の思い出を懐かしむ余裕のある正也がようやく意識を取り戻した。

「正也、ようやく気が付いた。」

仁志は、正也を背負い、集団の後ろの方を走っていた。

「・・・ここは？」

辺りは我先に、逃げ惑う人達ばかりで溢れかえり、仁志の横には由美の姿もあった。

「電気が入ってないから、エレベーターも全部駄目になってるんだ。・・・とにかく地上に出ないと。」

仁志は、意識を取り戻した正也を下ろし、「少し休憩」と腰を下ろした。

「正也。・・・煙草持ってる？」

「持ってる訳ないだろ。」

「私、持ってるよ。」

そう言つて由美は、煙草を取り出し仁志に渡そうとするが、二人は目を丸くして由美を見た。

「女性の奴しか持っていないけど・・・どうかした？」

「い、いや、意外だなんて思つて・・・。」

「そお？私は、仁志が吸つてる方が意外だったけど。」

「まあ、こいつの家は全員、ヘビースモーカーだからな。」

正也はそう言いながら「意外だ」と呟き、仁志は由美から煙草を受け取った。

「これ・・・夢だね。」

煙草を口に咥えながらさつきあつた出来事を思い出していた。

「あの後、全員が動き出すと同時に、緑色になった奴等が襲いかかつて来たんだ。・・・正也を背負つて逃げれたのも、奇跡だよ。」

「それに・・・幸助の死体も・・・誰かが食べてたわ・・・。」

由美はそう言いながら、その光景を思い出し思わず口を抑えた。

「幸助・・・。」

「よし、ここにいる奴等。みんな聞け！」

後ろのグループで、立ち止っていた奴等にブルーソルジャーの一人が、やってきて声を上げた。

「とにかく、ここを脱出することが先決だ。俺達で武装するんだ。この中に銃を扱える奴はいないか？」

男は自分の持つサブマシンガンを地面に置き、自分はハンドガンを手を取った。

「あのヤロ……」

正也は幸助が死んだ事や由美を拉致ろうとしていた奴に怒りを表すが、仁志と由美がそれを抑えた。

「止めよう。今は感情に流されちゃ駄目だ。……それに俺達もあの人に助けられたんだ。」

正也は、仁志の言葉に怒りを抑え、誰も手を上げない中、正也が手を上げた。

「猟銃なら、扱った事がある」

「そうか……。名前は？」

「梶原正也だ」

「俺の名前は、藤原 真矢だ。真矢と呼んでくれ。」

「止せよ。俺は、仲良くなりたいたくない。その背中に背負ってるライフル銃をよこせ。」

頭に迷彩柄のバンダナを巻いた藤原は、正也の態度に顔を歪ませながら、背中に背負っていたライフルを正也に渡した。

「他にはいないか？……女子供を守ろうとする奴はいないのか！」

その言葉に、スーツ姿のおっさんが名乗り出た。

「わ、私は……1年間、自衛軍に所属していた。主に医療が専攻だったが、……他にはいないのなら仕方あるまい……」

「名前は」

「に、西田……正弘だ。」

「銃の扱い方は？」

「か、かじった程度だ。・・・銃が怖くて、自衛軍から去った。」

藤原は、西田にサブマシンガンを渡し、扱い方を教えた。

「よし、先行は正也・・・頼めるか？」

「・・・ああ。」

「後方は、俺と西田さんです。・・・とにかく、上を目指そう。」

藤原の指示で、ライフルを持った正也が、前に立ち、その後ろに仁志や由美と言った非戦闘民が、集まり、後ろには西田とハンドガンを持った藤原が立った。

正也の先導で地下に掘られたホテルの上を目指す中、後ろでは藤原と西田が話をしていた。

「すまないな。後ろに付かせてしまって・・・おそらく、あの化物が先に来るとしたら、後ろからだ。」

「いえ、・・・私も、46です。若い人が、生き残った方がいい。」

「そうだな・・・俺も30だ。ブルーソルジャーに入って、知らない間に、こんなに年を喰ってしまった。」

藤原は、自分の胸に装備していたナイフを取り出すと、前を歩く仁志に声をかけた。

「おい、そこの。」

「はい・・・。」

「受け取れ」

そう言つて藤原は、仁志にナイフを投げ渡した。

「あの・・・これは？」

「持っている。気休めぐらいには、なるだろう。・・・横にいる彼女を守ってやれ」

「えっ？」

カップルだと勘違いされた仁志と由美は、なんとか誤解を解こうとするが、その対応が後ろを歩く二人には、仲睦まじいカップルに見えていた。

そんな中、先方で何やら悲鳴が上がるのが聞こえた。

正也は、足を止め、銃先をまっすぐに伸びる廊下へと向けた。

廊下の突き当たりから聞こえた悲鳴は断末魔に変わり、突き当たりの廊下から転がって来た女性が、緑色に化した人間に襲われている所だった。

「そんな・・・前にはいないはずだ。」

悲鳴を聞きつけやってきた藤原は、正也同様、銃を先に構えた。

「なに勘違いしてんだ。あんた？」

正也は、横で銃を構える藤原に声をかけた。

「何を勘違いしてるって？」

「あの黒力ツパが言ってただろ。・・・これはウイルスなんだ。」

「何が言いたい。」

「わかんねえのか？・・・感染してんだよ。」

突き当たりの廊下からからは、四足歩行をする緑の人間、二体が、こちらに気付き、両頬が垂れ下がった化物からは赤く滲んだよだれが、垂れ流されていた。

「・・・わかった。正也の推測があっているとすれば、この後も発生する者が出ると言う事か？」

「前の奴を見て、わかるだろ。・・・推測じゃねえ、確証だ。生物学専攻を舐めんなよ。」

緑の怪物は、一気に駆け出し始めた。

「その事については、後回しにしよう。・・・撃てるか？」

「撃てなきゃ、銃なんて貰ってねえよ。」

そう言つて正也は、怪物に向かって引き金を引いた。

地上まであと、30階

北海道の都市部から、車で約二時間弱、高速を使えば、一時間四十分で到着する。某ホテルは、地上三十階、地下に關しては現在も拡張中で、なんと言つてもこのホテルの醍醐味は、地下に造られた吹き抜けの会場である。

地上から見下ろす事も出来、地下数十メートルに掘り下げられたホールではいくつもの席が揃えられ、政治家達や資産家が毎晩のようにワイワイ楽しんでいる。

だが、そんなホテルもレジスタンスに占拠され、今では人間が化物に生まれ変わると言つた事態に陥り、惨劇が繰り返されていた。

現在、正也達がいる場所は、地下三十階。そして、豪が閉じ込められている冷蔵庫は、地下四十五階。

果たして、彼等の運命や、いかに！

豪 「後半へ続く。」

正也 「いや、まだAパートすらやってないから」

仁志 「何、そんなやり取りしてんのさ、さつさと始めるよ。」

由美 「さつさと冷蔵庫の中、戻れ！」

豪 「あつ、酷い！」

正也の撃つた弾丸は、化物の左肩に命中し、化物の腕は地面に落ちた。

だが、化物は気にする事なく、こちらに向かつてくる。

「言つてただろ！頭を狙え！」

藤原は、そう言いながら、引き金を引き、向かってくる化物の頭に命中させ、化物は勢い余ってその場で何度も転がった。

「わかってるよ！」

正也は、再び引き金を引き、化物頭は吹き飛んだ。

「・・・さて、さっきの話の続きと行こうか。」

藤原が口を開こうとするが、後ろ方で自動小銃が、発砲する音が鳴り響き、西田が交戦中だと言う事に気付いた。

「正也！お前は、こいつ等を連れて先に行け！・・・後から追いかける！」

「わかった。・・・行くぞ！」

正也の掛け声で、駆け足で正也に付いていく人達。

そんな人の合間を縫って、藤原は西田の元へと向かって行つた。

「うわー！っ！く、来るな！」

西田は、弾を無駄撃ちし続け、後ろからやってくる化物に撃つていた。

「西田！頭を狙え！」

西田に合流した藤原は、向こうにいる化物の数に目を疑った。

「む、無理ですよ。・・・頭なんて、当たる訳がない。」

勝手に弾を打ち出す銃は、照準が狂いやすく、初心者には最適だが、急所を狙うのは至難の業だ。

「よし、西田！そのまま弾幕を張り続けろ！」

「は、はい。」

西田は銃を撃ち続け、素早く装填をして銃を撃ち続けた。

その間に藤原は、両サイドにプラスチック爆弾を張り付け、コードを差し込んだ。

コードが切れないように、慎重に伸ばしながら、起爆スイッチに繋がった。

「西田あ！走れ！」

「はい！」

西田は後ろを顧みず一目散に走り、藤原は、化物がこちらにやって

くるタイミングを見計らいながら、起爆スイッチに手をかけた。

その瞬間、藤原は西田を掴み、ラグビーでトライするかのように、西田を抱え込んで地面に付した。

大きな炸裂音と後ろで廊下の壁が、崩れる音が鳴り響き、化物は瓦礫の下敷きになった。

「ハハ・・・やった。」

「ああ、よくやった。西田」

年上だと言う事を忘れ、藤原は西田の頭を軽く叩き、西田は照れながら、自分の頭を掻いた。

その時、藤原の眼には、西田の腕の裏側に緑色の発疹が薄っすらと出ている事に気が付いた。

「西田・・・。」

「はい？どうかしましたか？」

「・・・いや、なんでもない。早く合流しよう。」

「・・・？・・・はい。」

感染してる。だが、まだ症状は出ていない・・・まだ様子を見よう。なるべく普通に振舞おうとする藤原だが、自然と西田から一步離れて歩くようになっていた。

謎のウイルスについて、予想だけでもしている人間は、正也以外に、一体何人いるのだろうか・・・？

その頃、正也達は藤原達に合流しようと、階段の前で小休憩を取っていた。

「仁志？・・・どうかした？」

自分の袖を捲り、腕の裏側を見ている仁志に由美は声をかけるが、仁志は慌てて袖を下ろした。

「うっん。・・・なんでもないよ。」

そう言う仁志の腕の裏側にも緑色の発疹が一つ、出ていた。

「よさくはきーをきる・・・ヘイヘイホー、ヘイヘイホー・・・虚しいよ虚しいよ。」

空調は切れているが、上のボイラーからは常に新鮮な空気が入ってくる事に気が付いた豪は、とにかく知っている歌を歌いきろうと、サビだけでも歌うが、段々と歌の内容もネガティブになって行った。「あなたは・・・もお、忘れたかしら・・・赤い、手ぬぐいーマフラーにして・・・二人でいいた横丁の風呂屋・・・一緒に出よおねって言ったのに」

なんだか歌を歌っている自分を想像するだけで、吐き気を催し、歌を歌うことすら止めた。

「はあ、なんで誰も気付いてくれないんだろ・・・」

「いたぞ！保住だ！」

地下で事件が起きている事を知らないブルーソルジャーの隊員は、背が低いのに無駄に横に長く、顔と首が一体化して、ガマガエルのような容姿をした保住大臣を発見していた。

廊下をふんぞり返りながら、歩く保住に隊列を乱さぬまま、隊員は銃を構えた。

「・・・フン、まったく。ごみくず以下の分際で、ワシを捕えようと言うのか。」

「黙れ！俺達の要求を飲んでもらうよう。俺達の人質となってもらう・・・こっちに来い！」

「ゴミめ等が」

隊員の前に、一人の女性が立ちはだかり、右手には大きく反り上が

ったナイフを手にしていた。

「構わん！撃て！」

隊員は女性に向けて引き金を引いた。銃口から弾が飛び出し、女性に向かって飛んでいく。

だが、女性は、構えたナイフで、その弾丸を全て切り落とした。

何が起こったのかわからず隊員達は、どよめくが、下に転がる二つに割れた弾を見て「化物か」と言葉を出し、再び引き金を引いた。

女性は、今度は弾を切り落とし、弾丸を避けながら、隊員達に近づき、横一線に並ぶ隊員の一人にナイフを突き刺した。

「ば、馬鹿な・・・」

最後の隊員がそう呟き、倒れた頃には、壁には血が飛び散り、女性の顔にも隊員の血が飛び散っていた。

「風。帰るぞ、案内しろ」

スキンヘッドの保住は、血まみれの女性の横を通り過ぎ、下に転がる死体をワザと踏みつけるかのように、廊下を突き進んでいった。

保住の態度に風と呼ばれた女性は、全く表情を変えずに、軽く一礼し保坂に付いていった。

「これは一体・・・どういうことだ？」

築地は、大きな包丁を背中に背負い、会場にやってきたが、見るも無残な光景に目を奪われていた。

「一体全体、どうなってるんだ？」

目の前の光景に、目を奪われながら築地は会場の中央へと進んだ。

「これは・・・」

下には、緑の肌をした人間の死体や、食い散らかされた人の死体が転がっていた。

「なんじゃこりゃー！！・・・最っ高じゃねえか！」

ステージに上がり、胸にナイフが刺さった男を邪魔と言わんばかりに蹴飛ばし、大きな声でそう叫んだ。

「おいゝなんだよこれ。俺のオンステージって奴かゝおい。やばいよ、やべーよ。．．．いいねえ、こういう展開、怖くてスキップしちゃいそうだ。」

足取り軽やかに、築地は足踏みし、会場の出入り口へと向かい、扉を開くと緑の化物が群がっていた。

逃げ切れなかった客を喰い散らかし、もはや死体は、人の形すらしていなかった。

「おうおう、やってくれるじゃないの。」

築地の顔には笑みがこぼれ、化け物どもに向かって、怒涛の声を上げながら背中に刺してあった包丁を両手に握み、切り込んでいった。

「正也、君は生物学を専攻していると言ったね。」

「．．．ああ、主に細菌やウイルスについて学んでいる。」

二人が、正也達に合流し、再び歩き始める集団で前を歩く正也に、藤原は声をかけた。

「仮にだ。．．．全員が、感染してたとして、何故発症する時間帯がずれる？これは明らかに、見た事がない症状だ。抗体が無い我々にとっては、100%感染するんじゃないのか？」

「簡単な事だ。人間すべてが同じように行動する訳じゃない。．．．例えば、肉類を食べた人間と魚類を食べた人間では、発症する時間帯がずれる事がある。もしくは、何らかの行動を行った場合に感染する物だつてある。HIVなんかは、主に性行為で感染する。．．．今回のウィルスで発症の危険性がある行為は、食す事だ。あの怪物

が常時、共通して行ふ事は、食事だ。」

「馬鹿な・・・なら、俺達に餓死しろと言うのか？」

「これは、あくまで推測だ。・・・現に俺だってパーティ会場で飯を食ってた。だが、まだ発症はしていない。」

「なら、このウイルスはどこから来た？ルートはどこだ。」

「わからん。誰かがウイルスステロを行ったのかもしれない。・・・どっかの誰かさんみたくな」

正也の嫌味な発言に顔を歪ませるが、藤原はそれを噛み殺した。

「問題なのは、感染ルートだ。」

「感染ルート？どうやって次の人に移すかという事か？」

「ああ・・・飛沫感染なら、何とか防げる。だが、これは明らかに空気感染だ。防ぎようがない。俺達がいつ発症してもおかしくないんだ。」

「俺達も、そのウイルスを体の中に持っていると言うのか？」

「そうだ。つまり、俺達は歩く病原菌なのさ。歩けば歩くだけウイルスを撒布する」

「そうか・・・なら緑の発疹が出ていてもおかしくはないのか・・・」

意識して距離を置いていた西田に申し訳ないと思いたため息を漏らす藤原。

「何？・・・発疹があるのか」

「いや、俺じゃない。西田さんだ。」

正也は、藤原の言葉を聞くと、方向転換し、人だかりを割って行った。

その光景を目にした仁志と由美は、正也の顔が恐ろしくなっている事に気が付き、正也の後を追った。

「西田さん！」

後ろを警戒する西田に、正也は声をかける。

だが、本人が自覚していない事を伝えるのを忘れていた藤原は、正也を止めようとするが、それを振り切って正也は西田に近づいた。

「発疹が、あるんですか？」

「発疹？何の事だい？」

「とぼけないで下さい！」

かなり力の籠った声に西田は驚き、藤原は正也を止めようとする。

「止せ、正也！・・・西田さんは知らないんだ。俺の見間違いかもしれない」

「だったら、今確認しましょう。」

西田は何を言っているのかわからない状態で、藤原に袖を捲ってくれと頼まれ、西田は言われるがまま、袖をまくった。

捲られた腕には、小さかったはずの発疹が、今では楕円形に広がり、手のひらサイズにまで成長していた。

「藤原・・・これが見間違いだって言うのかよ。」

「そんな・・・俺が見た時は、虫刺され程度の大きさだった。」

西田本人も、自分の体に異常がある事に今気付き、その場に膝まついた。

「第二症状だ・・・。」

西田がそう呟き、正也は西田から銃を取り上げた。

「西田さん。あなたも医療を専攻してた身だ。・・・俺が今からする事、許してくれますか？」

「・・・ああ。・・・ああ嫌、駄目だ。」

二人の会話に付いていけない藤原。

そして、後ろで西田の腕にある大きな痣を目にした由美は、叫ぼうとする自分を抑え込み、口を抑え、仁志は、自分の痣と同じ症状の出ている事に胸が締め付けられた。

「おい、正也。何する気だ。俺にわかるように説明しろ。」

「簡単です。・・・ここで西田さんとは、お別れです。」

そう言つて正也は、銃を西田に向けようとする。

その行動に、藤原は思わず正也の構える銃口を上に向けた。

「馬鹿っ！何考えている！」

「このウイルスは、進化型だ！・・・第二症状が出ている奴がいる

んだ。一緒に行動する訳にはいかない！」

「進化型だと？何言ってるんだ。」

「このウィルスは、体内に入って変化してるんだ。初期のウィルスは、人の肌を緑にし、化物に変えた。そして、第二症状がこれだ。発症する前に、潰すしかない！体内にいる状態が一番、ウィルスが死滅しやすいんだ。このまま西田さんが、発症でもしてみろ！被害は拡大する！どんな症状が出るかもわからないんだぞ！」

言い争う二人を沈めたのは、西田だった。

「私の体を縛ってくれ。」

「なんだと？」

「私も医療を専攻していた身だ。どのような症状が出たのか、逐一、君達に報告をしよう。」

「どうやってだ？」

「誰かのパソコンとリンクさせる。私の声でメモ書きが出来るように」

西田の提案に、仁志のパソコンと西田のパソコンを繋げ、手足を縛った西田を正也達は、その場に放棄し、先へ進んでいった。

「……体の発疹は遂に全体に及んできた。食欲に絶えず襲われているが、手足が縛られているお陰か、まだ意識はハッキリとしている。おそらく、私の推測だが、やはり食べる事が意識を失う最大の分岐点なのかもしれない……。ああ、最悪だ。化物がやってきた。」

仁志のパソコンには、西田の悲鳴が最後に聞こえ、音信は途絶えた。「感情なんて、ここでは無意味さ……。」

「あしゝたが、あるつさ明日がある。若い僕には、夢がある・
・とくゝにないよ。意味がないよ。れいゝぞうこの中だから・
・いい加減出しやがれ！」

遂にブチ切れた豪は、後ろにある壁に思いっきりパンチを喰らわせた。

冷蔵庫の外にも届くような音が響き渡り、調理場にいたある男が、その音に気が付いた。

「ああ！もう、いい加減、俺だって怒るぜ！・・・なんで二話以上も冷蔵庫に籠りっぱなしなんだよ！・・・つか何、二話って！何の事！？」

豪の叫び声は、冷蔵庫を虚しく木霊し、何の事？という言葉が、印象的に鳴り響いた。

「あゝ、俺はもうここで死ぬんだ！・・・今年で二十の大台を超えると言つのに、その前に俺は死ぬんだゝ。」

『死を求めるか。生を求めるか。』

豪の心の中に誰かの声が響き渡る。

「なんだ？遂に幻聴まで聞こえるようになったか？」

『生を求め、死ぬも又良しか』

「いやいや、良くないだろ。」

『ならば死してもなお、生を求めるか。』

「んゝどうだろうな。死んでみないとわからねえからな・・・」

豪の答えに、頭の中の住人は「フフフ」と笑い始める。

『死してから答えを求めるか、それもよからう。』

「俺って心の中で、なに哲学気取ってんだよ。・・・恥ずかしっ」

心の中からの返事はそれ以降なく、再び替え歌を歌い始めようとする豪だが、冷蔵庫のドアノブを誰か触れる音が、聞こえた。

「えっ、マジ？」

ようやく冷蔵庫に誰かが、食材を求めてやって来たと思い、料理人の誰かが現れるものだろうと考えていた豪。

それが、例え巨人兵築地であったとしても、今のこのテンションで

あれば、喜んであなたに、ケツの穴を向けよう！・・・ごめん、それは嘘。

ガチャ・・・ギイイ・・・

「助かりました。本当にありがとうございます！」

洋式のホラー映画で扉が開かれたにも関わらず、豪は頭を深々と下げ、頭を上げるとそこに立っていたのは、調理服姿の誰かではなく、黒いレインコートを頭から被る築地よりも大きな男だった。

「あ、あの・・・助けてもらって、言うのもなんですが、ここって関係者以外、立ち入り禁止なんですけど・・・」

頭からかぶったレインコートの下から見えた彼の顔は、緑色の肌をし赤い瞳が、豪の姿を見てニヤリと笑っていた。

「ま、まあ・・・もしかして、迷子みたいなものですかね？自分も、ちよつと自信がないですけど、道案内くらいは、しますよ・・・って、暗！」

当たりの電気は落ち、ある光と言ったらやけに大量にある非常灯の電気ぐらいだった。

「ほお、私の姿を見ても動じずか・・・」

男の言葉に、肩をすくませる豪。

「だったら、俺の顔の傷を見て、何も言ってこない、あなただってそうでしょ。」

「フフフ・・・そうだったな。」

心の中で聞こえた幻聴と同じ笑い方をする人だな・・・

豪は首をかしげながら、男の姿を見て黒いレインコートに何やら液体が付着している事に気が付き、目を凝らし始める。

「んん？」

黒いカップにこの暗さ、うまく見る事が出来ないが、昔、自分の学生服が血まみれになった事を思い出し、男のカップに付着している液体が、血だと言う事に気が付いた。

「これ・・・血ですか？」

豪の問いかけに「フフフフ」と笑いだす男に、不信感を抱き始めた。じつくりと見ようと豪は、カップに顔を近づけ、目を細める。

そんな中、男は豪に顔を近づけ、匂いを嗅いできた。

「フフフフ・・・いい匂いだ。」

「えっ・・・」

築地といい、今回の男といい、自分には、そっち系の男が群がりやすい体質なのだろうかと心を痛める豪。

「ハッ・・・まてよ。」

先ほど、もし築地だったらケツを向けると言った事を思い出し、体を強張らせる豪。

「フフフフ・・・何を怯えている。」

「えっ・・・何ってそりゃ・・・。俺、そっちには興味ないんで・・・」

「フフフフ・・・何を言っている。」

そう言いながら、男は豪に歩み寄り、豪は思わず後ろに後ずさりし始める。

「いや・・・ケツだけは勘弁して・・・俺は、掘られるよりも別の性別を掘る方が興味あるんで・・・」

下に置かれた段ボールに足を取られ、転ぶ豪。

そんな豪を見下ろす男は、レインコートの中をモゾモゾと探り始める。

ええっ！まさか、おもちゃ携帯！

「これをお前に託そう。」

男はそう言つと、豪の足元に漆黒の色をした日本刀だった。

「私にも抜く事が出来なかった。代物だ・・・さあ、手に取ってみる。」

「・・・えっ？」

「答えを探してみる」

「答え？」

「そつだ。」

足元に置かれた刀は、黒々と光り輝き、周りの光を吸い込むかのように暗黒を現していた。

しかし、何故だろう。先ほどから妙に体がだるかったが、刀を目にすると、体が軽く感じられる。

刀からは異様に魅力を感じ始め、豪は気付かない間に刀に手を伸ばしていた。

「その刀は、人の魂を喰らう。主はどうだ。喰われるか、喰い散らすか。」

男の言葉は耳にも入らず、刀に魅了され、我を忘れていた。

豪は、刀を手にし、柄の部分を力強く掴んだ。

「又ツ・・・」

柄を掴んだ途端、豪の体の中に、何かが流れ込んでくる気がした。

豪の柄を掴んだ右手を放そうとするが、手は離れず、手には毛細血管までが肌の上に浮き出し始めた。

痛みに豪は耐えようと声を洩らし始める。

浮かび上がった血管は、次第に腕から体全体に回り始め、声を耐え忍んでいた豪は、体中に走る激痛に声を荒げた。

「だあああああああー！！！」

苦しむ豪を見て、男の笑みはさらに深く刻み込まれる。

「さあ、答えを探せ。そのためには一度死ぬ事だ。」

豪は、叫び声を出し続け、体をくの字に折り曲げ体の激痛に耐えようとする。

だが、豪の心の中に入り込んでくる人の叫び声、そして恐怖、痛み、どんなに耐え忍ぼうとそれを防ぐ事は出来なかった。

「だああああああ・・・アッハハハハハハッ！」

豪の叫び声は、次第に笑い声へと変わり始めた。

豪の反応を見て、男は眉をひそめた。だが、豪の高笑いに近い笑いに男も笑い声を出し始める。

「フフフフ・・・苦痛を笑いに変える男か、面白い」

男は、コートの袖から二丁の銃を出し、両手に構えた。

笑い声の止んだ豪は、しばらくの間、仰向けに倒れたまま動く事はなかったが、一度体をビクンと大きく痙攣させると、まるで糸に吊るされるかのように、両手をダラリと垂らしたまま、豪は立ち上がった。

豪の顔からは表情を読み取ることが出来ず、男の方に振り返った豪は掴んでた刀を勢いよく横に引き抜いた。

「ヘッ、ヘヘヘ・・・」

豪の口からは乾いた笑い声が聞こえ始め、男は豪に向けて銃を構えた。

「さて・・・初期状態の貴様で、俺をどこまで楽しませてくれるだろうか・・・」

男は、銃の引き金に力を込めた途端、豪は刀を両手に構え、冷蔵庫の中から飛び出した。

引き金を引く前に、襲いかかってくる豪に男は、横に飛び退き、その際に豪に向けて銃口を向け引き金を引いた。

豪は、飛んでくる弾に目もくれず、刀を数回振るうと、金属同士がぶつかり合う音が数回、調理場に鳴り響き、豪の足元には弾丸が落ちた。

「ヒヤッハアッ！」

豪の口を引き裂くような笑みを作りながら、男に向けて走り出す。

男は向かってくる豪に向かつて銃弾を撃ち込むが、それを全て見切り、豪の間合いに男を捕えた。

豪は調理場の狭い道で刀を大きく振るい、横に置かれたキッチンや調理器具を切り崩しながら、男に襲いかかった。

「素晴らしい。この刀を抜ける以外に、戦闘技術もある」

男もカップの下で、豪の強さに喜びを感じ、笑みをこぼす。

豪の攻撃を全て見切り、台所の上や部屋を縦横無尽に使う男。

だが、豪は邪魔な物を全て切り崩し、男の後を追った。

「だが、まだ初期では甘いな」

壁に追い込まれた男はそう呟き、突き出される刀を伏せて交わした。

刀は、壁に突き刺さり、男は豪のから空きの腹にひざ蹴りを喰らわせた。

「がつ・・・」

「俺を喰うには、まだ早い」

豪は力を無くし、その場に倒れ、男は「いいの物見つけた」と呟き姿を消した。

ちょっとしたスリル（前書き）

あらずじに書かれていた高校生がようやく登場します。

ちよつとしたスリル

豪 「ようやく、冷蔵庫の外に出られたと思えば、この様だよ・

・」

築地 「にしても、お前強いな。俺と殺^やり合おうか。」

豪 「えっ、・・い、いえ、俺、男とやり合うなんて、興味ないんで」

由美 「ええ、それ嘘でしょ。いつも淳とデレデレしてたじゃない」

豪 「違う！あれは、じゃれ合ってただけだ！変な誤解するなよ

！」

正也 「いや、あれは俺達から見ても、結構進んでるように見えてたぞ。」

豪 「そんなあゝ・・・正也」

築地 「つか、お二方、横やりを入れるようで申し訳ないが、誰？」

二人 「どちらかと言えば、そちらこそ・・・だれ？」

築地 「豪、どういう事だ？」

豪 「知らないっすよ・・・」

先を行っていた集団も、武装をしバリケードを作り、敵を追いやつていたのだろつ。

そのため、バリケードは健在だが、内部で発症者が出たらしい、地面には人間の物と思われる肉片や骨が転がっていた。

「第二症状の発症者が出たのかもしれない。・・・俺達も気をつけないと。」

正也の言葉に全員の気持ちは引き締まり、下に転がる銃やナイフを拾い集め、集団にいる大体の男達に武器が手渡された。

これまで数度、化物に襲われはしたが、今の所、被害者は西田一人と快調な滑り出しで、正也達は地上へと向かっていた。

だが、問題は、いつ誰が、再び第二症状を発病するかだった。

正也と藤原は、内密に周りに注意を配り、発疹が出ている物がいないか、見回っていた。

そんな中、一人集団から離れた仁志は、誰もいない事を確認し、自分の腕裾を捲りあげた。

発疹は、かなり広がり、右腕全体を覆うのも時間の問題だと、そして、隠し切れるのもそろそろ無理だと、自覚し始めていた。

「仁志？大丈夫？」

心配してやってきた由美のに驚き、仁志は再び袖を戻し、由美に振り返った。

「どうしたの？顔色、悪いよ・・・」

「うっん、大丈夫だよ。・・・ちよつと汗疹が酷くてさ。痒いんだよ。」

「ふっん、まるで子供みたいね」

「そ、そうだね。・・・さあ、そろそろ出発するみたいだ。俺達も行くっ」

仁志は、由美の横を通り過ぎようとし、そんな中、由美は仁志の耳元でこう呟いた。

「私、言わないからね。」

「えっ？何を？」

「仁志の腕に、緑の発疹が出ている事よ。」

由美の言葉に体全体に鳥肌が立つ仁志。

「今の正也に言ったら、きっと仁志が相手でも、置いてきぼりにされちゃうでしょ。」

「で、でも・・・」

「大丈夫、私が庇ってあげるから。豪と淳がいない時は、いつも私が仁志の守り神だったからね」

思い悩む仁志に笑顔を見せ、正也達に呼ばれ由美は集団の方へと歩き出した。

そんな由美も、集団の方へ向かう途中、小さな咳を数回こぼしていた。

（数十分前）

手足を縛られた西田は、化物に取り囲まれ絶体絶命の大ピンチに襲われていた。

「や、やめてくれ・・・」

西田の顔にもすでに発疹は行きわたり、体は完全に緑色に変色していた。

だが、西田は自我をハッキリと持ち、目の前に自分を囲みこむように、立つ化物に怯えていた。

手足を縛った布を外そうと試みるが、がっしりと縛られ、自分できつく縛りあげるように要求した事を深く後悔していた。

化物たちは、一斉に西田に飛び掛かり、西田は悲鳴を上げた。

「ゴルアアアアア！」

人間離れた掛け声と共に、飛びかかろうとする化物達の上に飛び上がって来たのは築地だった。

両手に持った大きな包丁で、いきなり二体の化物を真っ二つに切り裂き、その光景に化物達も築地に目を奪われた。

「さあさあさあ、次に死にたい奴は！だれ〜だあ？」

襲いかかる化物を次々と切り刻む、築地。

「ハーハツハツハハハハ！」

化物を切り刻むのをまるで楽しむかのように、築地は笑い声を上げ、最後の敵を切り崩した所でようやく、西田に気が付いた。

「ん〜・・・拘束プレイを楽しんでる所、申し訳ないが、出口はどつちだ？」

目の前で起きた光景に啞然とする西田。

そして、そんな西田の手足を縛っている布を築地は包丁で切った。

「き、君は・・・感染していないのか？」

「訳がわからん。・・・その肌の色お、お前も化物の仲間か〜？」

「ち、違う。私は・・・」

そう言う西田は、今の自分が人食行動に移らない事に気が付いた。

「まさか・・・食欲が収まった・・・。」

自分の体の異変に気が付き、今の状態をパソコンに収める西田。

「か、観測を開始してから、約三十分、襲われ続けていた食欲が低下した。今の所、体の肌が緑色以外には、異常は発見されない。・・・

しかし、何故だろう妙に体が軽い」

西田は腕に付けたパソコンに今の現状を報告するが、正也の友人のパソコンとの通信が付かなかった。

「・・・通信が切れてしまったのか？ああ・・・そうだ、君も一緒に。」

パソコンに目を取られていた西田は、助けてくれた恩人に行動を共にしようと話しかけるが、築地の姿はどこにもなかった。

（現在、調理場）

「だあああああつ！いてえな！チキシヨウ！」

意識を取り戻した豪は、蹴られた腹を抑えながら、勢いよく状態を起こした。

「……あり？」

何か鳩尾に強烈な何かを喰らった覚えはあるが、いつのまに冷蔵庫から脱出できたのか、謎だった。

しかも、薄暗い調理場は、鋭利な刃物で切り落とされたかのように、綺麗に崩れおちていた。

「……何が起きたんだ？」

しかし、照明が落とされていると言う事は、営業が終了したのかもしない。

「もしかして、俺……忘れられてたとか？」

辺りに人の気配は、感じ取れない。どうやら本当に自分を忘れて営業を終了したらしい。

「でも、普通……最終確認するよな……でも、忙しかったからなそんな気力がなかったのかも……」

目の前には、壊された台所や食器が散らばっていると言うのに、豪はなるべくネガティブな発想はしないでおこうと、心に誓った。

「さてと……じゃあ俺も、帰りますか。」

下に転がる破片などを、足でどかしながら、豪は薄暗闇の中、ロッカールームへと向かった。

廊下の足元と天井に薄っすらと光る非常灯を支えに、豪はロッカールームに向かい、自分のロッカーを開くと同時に、幸助達のロッカーも開いた。

ロッカーには、まだ彼等の荷物が残っており、何かが起きた事は間違いなかった。

豪は、とにかくこの動きずらい服を自分の服と交換しようと、自分のロッカーの前で上着を脱ぎ始める。

調理場の温度と湿気はかなりの物で、白い上着の下は、黒いランニ

ングシャツのみで筋骨隆々をまるで見せつけるかのように、豪は着替えを始めた。

ゴトツ・・・

だが、その時、何やら物音が聞こえた。

「ん？」

豪は、バックからペンライトを取り出し、物音の聞こえた方へと歩いていく。

「誰か、いるのか？」

今はペンライトの明りのみが、豪の視界でちょっとしたスリルを味わっていた。

「もしかして、ネズミか？」

遊び半分で言っただつもりだった。

「チ、チュウ・・・」

「ネズミが、はいそうです。って返事をするか！」

豪は地鳴りを起こしながら、足をすすめ、チュウと答えた方を目指した。

ペンライトは、下を照らし、両サイドのロッカーの下部分を映し出しながら、豪の視界は進んでいく。

そんな中、ロッカーから明らかに女性の物と思われるスカートが扉の下からはみ出ているのに気が付いた。

「あ、あの・・・」

豪の問いかけに、スカートは一瞬ビクつき、再びロッカーから音をたてた。

「頭隠して尻隠さずってのは、まさにこの事だな。」

そう言うと、ロッカーは、下に出ているスカートを引っ張り、中に入っていた。

「いや、もう無理だつて・・・」

「む、無理じゃない！」

「もう答えちゃってるじゃん！」

豪はそう言つと、ロッカーの扉を開いた。

すると、バランスを崩した女性が、ロッカーから転がり出てきた。

「キヤア・・・」

「ああ、ごめん。大丈夫？・・・つて高校生？」

仰向けにドンと倒れ、近くの高校の学生服を着た女性は、豪の顔を見た途端、立ち上がり豪を睨みつけてきた。

「この・・・レジスタンスめ！」

そう言つて、女性は両手を前に構えると、豪の顔に蹴りを入れてきた。

「ちょ、ちょ、ちょ、ストップ！」

豪は、飛んでくる蹴りを手で止め、「問答無用！」と彼女はさらに攻撃をしてくる。

「わ、・・・ちょ・・・ちよつと！・・・つて、誰がレジスタンスじゃない！」

「何言つてんのよ！その顔はどうみても、レジスタンスじゃない！極真空手三段を舐めんなよ！」

確かに、彼女の体さばきは、かなりの物で、豪は防ぐ事で精一杯だった。だが・・・

「俺だつて柔道三段じゃ！舐めんなよ！」

豪はそう言つて、彼女の胸倉を掴むと、大きな体を生かし、彼女の片足を弾くとそのまま大外刈りを喰らわせた。

彼女は再び仰向けに倒れた。

「いやー！襲われるーっ！」

彼女は、上にいる豪を両足で蹴り飛ばし、豪は後ろによるめいた。

彼女は、再び立ち上がり、豪に向かい構えた。

「馬鹿！俺はレジスタンスじゃない！・・・よく見る。俺は料理人だ！」

そう言つて自分の白いズボンをペンライトで照らした。

「……あれ？」

「あれ？じゃない！……なんなんだ、いきなり！人を突然、レジスタンス呼ばわりして、あれ？の前に、言う事は？」

「ええつと……ごめんなさい？」

「そう。……で？なんでここに高校生がいるんだ？ここ高校生はバイト雇つてないぞ。」

「それは……その、年齢偽つてて……。ここの自給いいし……」

「年齢偽つてるのに、学生服？」

「遅刻しそうだったの！まあ実際、遅刻しちやつただけ……。つてそうじゃない、レジスタンスは？」

「だから、さつきから何言つてんだ。レジスタンスがホテルに泊つてるとでも言いたいのか？」

「……えつ？もしかして、何も知らないの。」

「んん？」

彼女が言うには、急ぎ更衣室にやってきた途端、会場の方で癩癪玉が弾け飛ぶ音が聞こえ、それと同時に、銃を構え目だし帽をかぶつた男達が、男子更衣室から飛び出し、向かいにある小休憩を取る部屋に入り、レジスタンスを名乗り、従業員を拘束し、会場の方へと連れて行つたと言うのだ。

彼女は物陰に隠れ、見ていると照明まで落とされ、これはただ事で無いと感じ取つた彼女は、男子更衣室の空いているロッカーに隠れていたと言うのだ。

「なんで、あえて男子更衣室なの？」

「そりゃ、彼等が隠れていた場所だもの。もう一度、廻ってくる事はないでしょ？」

「うん……。確かに、頭いいな。」

「まあね。」

「ところで、名前は？」

「人に名を尋ねる前に」

「自分から名乗れってか・・・」
「そう」

「俺は、真西豪。大学生だ」

「私は、上条・・・高校生です。」

「ん？下の名前は？」

「・・・下の名前は嫌いなもの。」

「ええ、いいじゃん。教えてや」

大学生のノリに少々戸惑う上条。

「嫌、絶対に笑うもん」

「わかった。面白ければ、一生懸命笑おう。」

「普通、笑わないって言うと思うんだけど！」

「大丈夫だ。くだらなけりゃ、絶対笑わないから。」

「し、下の名前は・・・ひろし仁」

恥ずかしがりながら上条は、自分の名前を呟き、豪はそれに対し、納得したかのように首を縦に振った。

「そっか・・・上条は、男だったのか・・・」

「ほら、絶対言うと思った！」

「冗談だよ。・・・そんな可愛めんどい顔した男なんている訳ないだろ」

上条の反応を見て、笑いながらそう言うのと、思わず頬を赤く染める上条。

「それは・・・言われた事なかった」

「あ？何だって？」

「何でもない！」

「じゃあ、よろしくな。仁」

「よろしくって何に？」

「何ってここから脱出するんだよ。俺も運がいい事に、ここに来るまでにレジスタンスに会っていない。もしかしたら、目的の物を見つけて、レジスタンスがいなくなってるかも、しれないだろ？」

「ねえ、聞きたいんだけど、真西豪は・・・」

フルネームで言い始める上条に、豪は「豪でいいよ」と答え、上条

は改めて聞きなおした。

「豪は、いままでどこにいたの？」

「・・・れ、冷蔵庫の中に閉じ込められてた」

アルバイト中に、冷蔵庫に閉じ込められた経緯を話し終わると、上条は腹を抱えて笑いだした。

「うつそ、あり得ない！・・・ばつかじゃないの？」

「うるせえ！遅刻してきた奴に言われたくないね」

「ところで、大学生とか言ってたけど。どこの大学？」

「ん？北ノ大学だけど」

「ゲッ・・・私の志望校じゃん・・・ちなみに学科は？」

「教育・・・」

「冗談でしょ！なんでよりも寄って、同じ学科なのよ！その顔で先生にでもなるつもり？」

「わ、悪いかよ！そっちこそ、そんな捻くれた性格で、先生になるつもりか！」

「私は、幼稚園の方だもん！」

「それこそ、最悪だ。子供に悪影響だ！」

「うるさいっ！」

「ハハハッ・・・凄い、素晴らしい・・・観察を開始してから一時間経過した。肌は完全に緑色に変色してしまったが、自分の体が嘘のように、動く」

西田は、腕に付けたパソコンに現状を報告しながら、前から向かつ

てくる化物に飛び掛かっていた。

襲いかかる化物を片手で抑えつけると、西田を喰おうと口を開き前に大きく出す化物。

そんな化物の口を両手で抑えると、化物の顎を上下に引き裂いた。

「凄い、まるでマジックテープを剥がすかのような感覚で、敵を倒す事が出来る」

自分の性格が変わってしまった事には気付かず、西田は藤原達の後を追いかけた。

誰一人被害者が出なかった正也達にもついに被害者が出た。
第一症状が発症した女性が、目の前にいた男の喉元に食らいついたのだ。

男は、首から大量の血を噴き出しながら、大声で叫び、その場に倒れた。

その光景を目の当たりにした一人の男性が発狂し、男の肉を喰い散らかす女性に引き金を引いた。

素人当然の男が、銃を撃てば何が起こるかわからない。

まさにその通りで、銃の衝撃で銃口は上に上がり、関係のない人達にまで弾が当たった。

藤原は、それでもなお引き金を引き続ける男の側面から体当たりし、男を地面に倒した。

「馬鹿野郎！・・・銃はなるべく使つたはずだ！」

「もう駄目だー！あ！俺達は、このウイルスに喰われるんだ！俺はこんな化け物には成りたくない！」

男は、上に乗る藤原を蹴飛ばすと、集団から数歩離れ、自分の顎下に銃を持つてくると引き金を引いた。

後ろの壁には、男の血が飛び散り、引き金を引いた男は、後ろに反

りかえりながら倒れた。

二つの惨劇に恐怖し、中央で再び動き始めようとする女性を見て恐怖にかられた人達は、散り散りに走り出した。

「駄目だ！全員、戻れ！」

藤原の声は誰にも届かず、女性の頭を撃ち抜いた正也と脂汗を掻く仁志、そして由美、腰を抜かして動けなかった人が四人残っただけだった。

「チツ・・・馬鹿が。一人になって何が出来るってんだ・・・」

正也の非常な言葉に、由美がキレた。

「ちよつと、そう言う言い方、あんまりなんじゃないの！」

「だったらどうするよ！散り散りになった奴等を探しに行くのか？ああ？・・・俺は絶対にごめんだね！」

言葉に詰まる由美に対し正也は言っではいけない言葉を言ってしまった。

「大体、お前のせいで、淳がいなくなっただんだ・・・」

呟いてしまった言葉に我に返る正也。そして、その言葉を言っタリてしまった正也を見つめる仁志。

「・・・それ、どういう事？」

「何でもない！」

「何でもない訳ないじゃない！淳がいなくなっただってどういう事よ！・・・じゃあ、豪は？ねえ豪は？」

「・・・うるせえ！俺はな、餓鬼の頃から俺達に付きまとうお前が、大っ嫌いだったんだよ！」

「そ・・・そんな事、思ってたの！」

「ああ！俺達は五人で仲良くやってたんだ。それなのに、お前が入ってきて、仲間はバラけちゃったんだよ！」

二人の争いを聞きたくないと言わんばかりに、仁志は両耳を塞いで、その場に腰を下ろした。

「二人ともいい加減にしろ！」

仲裁に入ったのは、藤原だった。

「悪いが二人の口げんかに付き合ってられるほど、ここは安全じゃない。．．そんなに続きがしたいなら、俺が二人を撃ち殺す」

自殺に使われた銃と自分の持っていた銃を両手に構え、二人に照準を合わせる藤原。

力による仲裁に二人は、黙りこみ再び歩き出した。

そんな中、正也はある事に気が付いた。

「．．．仁志？」

落ち着きを取り戻した正也が辺りを見渡すが、仁志の姿はどこにもなかった。

「おい、嘘だろ．．．仁志！どこ行った！」

藤原が声を抑えるように言うが、関係無く騒ぐ正也のパソコンに仁志からのメールが届いた。

『ごめん．．．俺も第二症状が出てたんだ。でも、怖くて言いだせなかった。もう、隠しきれないまで、症状が出てるんだ。だから、一緒にはいられない．．．ごめんね』

「嘘だろ．．．仁志！お前一人で何が、出来るってんだ！戻ってこい！何か解決策があるはずだ！」

正也達の集団から先ほど抜け出した仁志は、廊下の隅に蹲り、正也の声が聞こえるたんびに、胸が痛んだ。

「か、観測を開始してから一時間と十五分．．．階段には地下20階と書かれている。藤原君や正也君達は無事だろうか？．．．だが、私にも再び食欲が芽生え始めた。抑えきれないくらいだ．．．」
西田は、階段を壁を手で抑えながら上っていた。

「だが、．．良かった事に、周りには食べ物らしきものは、転がっていない。私の理性は、まだ保たれている。．．だが、私は今、藤原君達を追っているのだが、それは、助けるためなのか？．．．も

しかしたら、食べ物を追っているのか・・・今の私には理解できない口ではそう言っているが、足はほとんど正也達の方へと進んでいく。

「だが、何か物を喰ってしまつと、意識を失うと言う事は、この症状を見ても明らかだろう・・・」

西田は、ふとある事を思いつき、パソコンに自分の言葉を入れ始めた。

その頃、正也達は今まで見た事がない化物と対峙していた。

いつもは、人の形をした四足歩行の緑の化物だったはずが、今回は両足で立ち、緑色の出来物からは緑の液体がにじみ出て、体格はやけにゴツツく三角筋が発達しすぎて、猫背のように曲がっていた。

「第二症状の奴か！」

正也と藤原は、正面に立つ化物に銃口を向けた。

化物は、手に持っていた人の頭を正也達に放り投げた。

思わず視線をそっちに取られてしまった正也達。

その瞬間、正也の横にいた男の体から、大量の血しぶきが舞い上がった。

胴体を両断された男は、何が起こったのかわからないと言った表情で、上半身は地面に倒れた。

あまりにも突然の出来事に、下半身の筋肉は硬直し立ったまま倒れなかった。

その下半身の前に移動していた化物は食らいついた。

「うわああああ！」

正也の叫び声に銃を持つ人達は、一斉に化物に向けて引き金を引いた。

化物はそれを物ともせず、体に出来た緑色の吹き出物に弾が当たり、緑の液体をまき散らすだけだった。

「くそっ！死にやがれ！」

正也も、ライフルを化物に向けて、引き金を引くと、正也の銃弾は化物の腕に当たり、弾丸は化物の肘を挟り取りながら、貫通した。

「ぎゃおおおおおお・・・」

化物は、腕を抑えながら濁った悲鳴を上げ、ぶらついていた腕を引きちぎった。

「くそっ・・・」

頭に当たらなかった事に正也は、悔しさをにじみ出し、再び化物に銃口を向けるが、そんな正也を化物は、生き残っている腕で、壁に吹き飛ばした。

壁にぶつかった正也は「ガッ」と声を洩らし、意識を失い倒れた。

その光景を遠くの物陰から見守る仁志は、自分にはどうする事も出来ない可悲観していた。

「・・・君、正也君の友達だね。・・・ここに私がまとめた記録が残されている。取っておいてくれ」

仁志の横に、新たな緑の化物が登場し、返事もしない間に、仁志の足元にパソコンが置かれ、男は、化物の方へと走って行った。

「だあああー！！！」

藤原に襲いかかろうとする化物に、化物は飛び掛かりながら、空中で蹴りを入れ、化物を蹴り飛ばした。

「大丈夫ですか？藤原さん。」

濁った声でその場に腰を突く藤原に声をかけるが、再び化物へと向かって行く化物。

「・・・まさか、西田さん。」

仰向けに倒れる化物の上に跨ると、西田は化物の首根っこを両手で鷲づかみにすると、そのまま地面に何度も叩きつけた。

化物は、悲鳴を上げ、それでも西田は化物の首を締め上げながら、地面に何度も叩きつけた。

振り回される化物は、何とか抵抗を見せようと、足で西田の顔を蹴り、西田は両手を放してしまった。

地面に倒れる西田に今度は化物が跨った。

口を大きく開き、西田の首元に食らいついた。

「ぐあああ！」

西田の首元からは、緑と赤が入り混じった液体が傷口から噴き出し、西田も負けじと化物の首に食らいつき、引きちぎった。

「ギャオーー！！！」

化物は、西田から離れ、地面に崩れてのた打ち回っていた。

そして、西田は口の中に入っている化物の皮と肉を喉に通してしまっ

た。
西田は地面でのた打ち回る化物の頭を足で抑えつけ、力を込めた。メキメキと顔が音を出し、堪え切れなくなった頭は、パキヨンと高い音を鳴り響かせながら、スイカのように砕けた。

「西田・・・さん？」

化物を倒した西田の異変に気付き藤原が声をかける。

西田は、顔を歪ませ唸り声を上げながら、ポケットから録音機を取り出した。

再生ボタンを西田が押すと録音機は、ノイズを出しながら再生を行った。

『ザー、ザザ・・・ええ・・・これが再生されていると言う事は、藤原君達に辿りついてしまったんだね・・・お願いだ。おそらく今の私は、・・・君達を食べ物と認識してしまっている。この再生ボタンを押せている間・・・私の理性が保たれている間に、君達の手で葬り去ってくれ、頼む』

「グルルルル・・・」

西田は、苦しみながら頭を押さえ、再生ボタンを押し続ける。録音記録は、何回も繰り返され、藤原は、壁の横で意識を失う正也から

銃を取ると西田に銃口を向けた。

「すまない、西田さん」

苦しむ西田にそう呟くと藤原は、ライフルの引き金を引いた。

傷のついた目

豪 「にしてもさ、いいよな。あいつ等、どんどん上に行っちゃってさ・・・」

仁 「たしかにね。私達、まだ最下層だからね」

保住 「フン、ワシなんて・・・最上階じゃぞ。」

二人 「・・・誰？」

保住 「・・・クズが」(ログアウト)

風 「・・・」(ログアウト)

淳 「ケツ・・・俺なんて、プロローグで出てきただけじゃねえか・

」

豪 「あつ、淳！ちよつと・・・」

淳 (ログアウト)

仁 「・・・今の誰？」

「ねえ、どこに向かつてるの？」

最下層で豪は、ある場所へと向かい、どこに向かっているのか上条が問いかけていた。

「どこって、こんなに暗けりや、移動にも不便だべ。管理室だよ」

そう言つて『危険！立ち入り禁止』と書かれた鉄の扉を開くと、大きな機械が音を立てながら、活動していた。

「やっぱり、空調は効いてるな・・・って事は、ブレイカー落としただけなのか？」

豪は動いている機械を見ながらそう呟き、ペンライトで扉の横にあるブレイカーを照らすと、銃で破壊された機械が映った。

「あちゃゝ、こりゃ酷いな・・・」

「だから、こんなとこ来ないで、さつさと上に上がればよかったんだよ・・・」

「おいおい、来て良かっただろ。」

「なんでさ。損してるだけじゃん」

「ここにレジスタンスがいないって事は、すでに逃げ出したのかもしれない。普通、一人か二人いたっておかしくないだろ？」

「それは・・・そうだけど・・・」

「それにこれくらいなら、直せる」

豪は配線が書かれた物を下から拾うと、作業を開始した。

西田に向けて放たれた弾丸は、西田の手によって防がれ、手に持っていた録音機は音を立てながら、壊された。

「くそっ・・・全員、逃げろ！」

藤原は、正也を肩に担ぎ、銃を西田に向けながら、全員にそう言うのと由美達は、固まって藤原から離れた。

西田は、ゆっくりと藤原に近づき、藤原は何度も引き金を引くが、緑の液体が飛び散るだけで、歯が立たなかった。

「ここまでか・・・」

悔しさをにじみ出しながら、藤原はそう呟くが、耳元で誰かが囁いてきた。

「何、諦めてんだよ。・・・馬鹿が」

藤原の背中、意識が朦朧もうちうとしていた正也が、藤原の胸元についた手榴弾を取り出し、西田に向かって投げた。

藤原は、正也を抱え猛ダッシュで走り、そんな後ろでは西田を巻き

込みながら、手榴弾が爆発した。

「これで、死んでなきゃ、本当に成す術無しだぜ・・・」

正也の言葉通り、西田は生きていた。

薄暗い闇に包まれ、炎の中が光り輝く場所から、ゆっくりと西田が出てきた。

「マジかよ・・・」

じりじりと寄ってくる西田を見ながら、後ろに下がって行く正也と藤原。

その光景を見ていた仁志は、助けなくてはと思うが、西田が化物になっってしまったのを見て、気が引けていた。

「俺も、みんなの前で・・・あの人のようになってしまったらどうする・・・」

そう思うと、見ていられないと、仁志は再び物陰に隠れてしまった。・・・俺には何も力がない。いつも助けられてばかりだ。

『お前は何を迷っている』

「そ、そりゃ、みんなを守る力があれば、俺だって正也みたいに・・・」

『ならば望め』

「・・・望む？」

『お前は何を望む』

「み、みんなを守る力・・・」

『ならば、その手に持っているものはなんだ』

仁志の手には、藤原に渡されたナイフが握られていた。

「これは・・・人を傷つける道具だ」

『それは持ち主によってかわる。違うか？お前はそれを何に使う』

「みんなを守るために・・・」

『ならば望め・・・思いに俺達は反応する』

「俺達？」

『そうだ。望め。その手に持つ物はなんだ』

「みんなを守る武器」

『ならば、お前の体はなんだ』

「みんなを守る盾だ」

両手を振り上げる西田。そして、死を覚悟した二人は目をつぶった。振り下ろされた両手は、緑色の腕によって止められた。

「グルルルル・・・」

新たな敵に喉を鳴らす西田。

異変を感じた正也が目を開くと、二人と西田の前に緑の肌を露出させた仁志が立っていた。

「仁・・・志？」

「正也、・・・俺は、もう一緒には行動できない。・・・だから、じゃあな。」

仁志は両手を開き力を込めると、手の甲から三本の鉤爪が飛び出してきた。

「はあああ！！」

仁志は、大きな掛け声とともに、手を振り抜き、西田の胸を爪でそぎ取った。

後ろに飛び退く西田を追い、仁志は猛突進し、壁を突き破りながら、西田の胸に爪を突き刺し、一緒に吹き抜けの中央から二人で落ちて行った。

「仁志いいい！」

正也は、開いた穴から吹き抜けの場所を見下ろすが、真つ暗闇の抜きぬけの場所からは、冷たい風と西田の叫び声しか聞こえなかった。幸助だけでなく仁志まで失った正也はその場に泣き崩れ、藤原は自

分の足元に西田のパソコンが置かれている事に気が付いた。

「そんな・・・仁志・・・仁志・・・」

「・・・人数もかなり減ったな。」

藤原の言葉に正也は、藤原を睨みつける。

「違う。そう言う意味じゃない・・・悪いが、俺も抜けさせてもらう。」

「どつという意味だ・・・」

正也の言葉に藤原は、自分の袖を捲りあげた。

藤原の腕には、緑の発疹が出来、すでに肩にまで浸食が進んでいた。

「俺は、下に戻る。・・・もしかしたら生存者がいるかもしれない。

それに、君の友達が銃弾も効かないような体で、飛び降りても死ぬようには到底思えないしな」

「・・・あんたは、食欲に勝てると言うのかよ」

「俺が最後に喰うのは、人の肉じゃない。・・・銀の弾丸さ」

藤原はそう言うと、来た道を歩いて戻って行った。

「残り四人か・・・かなり減ったな」

正也は、生き残った奴を見渡すと、由美と父親と娘の親子しか残っていないかった。

「わ、私にも武器をくれ・・・」

「そこら辺に落ちてんだろ。勝手に拾えばいいだろ」

父親は、正也にそう言うが、正也はそっけない態度をとった。

銃を拾う父親に、正也は安全装置の外し方や弾の装填の仕方を簡単に教えた。

そして、正也はさっさと行くぞと言って、歩きだす。

「あの・・・お名前は？」

銃を手にして顔が強張る父親に由美が声をかけた。

「あ・・・私は、福生^{ふくい} 信一郎と言います。・・・こっちは、この子はマリです。ほら、挨拶しなさい」

父親に促され、娘のマリは「こんばんわ」と丁寧にお辞儀をしてきた。

「こんばんわ。いくつかな？」

「5歳」

指を五本立てて年を現すマリに「賢いね」と拍手する。

「あの愛想のない奴は、正也って言います。・・・あつ、私は」

「知ってますよ。鷺田由美さんですよね」

福井の言葉に「はい」と小さく答える由美。

「すみませんでした。私のせいで皆さんにご迷惑をおかけしてしまつて・・・」

「いえ、元を辿れば悪いのはレジスタンスです。でも、今となつては、そのレジスタンスに私達は、かなり救われましたけど・・・」

「ええ・・・藤原さんも無事だといいいんですけど・・・」

管理室の工具箱を勝手にあさり、道具を使って配線をつないでいく豪。

「ああゝあ、まさか親父に習つてた事が、ここで発揮されるとわ・・・
・やつぱ工業系に就職しようかなゝ、教習の単位ちよつとヤバイしな」

「やつぱりね。顔がヤバイもん」

「失礼な。・・・仁だつて男みたいな名前じゃねえか」

「うるさい！」

「それに、ちゃんと教習は取つてんだよ。けど、心理学の方が面白くてな・・・」

「ふゝん、じゃあ何か催眠術とか出来るの？」

「催眠術？出来る訳ないだろ。・・・俺がやってんのは、行動の心理学だ。いろんな場面で人はどのように行動するか？とかそんな感じ。」

「つまんなさそうね・・・。」

「そうでもないさ。例えばこういう場面で、女性は力のある人物に・まあ男とかと一緒に行動を取ろうとするんだ。後ろで文句ばっか垂れながら、俺が配線を直すまで待っていようとする誰かさん、みたくな」

笑いながらそう言う豪の言葉に、無意識に自分の心理を読み取られた気がした上条は、豪に蹴りを入れようと近づいてくる。

「よし、完成！」

豪はそう言つて、ボタンを押し振り返ると、そこに上条がいた事に目をギョツとさせた。

「何やってるの？」

「えっ？」

「離れる！」

豪は、上条を抱き上げ、急ぎその場から離れた。

その瞬間、豪が直していた配線から青い火花が飛び散り、地面に降り注いでいた。

「キヤーーーー！放せっ！触んな！」

抱きあげられた上条は、豪の腕の中で暴れ、豪は上条を下ろした。

「危なかったあゝ・・・なんで、近づいてくるんだよ」

「それよりも直せるんじゃないの？明らかに壊れてるじゃん」

「いいんだよ。あれで、壊れた事を認識すれば、非常電源に切り替わる」

豪の言葉通り、火花は電気の供給が無くなることで出なくなり、代わりに大きな機械が、更に大きな音を立てながら、動き始めた。すると、薄暗かった廊下に光が戻り始めた。

管理室から出た二人は、何故かハイタッチを決め、移動を開始した。

「ねえ、厨房を抜けた方が近道じゃん。なんで厨房に行かないの？」
「いや、厨房は止めた方がいい……。死体が一体転がっていた」
「えっ……」

明かりが回復し、赤い絨毯とクリーム色の壁紙が貼られた一般客が通る道を歩きながら、豪は厨房の事を話し、上条は思わず息をのんだ。

「そんな……過激なレジスタンスだと言うの？」

「仁の話と俺の出来事を合わせればそう言う事に、なるだろうよ……。今から抜ける会場ももしかしたら、そう言う事になっているかもしれない」

豪は、大きな扉の前に立ち、ドアノブを握り、上条の顔を確認した。
「……覚悟はいいか？」

豪の言葉に上条は、手で胸元の服を握りながら小さく頷いた。

豪は、押し戸の扉を開くと、そこには想像していたよりもはるかに酷い光景が待っていた。

「マジかよ……」

豪はそう呟き、上条は思わず豪の背中に隠れ、目をつぶった。

会場に敷かれた赤い絨毯は、飛び散った血が固まり、所々茶色く染まり、人の物と思われる肉片が足元にまで、転がっていた。

「一体、何があったって言うんだ……」

会場の上には胸にナイフが付き刺さったレジスタンスと思われる男が倒れ、客以外にもレジスタンスの死体まで転がっていた。

「まさか……中央政府が介入したのか？」

「知らない！知りたくない！ねえ、早くここから出よう！」

豪の背中にしがみつく上条は、目を閉じてはいるが、死体特有の生温かい匂いに耐えきれず豪に会場からでようと叫ぶ。

もちろん、こんな場所に豪だって長くは居たくない。そう思って向かいにある出口へと足早に向かい、会場の外に出るが、そこにもまだ、人の死体が大量に転がっていた。

「・・・こりゃ、電気をつけない方が良かったかもしれない」

会場近くのエレベーター付近には、逃げ惑った人達が動かないエレベーターに駆け込もうとしたのだろっ、エレベーター付近に大量の死体が積み上げられていた。

「・・・上の階に上がってから、エレベーターを使おう。・・・それでいいな？仁」

「・・・うん」

上条は相変わらず、豪の背中にしがみ付き、目を開こうとしないが、それに対して豪は何も言おうとはしなかった。

だが、豪は下に転がる死体に疑問を持ち始めていた。
肉片に変わった多くの死体の色は、肌色と赤い色の二種類があるが、首が無くなっていたり、胴体を切り裂かれた死体は、緑色をしている。

「どうなってるんだ？」

どうやら、本当にただ事ではないと悟った豪は、下に転がる銃を手にとった。

使い方はわからないが、持っていないよりはマシだろう。

豪は銃を構え、引き金の上の部分にある安全装置を外し、撃鉄を引いた。

ガチツと音が鳴り、さっきまで抵抗がなかった引き金に、指をかけると軽く押しただけでは、動かなくなっていた。

「仁。ちよつと耳を抑えてろ」

豪はそう言つと、銃を構え上条が耳を抑えている事を確認すると、引き金に力を込めた。

バン

銃声が静かな廊下を木霊し、豪の両手には強い衝撃が走った。

「うわっ！」

「キヤア！」

思わず後ろに仰け反る豪は、後ろにいた上条を巻き込んで倒れた。
「いつてえ・・・こんな衝撃が走るんだ。」

四つん這いになりながら豪は目を開くと、豪の下には仰向けに倒れようやく目を開いた上条が、上に跨る豪に思わず頬を赤く染めていた。

気まずい空気が流れ、互いに口を開かないでいると豪がようやく口を開いた。

「いや・・・これは所謂、不可抗力というもので・・・」

豪のいい訳に対し、上条は豪の股を蹴り上げ、豪は横に倒れ、上条は汚れた服を払いながら立ちあがった。

「まったく、男っていつ豹変しても、おかしくないのね」

「いや・・・だから、誤解だって・・・」

急所を抑え、地面に倒れ回復を待つ豪を見て「馬鹿」と呟く上条。

「さて・・・そろそろ、移動しますか！」

豪は声だけは立派に張り上げるが、未だに極真空手三段の猛者に蹴られた急所を庇うように、内またになっていた。

「ねえ、私ちよつと用事があるんだけど・・・」

「えっ？何さ」

「いや・・・だから・・・」

「だからなんだよ」

「・・・トイレよ！トイレ！」

「あつ・・・ごめん」

「やだ！謝らないで！なんか負けた気分になるから！」

さすがに、ここの階で用を足す事は出来ないと思い、上の階に上がる二人。

「いい？絶対に入ってくんなよ！」

「入らねえよ・・・さっさと行ってこい」

入口の前で待つてると言われ、豪は壁に寄りかかり、上条が来るのを待った。

「ねえ！居るよね！」

トイレの奥から上条の声が聞こえてくる。

「ああ！居るよ！」

「絶対にどっか行こうとか思わないでよ！」

「思わん、思わん」

「ねえ居る？」

「何回、聞くつもりだ！この野郎」

「じゃあそこでなんか歌でも歌ってる！」

「ええゝ歌？」

「はい、3、2、1」

「ええ、ええつと・・・新製品が安いっ、ケゝス電光」

「・・・なんでCM」

「歌なんてしらねえんだよ・・・あつ、これなら知ってるぞ」

そう言つて豪は、さつき上条の上に跨り襲いかかるような誤解を招いたばかりだと言うのに、速いテンポの口調で、女性を脅すような歌詞の歌を歌い始め、用を済ませた上条から裏拳を喰らった。

「死ね」

端的にそう言われ、心が傷ついた豪。

「うわああああ・・・来るなあ！」

そんな悲鳴が、二人の耳に入り、声のする方へと目をやった。

廊下の曲がり角からは、銃声とそのフラッシュが映し出され、フラッシュの陰に映し出された映像は、銃を連発する男に四足歩行の何かが食らいつく映像だった。

男の断末魔は、喉元を食いちぎられ止まり、二人の耳にはクチャクチャと気色の悪い音が届いた。

「えっ・・・何、今の・・・」

「わからねえ・・・俺の後ろに下がってろ」

豪はそう言い、腰に差してあった銃を手にとると、音のする方と銃口を向けた。

しばらく、気味の悪い音が鳴り響き、二人は恐怖と隣り合わせになり始める。

音が止み、曲がり角から現れたのは、緑の肌、四足歩行で人の形をした化物だった。

豪は、手に握った銃を強く握りしめ、化物に狙いを定める。

化物は目の前に二体の喰い物がいる事に気が付き、顔をニタつかせながら走り出した。

口からは、先ほど喰らっていた男の物だろうと思われる服が口から垂れ、豪は向かってくる化物に引き金を引くが、弾は全く当たらなかった。

「くそっ！・・・仁、離れてろ！」

後ろにしがみ付く上条を突き放し、豪は飛び込んでくる化物に立ち向かおうと、銃を投げ捨てた。

飛び込んでくる化物をそのまま巴投げに持ち込み、化物は仰向けに倒れた。

「ヒイツ・・・」

今まで見た事のない物を目の当たりにした上条は、叫び声を上げ、その場を離れようとした。

背を向けて逃げようとする喰い物を追いかけようと化物は、走り始めるが、豪は走り出す化物の髪を後ろから引っ張り上げた。

化物の顎が空くのを確認すると、豪は首に腕を回し、化物の首を締め上げた。

「ギャオオオ・・・」

「くそっ、落ちろ！」

化物は、次第に泡を吹き始め、豪は化物をうつ伏せにするように自分も倒れ込み、さらに強く締め上げた。

化物は痙攣を起こし、意識を失い大人しくなった。

「なんなんだ。こいつは・・・」

「豪、ごめん。大丈夫？」

上条は、落ち着きを取り戻し、豪に駆け寄ってきた。

そして下で伸びる化物を目にして「なんなの、これは」と呟いた。

「わかんねえ……」

「すごいな……まさか、最下層にまだ生存者がいて、その化物を素手で倒してしまうとは……」

そう言いながら現れたのは、頭に迷彩柄のバンダナを巻いたレジスタンスだった。

「レジスタンス！」

豪は、急ぎ下に転がる銃を拾い、男に銃を向けるが、男はその前に壁に寄りかかりながら、倒れた。

頭に巻いたバンダナからは、血がにじみ出し額を伝って流れ落ちていた。

豪が駆け寄り、男の腕と顔の半面が緑色に変色している事に気が付いた。

「なんだこれは……」

「触るな……感染するかもしれない」

男の警告に豪は、伸ばしていた手を止めた。

「あんた、レジスタンスだろ？」

「……ああ、ブルーソルジャーの藤原だ」

「何があつたんだ。これはお前達がした事なのか？」

その問いかけに、藤原は心配そうに見てくる二人を疑問に思った。

「お前等……何も知らないのか？」

本当に何も知らない二人に、藤原は何が起こっているのかを説明した。

浅い呼吸を繰り返す藤原は、すでに手の施しようのない怪我を負い、自分の命が残りわずかだと悟った。

「とにかく、そのウイルスから逃れるためにも、一刻も早くここから脱出しろ……俺なんかが言えた義理じゃないが、無事を祈っ

ている。・・・腹が減っても何も食うな。化物になっちまうぞ・・・

「あんたは、どうするつもりだ」

「俺は、この痣が完全に俺を喰い散らかす前に、生存者を見つけようとしていたが、おそらくお前等が最後だろう」

藤原は、そう言うで一呼吸入れ「腹が減った」と呟き、その言葉に思わず豪と上条は一步離れた。

そんな二人の行動を見て、藤原は軽く鼻で笑った。

「大丈夫だ。・・・俺が最後に喰う物は銀の弾だって決まってるんだ」

藤原は、手に持っていた銃を口に咥えた。

「・・・目に傷になるぞ。向こうを向いてろ」

その言葉に上条は、豪の背中に隠れるが、豪は目を放そうとはしなかった。

「いいのか？」

「いいさ・・・ちゃんと見届けてやるよ」

藤原の問いかけに豪はそう答えると、指で自分の顔にある目の傷をなぞった。

「・・・俺は、もう傷持ちさ」

豪の反応に、藤原の表情は緩み「ありがとよ」と呟くと豪達がいる廊下に一発の銃声が鳴り響いた。

保住です。加齢臭が臭います・・・

豪 「真西豪です。身長189、体重95、年齢20です」

正也 「梶原正也です。身長176、体重65、年齢21です」

由美 「鷺田由美です。身長169、体重内緒。年齢20です・・・
えっ、バスト？言う訳ないじゃない！」

上条 「上条仁です。身長160、体重同じく内緒。年齢18です・・・
なんで私には聞かないのよ！」

保住 「保住だ。下の名前などで呼ばれたくない。身長150、体重99、年齢58」

風 「・・・163、55、20。バストはB」

福井 「福井信一郎です。身長は173、体重70、年齢は38です」

マリ 「福井マリ！五歳！身長は、周りのお友達と比べてちょっと
高いくらい」

築地 「真白築地。198、105、年齢おそらく30代後半」

謎の男 「フッフフ、名など無い、身長210、体重115、年齢？
知らんな」

豪 「これで全員か？」

仁志 「さ、笹谷仁志！身長160・・・えっ？みんな？」

豪 「いや、お前はまだ出たら駄目だろ・・・」

仁志 「ご、ごめん」

小野寺 「小野寺 駿！185」

豪 「お前はもつと駄目だ！」

藤原の死を見届け、二人はエレベーターを危険と判断し、地上を指して階段を上っていた。

「ねえ・・・豪」

「なんだ？」

階段の途中で服の裾を取られ、先に進めなくなった豪は後ろにいる上条の方を見た。

「私・・・今すぐにでも発狂しそうな。だから、何か心の支えになるものが欲しいの。」

豪の服を掴む手はガタガタと震え、上条は今にも恐怖に押しつぶされそうになっていた。

「だ、だから、・・・もし、無事に脱出できたら、・・・その彼女と
かいるなら別にいいの。・・・私と付き合って！」

「・・・はあ？」

「いいの。所詮は、口約束なんだから、無事に脱出できれば、そんな女もいたなあって思い出す感じで、いいから、今は『うん』って言って、私の心の支えになって・・・」

今にも泣き出しそうな上条の顔を見て、豪は笑いだした。

「なんだ、そんな事か・・・ならよ、もつといい約束をしようぜ。」

「えっ？」

そう言々と上条の腕を引っ張り豪は上条を抱きしめた。

「無事に脱出できたら結婚しよう。」

「は・・・はあ？ちちょ、何言ってるのか、わかってんの？」

「子供は何人欲しいかな？・・・俺は、4人くらい欲しいんだけど。どう思う？」

「ねえ、ちよっと、ちよっと！」

豪から離れようと腕を突っ張ろうとするが、そんな上条をさらに強く抱きしめた。

「大丈夫だ。・・・俺達は生きて脱出できる。」

そう言う豪の腕も必死に隠しているが、震えているのが上条にも伝

わってきた。

「脱出できたら、急いで婚姻届を出しに行こうな」

「うん・・・そうだね。ゴミ出しの日も分担しないとね」

そう言って上条も豪の背中に手をまわした。

「ねえ、正也。さっきの続きなんだけど・・・」

黙々と歩き続ける正也達だが、順調なペースで敵とも出くわす事なく、ついに地下10階にまで辿りついていた。

「なあ由美・・・」

「何？」

「・・・さっきは、悪かった。心にもない事言っただけ・・・ごめん」

「ううん、気にしてないから、言っただけ。淳がどうしたの？」

「・・・そうだな。俺もいつ死ぬかわからないしな。」

正也は、後ろに付いてくる親子のペースが落ち始めている事に気が付き小休憩を取った。

「もうすぐ、地上だ。もしかしたら、あのウイルスが街にも出てくるかもしれない。けど、とにかく俺達の目標は、地上に出る事だ。後もう一踏ん張りだ」

階段の手前で正也達は腰を下ろした。

「お前が、中学卒業と一緒に、北東北の女子高に転向したろ？あの後、淳は豪の顔をナイフで切りつけたんだ。」

「そんな・・・」

「勘違いするなよ。悪いのは由美じゃない・・・卒業式が終わって、見送りに全員で行こうって豪が言い始めたが、淳だけが意地張っちまってな。動こうとしなかったんだ。それを無理に行かせようとする豪に腹が立って、淳の奴、豪を切ったんだ。・・・それが高校に知れ渡って、淳は入学すらさせてもらえなかった。・・・豪は、右目にでっけえ傷作っちまって、今、あいつの右目には義眼が入ってる。・・・義眼の事を知っているのは、俺達だけだ。それこそ淳すら知らない。」

「私のせいだわ・・・」

「違う。淳が一番悪いが、豪もお前に気持ちを伝えなかったのも原因なんだ。」

「違うよ。豪はそんな気持ちで私を見てなかった。」

「そんな事はない。あいつは由美、お前の事を好きだったはずだ。何年、あいつとつるんであると思ってるんだ？」

由美は煙草を取り出し、口に咥えた。

その時、上の階で銃声が轟いた。

「みんなは、ここで待ってる！生存者かもしれない。」

正志は、ライフルを構え螺旋階段を上がって行った。

正也が階段を上がると同時に、由美達の前に第二症状の化物が現れた。

「ゆ、由美ちゃん！マリと一緒に私の後ろへ！」

福井は化物に銃を構えるが、その手はガタガタと震えて引き金を引けるような状態ではなかった。

「福井さん！」

由美は、マリを抱きかかえながら、福井に叫んだ。

「む、娘を頼むよ・・・私は動けそうにない。」

福井は、少し後ろを振り返りながら、恐怖に顔を引きつらせ、無理に笑って見せた。

その覚悟を無駄にしないよう、由美は泣き叫ぶマリを抱きかかえて

階段を上がり、銃声と父親の最後の叫び声を耳にしながら、正也の後を追った。

上の階に上がる階段を上がると、そこには正也の姿はなく、どちらに向かえばいいのか、由美にはわからなかった。

階段の前で立ち止まっていると、後ろからは化物が階段を上がる音が刻々と迫ってきていた。

そして、由美の右側にはまた新たに、第二症状の化物が飛び出し、由美は左に逃げることにしか出来なかった。

左にはエレベーターしか残っていないく、由美は電気の回復したエレベーターのボタンを連打した。

「お願い、早く来て……」

エレベーターがどの階にいるかを示す電光掲示板は、B25と書かれ、そこから次第に数が減り始める。

階段から上がってきた化物も再び合流し、エレベーターの前で立ち往生する由美とマリにゆつくりと近づいてくる。

「グルルルルル……」

化物は、目の前に立つ喰い物に喉を鳴らし、口からはよだれを垂らし、裂けた口はさらに笑みをこぼす。

マリは、その光景に由美に抱きつき、悲鳴を上げていた。

武器を持っていない由美は、正也がこちらに気付き戻ってきてくれる事を願うしかなかった。

エレベータは、ゆつくりと地下10階に近づき始め、ここのエレベーターが開くのと化物が襲いかかってくる時間との戦いでもあった。エレベーターは、B15階を指し、あともう少しで由美達の所へとやって来そうだった。

14 / 13 / 12 / 11 ……

チン・

扉が開くと同時に、由美はエレベーターに入ろうと化物に背を向け、

中に入ろうとするが、エレベーターの中にはすでに乗客が一人乗っていた。

「フシユウウウウ・・・ようやく、エレベーターが動いたと思ったら、見た事もない化物が二体もいるなあ。」

両手に大きな包丁を手に持った巨人兵築地が、由美達に気付かずエレベーターから出てきた。

「さあて、缶詰にされてた俺の準備運動をしてくれる相手は、お前達か？」

「ガLLLLLLLLLLLL・・・！」

威嚇する化物たちだが、男から噴き出される異様な気配を感じ取っているのだろう、後ずさりをし始める。

「なんだあ、威勢は格好だけかあ？あまり俺を幻滅させるなよ。さあ！」

あくどく笑う男は化物共に罵声を浴びせながら、突進していき、さつそく一体の腹に包丁を突き刺した。

素早く抜くと腹を抑える化物の上に包丁を振り上げた。

「ブルアアア！」

勢いよく振り下ろした包丁で、化物の体は縦に真っ二つに割れた。

「ハハハハハハ！」

綺麗に裂かれた化物の前で声を上げて笑う築地。

そんな築地に隙を見た化物は猛スピードで築地に突進してくるが、それに気付いた築地は待ち構えた。

大きな衝撃破が由美達に襲いかかる。

「・・クククククク、その程度か？」

化物の渾身の一撃を受け止めた築地は、口から血を流しながらも「温い」と呟き、包丁で化物の首を撥ねた。

「温い、生ぬるい、温すぎる！クソ温い！・・・ハハハハハハ！」

築地の異常性に、由美は思わず体を震わせるが、おそらくこの男に付いていけば、生き残れる可能性は上がると確信した。

「悪い、遅くなった。」

正也はそう言いながら、由美達が居た場所へ、レジスタンスの小谷野 達也。元海上自衛軍の小野寺 駿すけを引きつれてやってきたが、そこに残されていたのは、福井の死体だけだった。

「そんな・・・」

気を落とし、その場に崩れる正也の肩を叩く小野寺。

「大丈夫だ。君の言う残りに娘さんと嬢ちゃんの姿はどこにもない・・・きつと我々を君が救ってくれたように、誰か生存者が救ってくれたのかもしれない。」

「そうだ。正也、駿の言う通りだ。上を目指そう。もしかしたら、他の生存者と会えるかもしれない。希望を捨てるな。」

小野寺と小谷野に励まされ正也は立ちあがった。

「ああ・・・わかった。必ず見つけ出してやる」

正也の意気込みを聞き、小野寺は声を張り上げた。

「よし、俺達は地上を目指す。生存者を見つけるため、多少危険だが階段で上がって行く！あと少しで地上だ。気張って行くぞ。」

「「おう！」「」

「じゃあ月、水、金が俺が出すんだな？」

「そう、んで日曜日は、じゃんけんで負けた方！」

「言っておくけど俺、ジャンケン強いぞ」

「私だつて負けないから。」

「なら、勝負してみるか？」

学生結婚を済ませ、現在一人暮らしの豪の家に上条が住み込み、ゴミ出しの日について盛り上がりながら、廊下を突き進む二人の前に壁を突き破りながら第二症状の化物が二体飛び出してきた。

「なんだあ？こいつらは・・・」

始めて見る化物に二人は、後ろに下がるが、どうも二人の様子がおかしい、どうやら二人で争っているようだ。

マウントポジションを取った化物は、下にいる化物の顔を殴り、意識を昏睡させると手の甲から鉤爪を出し、下にいる化物の胸に突き刺した。

「ギャオオオオオオオオ・・・」

「さつさと逝きやがれ！」

上の化物はそう言い、爪をさらに深く刺し込んだ。

「・・・くそつ、今楽にしてやるよ。」

それでも意識を失わない化物に対し、もう片方の手からも爪を出し、化物の首を撥ねた。

飛んできた首に思わず「ひい」と声を洩らす上条。

その声の上に跨っていた化物が気付いた。

豪は銃を取り出し、化物に向けた。

「無駄だ。俺に銃は効かない・・・つて、豪？」

残念ながら緑色の肌をした知り合いは今まで見た事がない。だが、濁った声だが、何となく聞き覚えのある声だと思った。

「・・・まさか、仁志？」

「そうだよ。やっぱり豪だ！よかった〜無事だったんだね。」
胸をなでおろす仁志を見て、銃を下ろす豪。

「そんな・・・なんちゅう恰好してるんだ。上半身裸で寒くねえの

か？」

「やっぱり豪だ。その反応は絶対に豪だよ。」

「・・・お前も感染したと言う事か？」

「・・・うん。でも、不思議な事に、まだ食欲が出てきてないんだ。だから、化物に変わる前にホテル内にいる化物を退治して回っててんだ。」

「そ、そんな事より俺達と行動しないか？」

豪の言葉に仁志は首を横に振った。

「駄目だよ。豪・・・俺は、いつ発狂しても、おかしくないんだ。・・・早く脱出して、俺は発狂する前に、このホテルを下から崩して行く。」

「そんな・・・駄目だ、そんな事！」

「ありがとう、豪・・・でも、もう決めたんだ。間接的かもしれないけど、みんなを守るんだ。そうだ、これを預かってよ。」

そう言っただけで、壊れたパソコンを手渡した。

「壊れちゃったけど、それ以外に渡せるものが無くてさ・・・俺を地上に出してやってくれ」

「・・・わかった。預かつく、けどな、地上に出せる保証はないからな、地上に出したかどうか確かめに来い、いいな？」

「うん」

豪が約束だと手を差し出すが、触れることすら今では危うい。仁志は、手を上げて豪達の前から立ち去って行った。

「今の・・・豪の友達？」

「ああ、餓鬼の頃から一緒だった奴だ。」

豪は、全員の無事を祈りながら、上を目指し歩き始めようとしていた。

「こんな所で何をしている。」

豪の前に立ちはだかったのは黒いレインコートを羽織った男だった。

「お前は・・・」

謎の男を目にした途端、奴と戦った記憶が蘇り始める豪。

「ぐあああ！」

頭に酷い激痛が走り、頭を押さえながら地面に倒れる豪。

「豪、豪！どうしたの？」

「仁！・・・離れてろ！」

豪はそう言つと、立ち上がり男に向かって走り出した。

「何故だ。何故、武器を持っていない。」

豪は、男のどこでもいいから掴もうと手を伸ばすが、男は豪の攻撃をスルリと交わした。

よくわからないが、黒いコートの下からは緑の肌が見え、上条も豪の戦いに加わり、蹴りを中心とした攻撃を繰り出す、二人のコンビネーションを意図も容易く、男は交わした。

「ほお、いい素材がここにもいたか・・・」

「させるか！」

男は上条に手を伸ばすが、その前に豪が体を張って止めた。

男は、豪の首を掴み持ち上げた。

「豪！」

上条は、高くそびえ立つ大男の顔に蹴りを入れようと、高くジャンプし右足を繰り出す、男の腕に防がれ、男は上条を壁に吹き飛ばした。

「ひ・・・ひろし」

自分の体重に締め上げられる豪は、男の指を外そうとするが、鋼のようにはビクともしない。

「ん？・・・そうか、お前、死んでいないな」

「・・・な、なんの・・・ことだ。」

「死してなお、生を求めよ」

男は不気味に笑いながら、豪の首を締め上げる。

「カツ・・・アツ・・・」

豪の首が、悲鳴を上げるたびに豪の口からは声が漏れ、その光景を動かない体を無理に動かしながら上条は見た。

「嫌・・・豪、そんなの嫌」

豪は顔を歪めませんが、上条に逃げると言う意味で首を横に振った。だが、上条はそんな豪の促した動作に対し首を横に振った。

そして、異変を感じ取った仁志が、豪達の元に駆けつけた時には、鈍い音が廊下に響き渡り、男が豪を手放していた。

「豪おおお！・・・てめえー！ー！」

仁志は、両手から鉤爪を出し、大男に向かって走り出した振りかざす仁志の攻撃を交わし、大男は呟いた。

「お前もだ。何をしている。それは一体何のための武器だ。」

「てめえを切り刻む武器だ！・・・よくも幸助と豪を！」

仁志の素早い攻撃を意図も容易く交わす男。

「フフフフ・・・感情に流されたな」

「違う！お前を倒せば、これ以上被害が出ない！・・・俺は自分の意思で戦ってる！」

「ねえ・・・豪、嘘でしょ。起きてよ」

男と仁志が戦いを続ける中、上条は自分の体を引きずりながら、地面に倒れる豪の元にやってきた。

豪の首には男の手の模様が浮かび上がり、呼吸すらしていなかった。「私達、脱出できたら結婚するんでしょ！・・・こんな所で死なないで！私、キスもそれ以上の事も豪とやってない！ヤダよ・・・そんなの」

男は銃を取り出し、仁志の肩に銃口を当てた。

銃声が鳴り響き、仁志は肩を押さえながらその場に倒れた。

「・・・ねえ、眠る姫を助けるのは王子様だけど、それは逆でもいいのかな？」

上条は、豪の体を大事に抱き上げた。

男は、両手に銃を構え上条の元へ歩み寄ろうとするが、仁志が男の足に爪を突き刺した。

「豪の元には行かせるかよ・・・」

「フフフフ・・・無理とわかっていても抗うか。それもまた良しだ」
男は突き刺さった爪を引き抜き、仁志の顔に蹴りを入れ、仁志は壁を突き破りながら、飛ばされた。

だが、土煙が舞う中から仁志は飛び出し、男に向かって行った。

上条は、目を閉じて眠る豪の唇に自分の唇を近付けた。

唇が触れた途端、電撃が走るだとか書いてあるが、そんなのは嘘っぱちだと言う事がよくわかった。

下手だとか上手だとかそう言うのは、あるかもしれないが、動かない豪に聞こうにも聞く事が出来ない。

その時、豪の指先が動き、それに気付いた上条は顔を離し、豪の顔を窺った。

「・・・豪？」

「・・・そんな事されて起きない男がいるとしたら、見てみたいもんだね」

豪は、折れ曲がった首を手で直しながら、立ちあがった。

腰元に手を置き何かを引き抜く動作をすると手には黒い太刀が現れ「離れてろ」と上条に言う。豪は向こうで戦っている二人の元に駆けて行った。

「仁志い！そいつから離れろ！」

交戦中の仁志にそう言つと、仁志は何故、豪がそこにいるのかわからないが、とにかく豪の指示に従った。

「フフフフ、さて、第二回戦と行こうか・・・」

男は銃を構え、引き金を引くが、飛んで来る弾丸を一つ残らず叩き落とす豪は、そのまま男に向かって突き進み、刀の間合いに男を捕えた。

力強く柄を握り締め、男は後ろに飛び退くが、豪もそれにくっ付いてきた。

「フェイントだよ。ボケ」

豪は刀を下から上に振り上げ、男の腕を切り落とした。

銃を握った男の腕が、地面にゴトツと音を立てながら落ちた。

「フフ・・・いいだろう。それでいい」

男はそう言つと、再び姿を消した。

豪は刀を鞘に収め、深く息を吐いた。

「豪・・・その武器はなんだ？」

謎の身のこなし、そして黒々と光る刀を見て、肩を押さえながら仁志が近づいてきた。

「それに、首は？」

「ああ・・・どうやらそのウイルスつてのは、人間以外にも感染するらしい。・・・この刀は、ウイルスに侵されてる。刀を手にした奴を喰い散らかそうとしてるんだ。死んでみてようやくわかった。」

男の弾丸で腕には大きな穴が開いていたが、その穴もみるみる閉じて行つた。

「そして、この銃もおそらく感染してる。」

落ちている腕から銃を奪い、豪はそう言つた。

「この刀ほどじゃないが、この銃も多くの人を喰らっている。」

「豪！」

そう言いながら豪の背中に抱きついてくる上条。

「よかった・・・死んだと思つた。本当に怖かつたんだから・・・」

「ああ、心配かけたな。」

そんな二人の中を邪魔する訳にはいかないと、仁志は今度こそ、下に向かうと言つて豪達から離れて行つた。

人口4万人の小さな町に大きなホテルと、大きなテーマパークがあり、この街の主な収入源はその二つが大部分を占めていた。

街を歩く人たちの3人に1人は、観光客といったリゾートとして、成功した町の一つである。

だが、その街は今、混乱を極め、あちらこちらに火の手が上がっていた。

「これは……」

あまりの惨劇に言葉を失う小野寺と小谷野。

「落ちつけよ。こうなっていることぐらい、少しは予想できたろ。」

ホテルのロビーから出てくる正也の冷たい発言に、冷静さを取り戻す二人。

「しかし、これはあまりにも……どうやって脱出しろと言った」

「ああ駿の言う通りだ。……これからどうする。」

「そんなの決まってるんだろ。達也、レジスタンスは、どうやってここから脱出しようとしてた。」

元レジスタンスの小谷野に正也は尋ねた。

「……俺達のへりを使うと言うのか？」

「それがいに、脱出方法があるのか？」

「いや、無いな……。だが、残念なことに、どうやらへりでの脱出も無理だ。……もう火の手が上がってる。」

ホテルの広い駐車場の一角で、何機ものへりが音を立てながら、燃え上がっていた。

三人はとにかく、移動手段を車にしようと生き残っている車を探し、中に鍵があるか確認していた。

「おい、あつたぞ」

小谷野の言葉で、二人は小谷野の元に近寄ろうと動くが、地下の駐車場からなにか大きなエンジン音が聞こえ始めた。

「まさか……」

正也がそう呟くと、地下駐車場の出入り口から一台の車が飛び出し、

二人の上を飛んで行った。

「馬鹿野郎！気をつける！」

小野寺は、走り去ろうとする車にそう叫んだ。

車を運転する風は、バックミラー越しに二人の生存を確認するが、保住が「放っておけ」と後部座席から言い、風は再び運転に集中した。

くおまけく

小谷野「小谷野達也。身長178、体重80、年齢はわかりません。多分21です」

小野寺「小野寺駿。身長185、体重83、年齢28です。三年間、海上自衛軍に所属、退役した後、警護官としてホテルにいました」

仁志「笹谷仁志です。身長160、体重65、年齢は21です。

緑の化物になってからは、体重が100を超えてるみたいですが自覚なしです」

正也「えっ・・・仁志、お前チビのくせに、デブにもなったの？」

仁志「えっ・・・いや、そうだけど、体格的にはそんなに変化はないからさ・・・」

豪「いや、腹が出てたな・・・」

上条「あつ、私もそれ思った」

淳、登場

豪 「なあ淳。お前って今、何やってるの？」

淳 「何って・・・ツーリング」

豪 「あつ、いいなあ。俺もやりてえ」

淳 「何言つてやがる。俺は絶対に、お前は誘わないからな！」

正也 「ったく、意地張りやがって・・・」

由美 「だって二人は、出来てるんでしょ？・・・私は、応援してるよ」

豪と淳 「ふざけんな！」

正也 「息もピッタリだ」

豪 「・・・ったく、由美はつまりあれだな。所謂いわゆるヤオイに、なってるんだな・・・」

由美 「ち、違います！・・・ただ、ちょっとそう言うのもいいなあって感じるだけです」

三人 「・・・・・・・・」

上条 「つまり、初期段階って事ですね」

マリ 「ねえ、由美姉ちゃん。ヤオイって何？」

由美 「・・・・・・・・」

豪 「知らぬが仏・・・」

「正也っ！」

車に乗り込もうとする正也達に、駆け寄ってきたのは由美達だった。

「由美！無事だったか」

由美という単語にレジスタンスの小谷野が気づき、車から降りると由美に銃口を向けた。

「貴様、鷲田由美か！」

銃口を向けられ、足を止める由美。

小谷野の対応に小野寺は、小谷野に銃口を向けた。

「達也！今は、それどころじゃないはずだ。」

「駿！悪いが、俺は今でも人民解放軍だ。^{レジスタンス}中央出身の俺が、過ごしてきた場所が、どれほど最悪な状況か、わかるか？」

「その事は、言ったはずだ。俺が上層部に掛け合ってみると・・・」

「あの娘を捕えるほうが、確実だ。」

銃を強く握りしめる小谷野を見て、正也はライフルを小谷野に向けた。

「あんた、それでも人間かよ！」

「それは、こつちのセリフだ！俺達を見捨てて悠々と暮らしてたお前等は、人間だと言うのか！」

「それは俺達のせいじゃない、政府の判断だろ。」

「その判断をどうにかしようとは、思わなかっただろ！」

三人の駆け引きが行われる中、ホテルの入り口から、ゆつくりと近づいてくる奴がいた。

「クッフッフッフ・・・この状況下において、仲間割れが出来るとは、相当お前等の頭ん中はドロッドロに腐ってるんだろうな・・・」

その男の登場に、マリは由美の足に隠れ、三人は巨人兵築地に言葉を奪われた。

「あつ、この人は真白築地さん。私達を助けてくれたの。」

「以後お見知りおきを・・・」

深々とお辞儀をする築地だが、その目は三人を今にも喰らい尽くそうとすうようなそう言った目だった。

「さつき、父から連絡がありました。自衛軍も参入してくるそうです。ですが、任務は要救助者の運搬のみです。ですから、自衛軍が本拠地を置くテーマパークに向かうよう言われました。」

銃口を向けられながら、由美は三人に伝えたと、小谷野が銃を下ろすのを合図に残りの二人も銃を下ろした。

車に乗り込む正也達だが、築地は車に乗ろうとはしなかった。

「私は乗り物の類が嫌いたぐいでね・・・歩いて行かせてもらう」

「そんな築地さん、一人で・・・」

助けてもらった事に感謝する由美の心配を横に正也が答えた。

「心配いらないだろ。由美の話聞く以上、化物染みた力をこいつが持っているってのは確かだ。」

正也の言葉に、築地は車の屋根に手を置き、後部座席にのる正也を見つめた。

「おうよ、その通りよ。・・・俺は化物よ・・・だが、俺を化物に変えたのは、人間だ。・・・それを忘れるなよ。人間」

正也達の車は、先ほど走り過ぎて行った車を追いかける形で、走り出し、取り残された築地は、周りにいる化物達に顔を歪ませながら喜んだ。

「クッフッフッフ、極める物を見つけた。」

両手に持った包丁を、研ぎながら音を鳴らし、化物共に近づく築地。「今度は料理なんてみみっちい作業ではなく・・・」

築地は包丁を上手に腕で回し、逆手に掴んだ。

「化け物退治よお！」

豪快な笑い声を上げ、築地は飛び掛かってくる化物達に襲いかかっていった。

その頃、ホテル内では豪と上条が、化物と一切出会わず、廊下を突き進んでいた。

「あつ・・・こっちは駄目だ。敵がいる」

豪の言葉に上条は、迂回ルートを探し「こっち」と豪を誘った。そんな豪の言葉を信じてから、本当に化物とは遭遇しなかった。

「その刀のお陰なのかな・・・？」

豪が大事そうに持つ刀を指差しながら、上条が問いかけた。

「さあな・・・一度、死んだからかもしれないな」

「ねえ、聞きたいんだけどさ、死んだ後ってどんな感じだった？」

「うわっ、それ聞いちゃう？」

「もちろん」

「んゝどんな感じだったんだべなゝ？」

大いに悩む豪。そして導き出された答えを上条に答えた。

「後頭部の太腿ふとももの感触が柔らかかった」

豪の答えに上条はグーパンチで答えた。

「ど変態！」

「いや、よく覚えてないんだよ。気付いたら、その・・・仁がさ・・・その・・・」

豪の言葉に顔を真っ赤にしながら、上条は豪の顎下を蹴り上げた。

「お、お前は女か！」

「豪って名前に恥じないくらいの漢おとこです」

「ああゝもう、うるさい！あの事は忘れろ！馬鹿！」

そう言いながら再び倒れる豪にパンチを入れようとすると、豪はそのパンチを手で受け止め、深刻な面持ちでこう言った。

「おい、・・・ちよつとスカートの裾、上げてみる」

「はあ・・・はあ？何言い出すのよ！」

「違う、そうじゃない。俺の見間違いかもしれない」

「何よ・・・言っておくけど、スカートの下は私、短パンよ」

「緑の発疹があつた気がする・・・」

「えっ・・・」

上条は、何のためらいもなく、スカートを上げると、内腿うちももに緑の発疹が出ていた。

「い、・・・いや、・・・いや・・・」

「仁・・・落ち着け、まだ自覚症状も出ていない」

「私・・・私、あんな化物になるの？・・・いや、そんなの嫌！」
走り出そうとする上条の手を捕まえる豪。

「止せ、どこに行く気だ！」

「ヤダ！化物になんかなりたくない！・・・私は、私は・・・でも、豪にもうつしたくない！」

「大丈夫だ、どうにかなる！・・・なんなら俺に移せばいい！」

「移したくないって言ってるでしょ！離して！」

なんとか暴れる上条を引っ張り、捕まえる事が出来たが、上条は豪の腕の中で暴れ、豪の腰に付けてあつた銃を抜き取り、豪を突き放した。

「止せ、その銃に触るな！」

「来ないで！」

壁に追いやられた上条は、追いかけようとする豪に銃を突きつけた。

「いや、化物になりたくない・・・」

「仁、・・・その銃の引き金を引くな」

豪はそう言いながら、気付かないうちに刀に手が行っていた。

豪は柄を掴み、上条の出方を待つ。

「殺したくない・・・殺されたくもない・・・」

「仁・・・頼む、止めるんだ」

上条は、銃を自分の顎下に持っていき、目を強く握りしめた。
「止せ！」

豪の叫び声が廊下に轟いた。

弾の入ってなかった銃は、カチッと音を鳴らすだけで上条の頭を吹き飛ばす事はしなかった。

だが、上条はその場に倒れ込み、意識を失っていた。

「ったく、びつくりさせるなよ・・・」

豪は倒れる上条を自分の膝の上に乗せ、嫌な汗を拭っていた。

上条の握る銃を外そうとする豪だが、上条の手から血管が浮き出し始めているのに気が付いた。

「おいおい・・・冗談だろ」

豪の体験と同じ症状が出始める上条。

血管の浮き出しが、頭に達した途端、上条は目をカッと開きながら悲鳴を上げた。

「イヤーーーーー!」

「仁!」

下でのた打ち回る上条。

どうにか抑えつけようと、上から腕で抑えつける豪だが、上条は手に握った銃を豪に向けた。

弾の入っていないはずの銃からは、弾が飛び出し、豪の顔の横をかすめ、天井に当たり、瓦礫がパラパラと降ってきた。

豪は、思わず飛び退き、刀を構えた。

上条は、立ち上がると刀を持つ豪を敵と判断し、銃口に向けた。

「くそっ」

街中では、悲鳴と建物が崩れる音が途切れることなく鳴り続け、バイク仲間と観光巡りをしていた加畑淳にもその化物は襲いかかってきていた。

「右に切れ！」

淳の合図でバイクの集団は、化物を交わし、後ろを走っていた淳とその後ろに座っていた山田 大地がバットを手に持って化物の頭を殴った。

「ハーハーっ、ざまー見ろ！」

道路の脇に頭から血を流す化物に山田は中指を立てながら叫んだ。なんとかこの街から出ようと試みるが、そんな淳達の前には、道路を横切るように大きな瓦礫と炎が遮っていた。

「くそっ、ここも駄目だ。淳、他に道はないか？」

先頭を走っていた仲間が、ブレーキをかけ、淳に問いかける。

「待ってる。ルート検索をかけてみる」

淳はバイクに備え付けられたナビを操り、新たな道を探しだした。

「これが、最後のルートだ。壊れてないように祈ろう」

淳はナビで検索したルートを全員に送信し、バイクを方向転換させ、移動を開始した。

「淳、左辺後方・・・ケルベロスだ！」

淳達は、ウィルスに感染した犬をそう呼び、バイクの早さに付いてくる犬に気付いた仲間が声を上げるが、犬はその仲間に飛びつき、バイクは横転した。

「くそっ、逃げるぞ！」

淳を先頭に走り出したバイクは、倒れた仲間を見捨て、アクセルを全開にしなが走り続けた。

ケルベロスは、正面からもやってきて淳のバイクに飛び掛かってきた。

「残念無念、また来週！」

山田は、そう言いながら後ろで立ち上がり、犬をバットで打ち返した。

「イエーイ、ハッハハハ〜イ！」

山田の異常なテンションは、これまでもそうで、その異常性はバイク仲間の全員が知っていた。

特攻隊長として、名を馳せていた事もあるが、山田の走りには誰も付いていけなかった。

「相変わらずだな。山田〜」

「おうよ。淳ちゃんも、こんぐらいの根性見せなきゃ、駄目だぜ〜」時代遅れの髪型に剃り込みを入れ、目つきのキツイ淳。

そんな背中には『時代遅れの風物詩』という言葉を負い、山田はその言葉が気に入ったのと言って走り辞めて、淳達のツーリング仲間になった。

「淳ちゃん、真上、カメレオンだ！」

第二症状の化物が、三体、建物から飛び降りてきた。

「アクセルをフルで回せ！」

淳は今のスピードで、ハンドルを切るのを危険と判断し、落ちてくる前に化物から抜けだそうとしていた。

淳の言う通り、アクセルを回し振り切った奴は二組だけで、アクセルを臆して回せなかった奴等はカメレオンにやられた。

「それでも喰ってる！」

山田はそう言うと、ポケットからナイフを取り出し、後ろに投げると化物の後頭部に刺さり、一体化物が倒れた。

「ストライク!!!」

ガッツポーズを決める山田を乗せ、淳達は道路を走り続けた。

「さあさあ、どこからでも、かかってこいや！」

最後の道も閉ざされ、バイクと仲間を失った淳と山田は、閉ざされ

た道路に追い込まれていた。

正面には、二体のカメレオン。後ろには炎の壁、どちらを取っても地獄なのは間違いなかった。

バットを地面に叩きつけながら、山田は化物に罵声を浴びせ、淳も二つの選択肢でどちらを取るか迷ってはいなかった。

「行くぞお！」

淳と山田は、同時に一体のカメレオンに突っ込み、山田は腹にバットを打ち込み、淳がその間に化物の顎下にひざ蹴りを喰らわせた。仰向けに倒れる化物の顔にバットを振り下ろす山田。

ドシャツと言う音と共にカメレオンの顔は潰れ、血を地面にまき散らした。

「くそつ、離しやがれ！」

淳は横にいた化物に手を捕えられ、カメレオンは淳の手を握り潰そうと力を込める。

「淳ちゃん！」

叫ぶ淳に、山田はカメレオンの腹にバットを打ち込むが、金属製のバットは意図も簡単に折れてしまった。

「なっ・・・」

カメレオンは、淳を頭から食らいつこうと、口を大きく広げた。

「させるかー！」

山田は大きく開いた口に壊れたバットの一部を突っ込んだ。

先の尖ったバットはカメレオンの口に突き刺さり、淳を掴んでいた手を放した。

「逃げるぞ、淳ちゃん！」

手を庇う淳の肩を担ぎ、山田は走り出し、後ろのカメレオンは、口に刺さったバットを抜き取り、淳達に襲いかかってきた。

「伏せる！」

道の先から車のライトが照らされ、誰かの声が聞こえた気がして、

淳は山田と一緒に地面に倒れた。

その瞬間、ライトが眩しい方向から銃声が聞こえ、後ろの化物が倒れる音が聞こえた。

「……たく、あんた等馬鹿か！素手とバットで化物に立ち向かいやがって！」

ライトの向こうから、人影が一体、こっちに近づいてくる。

そして、その人影は、淳の顔を見た途端、足を止めた。

「嘘だろ……なんで、この街にいるんだよ」

その男は、淳にそう言い放ち、淳はどこか聞き覚えのある声に首をかしげるが、ライトを消された途端、淳は、前に立つ男に驚いた。

「……まさか、正也か？」

人も少なくなつた廊下では、金属がぶつかり合う音と、銃声が鳴り響き、豪は飛んでくる弾を刀で切り落としていた。

「我慢しろよ。仁！」

豪はそう言つと、柄先で、壁に追いやられた上条の鳩尾を突き、上条は一度声を洩らしながら豪に寄りかかるように、倒れた。

「くそつ、なんでこんな事に……」

体中に出来た怪我は、徐々に治り、豪は肩で息をしながら、上条を地面に寝かせた。

上条の体が出来た怪我也、治り始め、緑の発疹もいつの間にか消えていた。

豪と上条の周りの壁や床は、銃痕や大きな穴が開き、戦いの激しさを物語っていた。

「……豪も太腿は硬いね」

壁に寄りかかり、いつの間にか寝ていた豪は豪の足を、まくら代わりにさせておいた上条の声に起こされた。

「悪い、寝てたか……」

「ごめんね。……豪、私……止めようと思ったの。でも、体が勝手に動いて……豪の声聞こえてたのに……」

「いや、お互い生きてるんだ……気にするな」

「うん、ごめんね……」

ごめんと言い続ける上条を起こすと、豪は地上を目指し再び歩きだした。

「私を誰だと思っている！水産大臣の保住だぞ！」

『ですから、保住様は現在、御在宅でございます。何度そのような事を申されようと、そちらの要求にはお応えできません。』

「貴様、名を名乗れ！貴様なんか即解雇だ！」

車の中で声を荒げる保住。事務所に電話を入れるが、さつきから同じ事を言われ、すぐに電話を切られてしまう。

「全く、どうなっているんだ！……このワシをとんだ茶番に巻き込みおつて！」

後部座席でふんぞり返りながら、煙草を吹かす保住。

そして、運転をし続ける風は、急にブレーキを踏んだ。

「のわっ！」

ガマガエルは、前に突っ込み、顔を前の座席にぶつけた。

「馬鹿野郎！貴様、どんな運転をしておる！」

「前方に敵です」

「なあにい？」

ガマガエルは、後部座席から顔を出し、前方に立つ男に目をやった。
「フンっ、クズが一体ではないか。・・・蹴散らして来い」

風は、運転席から降りると大きく反り曲がったナイフを両手に持った。

「クフフフ・・・匂うね。人間じゃない匂いがプンプンする。」

両手に持った包丁を逆手に持ち、目の前に立つ女性を待ち構える築地。

風は、両手に持ったナイフを築地に向かって投げた。

築地はそのナイフを、交わし向かってくる風に突進していった。

風はまた新たにナイフを取り出し、振り下ろされる包丁を受け止めるが、築地の馬鹿力に後ろに飛び退いた。

「ハハハハハ、どうしたこんなもんなのか？」

築地は、非力な風に笑みを浮かべるが、先ほど後ろに飛んで行ったナイフが音を立てながら、戻ってくる事に気付き、築地は上に高くジャンプした。

その隙を突き、風は手に持っていたナイフを空中にいる築地に投げるが、築地はそのナイフを叩き落とした。

だが、そのナイフの後ろには糸が付けられている事に気が付いた。

風は、戻ってくるナイフを片手で、抑えながら、糸を振り回し、先端に付いたナイフを再び築地に飛ばした。

地面に着地した築地は、飛んでくるナイフを再び叩き落とすが、素早く糸を巻き戻され、次に飛んできたのは、戻ってくるナイフだった。

「くそつい！」

築地は、初めて苦戦を感じ、声を洩らした。

「・・・なんだ。あの男は、まさか風をあれほどまで追い込むとは・・・」

車という安全圏にいる保住は、二人の戦いを見て、啞然としていた。ナイフを自在に操る風の攻撃を交わし、築地は風に接近しては包丁を振りかざす。

「八八八八八・・・」

「さて……そろそろ、俺達も動き出すか？」

二人の戦いを見ていたのは保住だけではなく、崩れかけた高いビルの上から、黒いコートを着た奴等も眺めていた。

「いや、感染はしてるだろ。発症がまだなだけだ」

「今回の任務は二種類。人間の殲滅と人間の保護」

「みんなは、どうする？俺は保護の方」

「フフフフ……どうやら殺し合うメンバーが、決まったみたいだな」

「あつ、親父。……どうしたの腕が無くなってるぞ」

「ふん、親父をここまで追い詰めたのか・・・結構強そうだな。」

俺、殲滅の方でよかった」

黒服の一人は、強い敵がいる事を喜び、黒いショットガンを取り出した。

「俺が喰ってやるよ」

そんな黒服の頭を撫でる親父。

「さて・・・この仕事が終われば、しばらくは遊び放題だ。存分に楽しんで来い」

親父の言葉を合図に、黒服のメンバーは姿を消した。

「フフフフ・・・何人死ぬ事が出来るかな？」

その頃、仁志は最下層で、同じ意思を持った第二症状の仲間と出会い、敵の一掃をしていた。

「仁志、気付かないか？」

「いや、気付いてる・・・会場に何かいる」

敵の位置を察知しながら、敵を倒す仁志達は、パーティの会場にとつもない気配を感じ取り、会場へと向かっていた。

目の前に飛び出してきた第一症状の化物を一瞬にして切り裂きながら、会場の扉を蹴破った。

中に侵入すると、大きな重低音を叫ぶ、大きな生物がいた。

「これは・・・」

「仁志、・・・俺が奴を引きつける。・・・その間にこの会場を壊せ」

「・・・わかった。こいつを外に出す訳にはいかない！」

「死ぬなよ。仁志」

「いや、死ぬさ・・・俺達に残された道はそれしかない。」
互いに拳をぶつけ合い、仁志は会場を壊そうと、壁を壊し始め、もう一人はその生物に向かって行った。

足元がぐらつき始め、豪と上条はホテルが崩れ出した事に気付き、急いでホテルの外へと飛び出した。

「仁、急げ・・・崩れるぞ！」

「わかってる！」

ロビーから外に脱した豪と上条は、上から崩れ出すホテルを見守っていた。

「仁志・・・」

豪の呟きに気付いた訳ではないが、ふと崩れ始める天井を見上げる仁志。

「豪・・・脱出できたかな？」

仁志の足元には、同じ意思を持った仲間の死体が転がり、仁志は手から鉤爪を出し、目の前に立つ化物に向かって行った。

大きな胸に小さなナイフが刺さった化物に、仁志は声を荒げながら鉤爪を突き出した。

崩れるホテルは、戦い続ける仁志と化物の上に襲いかかり、仁志達を暗闇へと押し込んだ。

黒服登場

黒服？「どうも、俺達なんでも屋です！」

黒服？「人殺しから、死体の解体、なんでも承ります」

黒服？「詳しくは！」

全員 「黒服メンバーズ……」

黒服？「ただいま会員募集中！」

黒服？「……………」

豪 「なあ、あいつ等、止めなくていいのか？」

親父 「フフフフ……構わん。所詮我々は、下請け業者、クライアントがいなければ成り立たない」

正也 「ちなみに今回のクライアントって誰なんだ？」

黒服？「我々は、決して口を割りません！」

黒服？「個人の尊厳を守ります！」

黒服？「詳しくは！」

全員 「クロ。コ、メンバー……」

豪 「ハイ、終了!!」

大型のワゴン車を見つけ、それに乗り換えた正也達は、淳の手の傷

を手当てしていた。

「なんで、ここに淳がいるんだよ」

助手席から淳を見る正也。

「それは、こっちのセリフだ・・・なんで大学生のお前がここにいる」

「バイトだよ。悪いかよ・・・」

「ああ・・・最悪だね」

険悪な不陰気に巻き込まれる小谷野と小野寺。

そして、山田とやけに楽しそうに遊ぶマリ。

「ハハハハ！めんこいな（かわいい）お前！食べちゃいたいくらいだ！」

そう言つて山田はマリをくすぐり、マリもくすぐり返そうとするが、腕が届かなかった。

「ねえ、豪の顔を切つたつて本当なの？」

手当てをしながら由美は、淳に尋ねた。

「ああ？・・・ああそうだよ」

淳の答えに由美は淳の顔を思いつき叩いた。

「なんで、そんな事したの！」

「知らねえよ！しかもなんで今さら、そんな事を蒸し返すんだよ」

「おいおい、勘弁してくれよ・・・呉越同舟つてのは、こう言う意味なのかな」

運転をしながら、そう呟く小谷野にその通りだと首を縦に振る小野寺。

「しかも、呉越同舟の本当の意味を知ってるか？」

運転席に顔を出し、小野寺が小谷野に話しかける。

「なんだよ。これ以上、最悪な状況になるつて言うのか？」

「その通りだ。中の悪い奴等が、同じ船に乗って、嵐を乗り切るつて話だよ。・・・こいつ等も、協力し合えばいいけどな。」

「俺は、無理だと思うね・・・三角関係より泥沼だ」

そう言いながら、小谷野は車のスピードを緩めて止まった。

「これ以上は、進めない。歩いて行こう」

車の前には、大量の瓦礫が待ち構え、まるで地震があったかのように建物は崩れていた。

「地震でもあったのか？これは・・・」

小野寺の言葉に淳は「そうだよ」と呟いた。

「・・・あんた等、知らないのか？地割れが起こるほどの地震があったんだよ。そしたら、化物共が現れた。」

地震が起きても揺れる事が無いホテルにいた彼等には、かなり新鮮でこんなに建物が崩れている事に納得した。

「・・・それにしても、私も豪みたく、なっちゃったって訳ね。」

第二症状の化物を倒しながら、上条はそう答えた。

「ああ、そうみたいだな。・・・外に出てもこんな感じじゃ、市役所もやってないだろうな」

豪は刀に付いた血を振り払いながら、鞘に戻した。

「・・・あのさ、本気にしてないよね？本気で婚姻届出すつもりじゃないでしょうね？」

「何言ってるんだ。希望を持ちたいって言うてたのは、お前だろ。」

「そ、そうだけどさ・・・」

「とにかく、この街から脱出出来てから先の事を考えよう」

「ねえ、豪は好きな人とかいないの？」

「ん、……だつたら、仁は？」

「私は……ああ！もうこの話は終わり！さっさと行こう」

誰もいない道路を突き進む二人、その二人が歩いた場所には、化物の死体が転がっていた。

未だに戦い続ける築地と風の前に新たな敵勢力が現れた。

「やあやあ、人間殲滅メンバーの一人、ヤー・グリムです。グリムって呼んでください」

黒服に身を包んだグリムは、そう言いながら現れたが、築地達は戦いを止める事はなかった。

それどころか、風の投げたナイフが築地をすり抜け、こっちに飛んでくる始末だった。

「うわっ、あぶねえ！」

飛んでくるナイフを避け、地面に倒れ込む黒服の男グリム。

「……ああ、そう。シカトするんだ。シカトしちゃう感じですか・
・」

グリムは、立ち上がると黒い鞭を取り出し、大きな音を鳴らした。

すると、グリムの周りには大量のカメレオンが集合し、列を揃えた。

「俺の鞭で操れない猛獣はいないんだよ！……行け、奴等を喰い尽くせ！」

グリムは、大きく地面に鞭を叩きつけると、カメレオン達が一斉に飛び掛かって行った。

「邪魔を・・・するなあああああ！」

交戦中だった築地と風は、互いに背中を合わせ、飛んでくるカメレオンを切り崩した。

化物達は、見た事もない化物に思わず行動を止めた。

「なんだあ、貴様等はく。せつかくの殺し合いを邪魔するとは、おいクソ女、一時休戦だ」
あま

築地の言葉に何も返す事なく、風は化物の集団に突っ込んでいき、築地は、飛んでくる化物を三枚に切り落とした。

「俺の機嫌は今、最っ高だった・・・だが、その気分を台無しにしたお前達は、すぐ死ね。今すぐ死ね！」

築地はそう言いながら、包丁を前に突き出して突進していった。

「あららら、やっぱり強いな・・・」

グリムは手駒のやられっぷりを見て、ため息を漏らす。

「お前等、一人ずつでやろうとするな！協力して戦え！」

グリムの指示にカメレオン達は、二体ずつになり、築地達を攻撃した。

「又ウウウ・・・」

築地は攻撃を防ぎながら後退し、力の無い風は、数で押し込まれると不利な状況になっていた。

倒しても倒しても、きりがなく現れるカメレオン。

車では、保住が体を丸めて大人しくしていた。

そして、その保住の乗る車の屋根を走る奴が現れた。

「ヒイ・・・」

保住は、頭を抱えて大きな体を丸めこんだ。

「仁！特攻する！道を作ってくれ！」

「了解！」

上条は、車を踏み台に高くジャンプすると、豪が走り抜けようとする周りのカメレオンに銃弾を撃ち込んだ。

撃ち損じたカメレオンを豪は、走り抜けながら倒し、築地達の所へと向かった。

「築地さん！」

築地の背中を襲いかかろうとしていたカメレオンを縦に切り裂きながら、豪は現れた。

崩れた地面に足を取られ、倒れる風に襲いかかろうとするカメレオンの頭に走りながら銃弾を撃ち込み、上条は風の腕を掴んで、後退した。

「大丈夫ですか？」

「・・・大丈夫、助かった」

「築地さん、生きてたんですね」

「クツフフフフ・・・相変わらずいい匂いだ。」

「いえ、そう言うのはいいいで・・・」

「さてと、ここに来たって事はこいつ等を一扫する方法がある訳だよな？」

「・・・無いです。ただ、この化け物の向こう側に、鞭を持った男が居ました。あいつの鞭で化物は動いています」

「なるほどお、つまり奴を倒せばいいって事だな」

「おそらくは・・・」

上条は、豪の合図で、豪の先にいる化物に銃を向けて発砲し、その瞬間、豪と築地は化物を蹴散らしながら、突撃していった。

築地の掛け声が、上条の所まで届き、奥に進むたびに、男の声は小さくなっていった。

「なんなのあいつは・・・」

化物染みた叫び声に身を凍らせていた。

上条の横から化物が現れ、襲いかかろうとするが、その化物の顎下からナイフが突き刺さり、風はそのナイフを引き抜いた。

「あつ、ありがとう。助かったわ」

上条のお礼に、風は全くの無反応だった。

「あちゃー、新たな勢力登場ってか？・・・勘弁してくれよ、あいつ等今のうちに倒しておかないと、面倒な事になっちまうだろ・・・」

グリムは、近づきつつある築地達に面倒そうにため息を漏らす。

「よし、引こう。退却」

「逃がすと思ったか？」

豪は背を向けるグリムの首横に刀を置いた。

「あれ？じゃあ、今、俺の駒を相手してるのは、あの大男だけ？」

「そうだ。・・・色々知ってそうだし、聞かせてもらおうか？」

「そうだな・・・一つ言えるのは、その刀は大事にしておけて事ぐらいかな？」

そう言っているとグリムは、後ろに立つ豪の腹に蹴りを食らわせ、豪は刀を横に振るうが、グリムは距離を取っていた。

豪は、両手で刀を握り、逃げようとするグリムに刀を振り下ろした。鞭を両手で伸ばし、刀を抑えるグリム。

「へえ、さすが、親父の腕を切り落としただけはあるのかな？」

「やつぱり、あの男を知っているんだな？」

「へへ・・・まあね」

刀に鞭を巻きつけて、グリムは豪の顔にパンチを食らわそうとするが、豪はそれを防ぎ、腕を捕まえると、相手を背中にまわして、払い腰を喰らわせた。

「ぬわっ・・・」

仰向けに倒れるグリムの鼻先を潰そうと豪の拳が振り落とされるが、その前にグリムは豪の両足を弾き、バランスを崩した豪の腹にひざ蹴りを喰らわせた。

豪は腹に入った足を両手で抑えると、体を捻り足関節に持ち込んだ。「イテテテテ！」

グリムは、下に落ちる豪の刀を拾い、豪に切りかかり、刀は豪の頬

をかすめ、血が垂れた。

「ああ！もう頭にきた！仕事なんて関係ねえ！お前は、ぶっ殺してやる！」

グリムは刀を構えながら、そんな事を言うが、後ろに立つ築地には気付いてなかった。

「死ぬのはてめえだ……」

「えっ？」

手に握られた刃こぼれの激しい包丁をグリムの頭の先から突き刺す築地。

グリムは、体を痙攣させ、築地はそのまま包丁を下へと押しに行った。

グリムは頭から血を噴き出し、体を震わせ、包丁が首に達した時、ようやく体の震えは止まり、グリムは目を閉じた。

「……さて、次はお前だ。豪」

「えっ？」

築地は包丁を逆手に持ち変えると豪に近づいてくる。

「えっ……築地さん。冗談でしょ？」

「冗談？冗談って言うのはなんだ？」

「それに……俺達が争う理由なんて一つもないでしょ？」

「お前が俺よりも強そうだ。それ以外に理由はない」

「いやいやいやいやいや！意味が分かんないっす！……それにホラっ、向こうも無事に終わったみたいですし……」

豪が指差す方向では、風と上条がカメレオンを退治し終えたらしく、上条がこっちに手を振っていた。

「フン……三対一はごめんだ……また会おう」

築地はそう言うと、闇に紛れて行った。

「あつ、保住だ！」

風が、車の中に二人を誘うと、中にはガマガエルが一匹、ふんぞり返りながら座り、それをみた上条は指をさしながら、言った。

「ゲツ、保住大臣！」

二人の反応に、不機嫌そうな顔が、さらに皺くちやになる保住

「フン、貴様ら何ぞに名前を呼ばれる筋合いはない」

風は運転席に座ると、車を走らせた。

「なんでここにいるの？」

上条の問いかけにに应じる事なく、窓の外を見続ける保住

「仁・・・お前、ホテルの名簿見てないのかよ。名簿に載ってただろうが・・・パーティに出席してたんだよ」

「えっ？そうだったけ？」

よくあのホテルから生き残ったな・・・そう思う二人を乗せて車は走り出した。

瓦礫が道を塞ぎ、行く手を遮る中、先頭に小野寺と小谷野が立ち、その後ろに淳や由美、最後尾に正也の順番で並びながら、目的地に進んでいた。

「まっ、銃の扱いをしらねえ野郎は、すっこんでろって事だよ」

「ああ？てめえだって素人同然だから、先頭じゃなくて蚊帳の外なんだろうが」

その言葉に淳は、正也を睨みつけながらそう言い放ち、凶星を突かれた正也はさらに反論をするが、先頭の二人にいい加減にしろと怒鳴られた。

「おい、お前等、いい加減にしとけよ。こっちだって好きで守ってる訳じゃねえんだ。そのまま続けるってんなら、お前等二人とも置いてくぞ」

小野寺はそう言い放ち、再び歩き出すとその後ろに山田が付いて行った。

「なあなあ、俺にも銃をくれよ。守る人数は多い方がいいじゃねえの？」

「残念だな。お前みたいな情緒不安定な奴に、銃を渡す程、俺は馬鹿じゃない」

「ええ、じゃあそっちの人は？」

「おいおい、俺が駿よりも馬鹿だつて言いたいのか？」

小谷野はそう言いながら、サバイバルナイフを山田に投げ渡した。

「銃よりもそっちの方が使い慣れてるだろ」

「へへっ、ありがとさん」

山田は、腰にしまい込むとマリの方へと戻って行った。

「おい、小谷野・・・」

「いいじゃねえか、守る人数は多いに越した事はない。事実、元自衛軍のお前とレジスタンスの俺が2トップを組んでるんだぜ？」

「まあ、確かに・・・反りの合わないはずの二人が、後ろにいる奴等の仲違いを止めに入るってあり得ない事も起きてしまったしな・・・」

そう言う二人の後ろでは、声は出していないが相変わらずにらみ合いを続ける二人がいて、後ろを振り返らずとも、容易にその光景が想像できて、ため息をつく二人。

その時、遠くで爆発音と銃声が聞こえ、小野寺達は、音の鳴る方へ

急行した。

「近いぞ！」

小谷野の答えに、全員物陰に潜み、小野寺と小谷野が様子を伺った。数十メートル先にカメレオンが数体、崩れたビルの入り口に立ち、入口付近にはバリケードを築き上げ、交戦する人間がいた。

「正也、俺と小谷野が先に出る。援護を頼む」

正也は一度頷くと、先に物陰から出て、狙撃場所へと向かった。

二人は、正也の準備が終わり次第、物陰から飛び出し、カメレオンの方へと駆けだした。

正也は、こっちの存在に気付いたカメレオンの頭に銃弾を食らわせ、二人は銃を乱射した。

「早く、こっちに来い！」

弾幕を作りあげると、バリケードに潜む奴等に小野寺がそう叫ぶ。バリケードからは、二人の人影が飛び出し、こっちに向かってくる。

「グレネード！」

小谷野は、銃に備え付けられたグレネード弾をカメレオンの軍勢に打ち込み、二人を連れてその場から離れた。

「ハア、ハア・・・た、助かりました」

救い出した二人は男女のペアで、まだ幼さが顔に出ていた。

「俺達、自衛軍のヘリを見つけて、後を追ってたんですけど、途中で化物に見つかっちゃって・・・」

「ああ、死ぬかと思った」

肩で呼吸する二人を落ち着かせ、まずは自己紹介をさせた。

「あつ俺、鯉沼 士郎しろうつす。18歳です」

「私は、寿 こいづき カリンです。22歳です。」

二人は、観光地にやってきた寿と、この街に住んでいる高校生の鯉沼は、街で出会い、一緒に逃げていたと言う。

だが、その二人が持つ武器は、かなり強力なものだった。

鯉沼の持つ銃は、連射性で破壊力のある突撃銃で、特に寿が持つて

いる銃は、ダネルMGLでグレネード弾を連発する事の出来る銃だった。

「どうしてそんな物を持っている？自衛軍でも、まだ使用されてないはずだが？」

元自衛軍の小野寺が首をかしげるが「レジスタンスじゃね？」とレジスタンスの小谷野が答えた。

「死体から拾ったんです。テレビやアニメでよく出てくるし、私、西日本の人間なんで、武装権が認められてるんで、銃の扱いは慣れてます。」

北東北や北海道よりも、レジスタンスの攻撃が多い、西日本では武装権を条例として施行されている地域も多く、逆に武装権を認められていない所の方が少なかった。

ほとんどの目が小谷野の方へ向けられるが、小谷野は全く悪びれる様子もなかった。

「お前らだつてな、中央で生まれて育てば、こうなるさ」

「・・・まあいい。新しい仲間も加わった訳だし、そろそろ動き出そう。ここもいつまでも安全じゃないからな」

小野寺の言葉に全員が腰を上げ、テーマパークへと向かい歩き始めた。

「あの、風さんは、もしかして保住大臣の秘書とかそんな感じなんですか？」

静かな空間に耐えきれず上条が、運転をし続ける風に話しかけるが、風は返事をしようとしなかった。

「答えてやれ、風」

保住の言葉に、風は「はい」と小さく答えた。

「保住大臣は、私の父です」

二人が全然似てない事に対し驚く上条だが、豪は手を上げて「それは無い」と答えた。

「ごめん、俺、政治情勢とかも学んで、保住さんの事も調べてたけど、保住さんは独身のはずだ。・・・まあ愛人関係とかあったけど。」

「フン・・・これだから何も知らん餓鬼は・・・」

頭に来るような発言を吐き捨てながら、保住は答えた。

「こいつは、人造人間だ。俺が研究者に資金を提供して作った」

「馬鹿な・・・人造人間の研究は条約で禁止されてるはず」

「ああ、だから施行される前に作ったのだ。犯罪の遡及は原則禁止だからな。・・・人造人間は、俺達が望むように作る事が出来る。

年を取らなくさせる事、無駄な感情を省く事、運動能力を極限にまで引き上げる事、形や色、年齢まで指定できる。そして、その生きられる年月もな」

保住の言葉はまるで、風を道具の一つとして見ているかのような発言だった。

「こいつの父親は、確かに俺が注文したから父親という事で間違いないが、遺伝的な物は一切関係ない。そして、こいつの母親は、ただのどこにでもあるフラスコ管なのさ・・・」

保住の言葉に豪は、保住の胸倉を掴み上げた。

「あんた、それでも人間か！」

「何を言い出す。なら聞くが、牛や羊、豚と言った喰い物は今やほとんどがクローンだ。それに対して不平不満があるか？動物は作ってもいいのに人間は駄目とはどういう理屈だ？」

「違う、俺が言いたいのは、そう言う事じゃない！人一人、作っておいて、自分の娘をまるで道具扱いする態度が気に入らないんだ！」

「フン、貴様等とて、同じ事だ。さっきの動きは明らかに、作られ

た人間にしか出来ない動きだ。」

「俺達は、人間だ！それは風さんだって同じ事だ！」

「・・・風、車を止める」

保住の指示に従い風は車を止めた。そして、保住は扉を開き、二人に出て行くように促す。

「気分を害する奴なんかと一緒に行動なんか出来るか。・・・出ていけ」

「まだあんたは、何も答えちゃねえぞ・・・」

「その眼の傷はどうした。そこまで細かく複製されたと言う事か？」
保住の言葉に刀を掴む手が強く握りしめられるが、運転席から降りてきた風にナイフを喉元に突きつけられる豪。

「どうか、御退室願います」

風の指示に従い、車から降りる豪と上条。

「風さん、あんた間違えてるよ！なんのためにそいつに忠を尽くす」

「それは、父が私を必要としてるから」

「あんたの存在意義はそれだけなのか！」

「そうです」

「だったら、このガマガエルが死ねばあんたはどうする！」

「それは・・・」

明らかに戸惑いを隠せない風にガマガエルが叫ぶ。

「風！何をしている。さっさと車を出せ」

保住の指示に風は、逃げるように運転席へと駆けこんだ。

「風さん、あんたは人のためじゃない！自分のために生きてみる！自分で生きる意味を見出すんだ！」

走り去る車に大声で、訴える豪。

「ねえ、豪！・・・あれ！」

そう言つて上条が指差した方向には、道端に倒れる一人の男がいた。
「生存者か！」

倒れる男に駆け寄ろうとする上条と豪。

だが、豪はその男から発せられる異様なオーラに気が付いた。

「仁！そいつに近づくな！」

「えっ？」

そう言つて豪の方へ振り返る上条。その隙について、男は後ろを向く上条に襲いかかった。

タイムリミット

黒服？「親父、さつそくグリムの奴やられちゃったぜ？」

親父「なんと・・・フッフフ、ようやく死ぬ事が出来たのか」

黒服？「まあ、いいんじゃない？」

黒服？「そうそう、素直に保護の方をやっておけば、よかったのにさ」

黒服？「・・・完全無知」

親父「フッフフ・・・葬式は盛大にしてやらないとな」

黒服？「いいねえ、友達とかたくさん呼んでさ」

黒服？「友達？」

黒服？「友達ね・・・」

黒服？「交友関係無」

全員「ハア・・・」

豪「なんか、あいつ等可哀想なんだけど・・・」

正也「あの・・・俺でよかったら、参列しますけど」

淳「お前、止めとけて、ああいう奴等は何するかわかんねえぞ」

正也「ナイフ振り回す、お前には言われたくねえよ」

淳「ああ！正也、てめえ！」

正也「なんだこの野郎！」

豪「まあまあ、落ち着いて」

二人「黙れ！」

豪「何だこの野郎！」

淳「ああ？やんのか、ゴルア！」

豪「やってやろうじゃねえか！柔道三段舐めんなよ！」

正也「だったら、獵友会舐めんなよ！」

淳 「俺は・・・元野球部キャプテン舐めんなよ！」

豪 「黙れえ！俺知ってんだぞ、ジャンケンで負けてキャプテンになっただけで事を！」

正也 「しかも、野球部って9人しかいなかったじゃねえか！」

淳 「うっ・・・だ、だったら豪、柔道部は何人だったよ！」

豪 「えっ、ええつと・・・二人」

淳 「先生を人数に入れてんじゃねえよ！・・・正也！お前に関しちゃ、何、裁縫部って？意味わかんねえんだよ！」

正也 「しゃーないべや！なんか部活に入らなきゃ駄目だって言われて、適当な部活に入っただけだから！」

上条 「ねえ、ドングリの背比べって知ってる？」

由美 「まあその通りだけど、言わない方がいいと思うよ」

マリ 「知らぬが仏です」

山田 「マリは物知りだな〜めんこいな〜」

マリ 「エヘヘ・・・」

山田 「ところで、知らぬが仏ってどういう意味？」

由美 「自分が馬鹿だって事を知らない人の事を言うのよ・・・」

山田 「つまり、あの三人って事か、なるほど」

上条 「いや・・・それはあんたも・・・ああいいわ」

上条に襲いかかってきた男は、刀を取り出し上条に向かって振り下ろした。

だが、その刀は上条と男の間に割り込んだ豪が、刀で受け止めた。ガキンと言う音が響き、しばらくの間、鏝迫り合いが続いた。

「・・・まあ、いいだろう」

男は、そう言うのと刀を鞘におさめた。

「一体、何のつもりだ」

豪は、刀を構え上条も銃を取り出し、男に向ける。

「待て、俺は今回、保護の方だ。殲滅の方じゃない」

「一体何の事？」

上条の問いかけに、わざとらしく無視する男。

「あああ！何こいつ！撃つていい？」

「待て、仁、落ち着け。・・・どういう事だ。お前は一体何だ」

豪の問いかけに、男は服の肩の部分に書かれた？の文字を見せてきた。

「・・・俺は、黒服のナンバー？をやらせてもらっている。秋葉露彦^{つゆひこ}だ」

「ねえ、私と同じ質問なんだけど、どうして私の質問には答えてくれないの？」

再び無視する秋葉。

「あああ！どうやら、相当死にたいらしいわね！」

「落ち着けて仁。黒服って何の事だ」

「お前は、俺の仲間ですでに会っているはずだ。鞭を使う無知な奴とな」

「あいつの仲間？」

「そうだ。そして、お前も・・・俺達と同じ共生者だ」

「共生者？」

「あつ、ついでにそのポンコツも」

「ポ・・・ポンコツウウツ！」

ポンコツ呼ばわりされた上条は、引き金を引くが、秋葉はその弾丸を切り落とした。

「・・・わかったか。共生者とは、こういう奴を言う」

怒りに肩を震わせる上条を落ち着かせながら、豪は、話を戻した。

「さっき保護だとか殲滅だとか言っていたな。さっきの男は俺達を攻撃してきたぞ」

「奴は殲滅の方に入っていたからな。俺達はなんでも屋だ・・・通称『黒服』」

「黒服・・・」

「ああ、今回この一件で、二個の注文をされた。一つは、人間の抹殺。もう一つは、人間の保護だ」

「それで、お前は俺達を保護しに来たと言うのか？」

「そうだ。保護といっても三日間、一緒に行動するだけだ。」

一緒に行動すると言う言葉に豪の背中にしがみ付き、激しく首を横に振る上条だが、豪が首の動きを止めた。

「・・・どういう事だ」

「正確に言つと、すでに一日目は終了しようとしている。後二日とちよつとだ・・・ウイルスが死滅するまでのタイムリミットだ」

「ウイルスが・・・死滅？」

「このウイルスにとって酸素は猛毒なんだ。ウイルスは、媒体を通して増殖し、進化をするが、三日後には酸素によって死ぬ。もちろん感染した人間もだ。肌が緑色に変色し、ウイルスが死滅し始める手足から動かなくなり始める。」

「ま、待った。つまり俺達も死ぬのか？」

「いや、お前達は数少ない共生者だと言ったはずだ。お前達の中にいるウイルス達は、体内でお前達に力を分け与える。身体能力が上がった原因はそこにある。」

「つまり、共生者にならないと、人間は死ぬのか？」

「そうでもない。発症しなければ、普通の人間でも問題はない・・・

今の所、共生者の可能性が見受けられるのは、お前達二人と、さつきまで一緒にいた巨人の男とスレンダーな女だ。」

「・・・色々と教えてくれるんだな」

「まあな。俺は仲間だと信頼してほしいからな・・・他にも聞いた事があるなら、まずは銃と刀を下ろしてくれ」

秋葉の言う通り、二人は武器を下ろしたが、いつでも取り出せるよう手には握ったままだった。

「保護する仲間は何人いて、殲滅の方は何人いるんだ？」

「保護は俺を含めて三人、殲滅は後一人だ。」

「なんでも屋と言ってたな。誰なんだその雇い主は」

「それは言えない。だが、いつか会えるだろう。奴等もこの街で行動を開始している」

「もし、お前の仲間が俺達に襲いかかってきたらどうするつもりだ」

「斬る。クライアントの命令は絶対だ。黒服の信用にかかわる問題だからな・・・だが、奴は強い。俺やお前のように刀を持つ奴にとつて、もつとも苦手となる武器を持っている。」

「遠距離からの攻撃？」

「いや、中距離だ。奴の銃は散弾銃だ。ショットガン遠方からのライフルの攻撃なら斬る事も出来るが、散弾はさすがに無理だ」

「うん・・・確かに・・・」

「わかったら、さっさと移動しよう」

「どこか行く当てがあるのか？」

「もちろんだ。テーマパークだ・・・あそこには今、自衛軍が本拠地を置いている」

「待て待て、自衛軍が居るからと言って何だっていうんだ？」

「俺は、別に行かなくても構わないが、そこに向かっているお前の仲間がいると言ったらどうする？」

「行く」

「わかった」

秋葉はついて来いと言うと、凸凹とした道を歩き始めた。

一日目、終了

「ねえ、今気が付いたんだけど、もう朝日が昇ってもいい時間帯だ。」

由美が腕に付けたパソコンに書かれた時刻を見て、そう言うが、空は真っ暗なままだった。

「あの分厚い雲のせいだよ・・・薄気味悪い色しやがって」

鯉沼が空を見上げながらそう言い、紫と黒が入り混じった雲に唾を吐き捨てた。

「ねえ、史郎君はこの地理に詳しいの？」

「それが、ここに越して来たばかりで、右も左もさっぱり」

鯉沼はそう言いながら両手を上げてお手上げ状態みたいなポーズをとった。

「じゃあ、ここに来るまではどこにいたの？」

「それは、実は俺も西日本の出です。両親の都合でこっちに来たんですけど・・・」

「それじゃあ、ご両親は・・・？」

「あつ、大丈夫です。二人とも出張中です」

「そう。よかったわね」

「まあ俺がこんな状況になっても、連絡を一切してこない奴ですけ

どね」

「それだったら、私だって同じよ・・・自分が必要とする時以外に連絡をもらった事なんて一度もないわ」

「まあ大臣補佐は、そんなイメージですよね。」

「えっ？・・・気付いてたの？」

「ちよつと、・・・俺だって一応、高校生だ。あんたが何物かだなんて知ってますよ」

勝ち誇ったかのように鯉沼は言うが、その鯉沼の頭の上に大きな胸を乗せ、寿が割って入ってきた。

「正確には、私がさっき彼に教えました」

「ちよ、カリンさん！止めてください」

頭に乗った巨大な二つのボールを初々しい鯉沼がテンパリながらどかし、そんな反応に二人の女性は思わず笑ってしまった。

「いやゝこんな初々しい時期が私達にもあったのよねゝ」

「そうそう、こんな時期があつたはずなのよゝ」

頬を赤く染める鯉沼の頬を突つつく二人といじられる鯉沼を見て、恨めしそうに見つめるのは、淳と正也だった。

「おい、淳、よだれ出てんぞ」

「そう言う、てめえは、鼻血だ」

「これは、さっき転んだだけだ」

「ハッ、転んで鼻血出していいのは、中学生までなんだよ」

「そう言うお前は、口から血が出てんぞ。どっかで転んだか？」

「ああ？何言つてやがる・・・俺は？」

正也に指摘された事を信じられず、口を拭くと手には確かに赤い血が付着していた。

「何だこれ？・・・」

淳は、拭つてもあふれ出す血に首をかしげ、正也は淳の反応に、淳の肩を掴んだ。

「おい、お前、緑の発疹はあるか！」

「ああ？いきなり何言い出すんだ。ある訳ねえだろ」

「腹は減ってないか」

「減ってねえ、こんな状況で減る訳ないだろ」

淳の服をめくり上げ、正也は緑の発疹を探すが、それらしきものは発見されなかった。

「ったく、何だよ！ 気持ち悪いな」

正也を突き飛ばし、淳は破れた服の一部を引きちぎり、出血している部分を抑え始した。

「淳・・・もし、腹が減り始めたなら俺に教えて。いいな？」

「ったく、意味わかんねえんだよ」

そう言つて淳は、愚痴を溢しながら歩き続けるが、正也は前を歩く二人にある事を伝えた。

「おそらくけど、淳に第三症状が出ているかもしれない」

「第三症状だと？・・・もし、発症したらどうなる」

小野寺は、正也の言葉に声を潜めて問いかける

「わからない。今の所、食人行動に出る様子もないし・・・経過を見届けるしか出来ない」

「まあ、症状が出たら、彼には申し訳ないが殺すしかない」

小野寺の答えに、顔をしかめる小谷野。

「うまく行くといいけどな・・・それに山田と言う男が、それに納得してくれるとは思えない。あの男に似た奴を一度見た事がある。

奴は加畑に惚れまくっている。・・・別にそう言う意味じゃないぞ。ああ言う男を納得させるのは、至難の業だ」

「一番なのは、正也の推測がただの思い違いで終わる事だな・・・」

グループの輪から、少し離れながら歩く山田とマリは、進行方向の向こう先が、薄っすらと明るくなっているのが見えた。

「おい、テーマパークってあれなんじゃねえの？」

山田が指をさしながら、声を出し小野寺は、山田の指差す方向を見て、眉をひそめた。

「なんだ・・・ありや？」

小野寺の独り言に、小谷野も加わり「やけに明るいな」と呟いた。

「駿。自衛軍つてのは、もしかして馬鹿なのか？」

「さあな、俺が所属してたのは、海軍だ。上層部の捻じれのせいで、陸とは連携をうまく取れていない」

「そんな事は、どうでもいい……陸軍が馬鹿なのか、それとも、何かがあつたかだな……」

先行していた人達に合流した正志達も、その明るい光と陽気に流れる音楽が、目と耳に入ってきた。

「なあ、由美。本当に親父さんは、何故か営業中のテーマパークに行けって言ってたのか？」

正志の言葉に、由美も父親の言葉を疑問に思うが、そう伝えてきたのは、間違いないから「うん」としか答えられなかった。

「俺と小谷野で少し、様子を見てくる。残りは……いや、加畑。お前も来い」

「はあ？なんで武器を持っていない俺を連れてく」

小野寺の言葉の真意を知る、正也と小谷野は、顔を曇らせるが、何も言おうとはしなかった。

「考えても見ろ。もし、俺達が様子を見に行ってから、残った物たちが襲われたら。守られる人数は少ない方がいい……わかるな？」

小野寺の言葉に、納得する淳だが、何かが引つ掛かるようで、眉を歪ませたまま頷いて見せた。

淳が頷くのを見て、山田はすかさず手を上げた。

「淳ちゃんが行くなら、俺も連れてくよな？」

「駄目だ。お前は、マリを守ってる」

「ええ、置いてきぼりかよ……」

口を尖らす山田をマリは「いい子、いい子」と慰め、小野寺達は出発した。

「おい、淳。お前、口から血が出てるらしいな」

瓦礫の上を歩き続けながら、二人の後を、追いかけるように歩く淳に小谷野は話しかけた。

「ああ？・・ああ、そうなんだよ。なんでかしらねえけど、さつき詰め物しておいたから・・」

そう言つて、淳は口から布を取り出すと、赤茶色になった布を見て、顔を歪めた。

「うわっ、キモ・・」

淳は、血で汚れた布を地面に投げ捨て、前を歩く二人はそんな淳の反応を窺いながら、目を合わせていた。

「加畑。お前、腹は減ってないか？」

「なんだよ。お前まで、正也みたいな事、言い始めやがつて・・全然、減ってねえよ。つてのは、嘘だけどよ。別にかなり減つてるとかはないね」

冗談半分で笑いながら言う淳の言葉に、二人は銃を握り締めた。

「そろそろか・・」

「かもしれないな・・」

小さな声で淳に聞こえないように、会話をする二人だが、「おい」と淳が後ろで声を出し、後ろを振り返った。

「あれ・・」

淳が指をさす方向には、テーマパークを鉄の網で囲んだ外側の通路を歩く、二人の物陰がいた。

「もしかして、自衛軍じゃね？」

そう言つて、淳は声を上げて手を大きく振ろうとするが、その前に

二人に取り押さえられ、地面に抑え込まれた。

「アホか！俺はレジスタンスだぞ。自衛軍に見つかったら、即効射殺だってーの」

淳の耳元で、そう呟く小谷野だが、小野寺は、薄暗くてよく見えな
いが、二人で歩く人影を見て、こう呟いた。

「あいつ等、自衛軍じゃないぞ・・・何物だ？」

「はあ？何を根拠に、言ってるんだ？」

淳の言葉に、小野寺は双眼鏡を淳に手渡した。

「だったら、聞くんが、自衛軍があんな原始的な武器で、巡回をして
いるとも思っているのか？」

双眼鏡を覗き込むと、向こうに見える人達は迷彩服や自衛軍の制服
ではなく、白装束を着こみ、鉈と槍を肩に担いでいた。

「ああ？なんだあれ？」

「とにかく、正規軍じゃないなら、俺にとっちゃ好都合だけだな」

「いや、危険すぎる。この街はさっきからどうもおかしい。そもそ
も、レジスタンスに対しての対応もいくらなんでも遅すぎる」

小野寺がそう呟くのと同時に、居残り組がいる方向で、何やら銃声
が聞こえ始め、爆発音も聞こえてきた。

「まさか、あいつ等！」

起き上ろうとする淳の頭を押さえつける小野寺。

「止せ、頭を上げるな・・・向こうに気付かれる」

白い服に身を包んだ男達も、銃声に気付きこちらに目をやっていた。
「気付かれてヤバイって事があるのかよ」

「だったら、加畑、お前もなんで小声で話しかけてくる。俺の憶測
を信じてるからじゃないのか？」

「それは・・・」

「それに、言っちゃ悪いが、意外と好都合だ。向こうの人数が減る
事で、俺達の生存確率は確実に上がる」

小野寺の言葉を聞いて、自分の耳を疑い、口を開いたのは小谷野だ
った。

「駿・・・マジで言っているのか？」

「ああ・・・。けど、なるべく急いで戻ろうとは思っている。戻らなかったら、生存確率は上がるかもしれないが、人として壊れちゃう」

白い服の人達は、自分達に害が及ばないと判断したのか、顔を下ろし、再び歩き始めた。

「行くぞ・・・体制を低くして進む」

小野寺の指示通り、上体を低くしながら、みんなが待つ所へと向かい歩き始めた。

残っていた正也達は、カメレオンの集団と交戦中だった。

正也と鯉沼、寿は、瓦礫の物陰に隠れながら、前に立つ十数体のカメレオンを狙い攻撃を繰り返し、非戦闘民はその後ろで怯える事しか出来ないはずだが、山田のせいでもなかった。

「くそっ、小野寺さん達は、まだ戻ってこないんスか！」

いら立ちを隠せない鯉沼は、体を揺らしながら銃を撃ち続け、その後ろでは寿が弾を装填していた。

「カリンさん、まだですか？」

正也は、装填に戸惑う寿に、尋ねるが、寿はさらにテンパリ始める。

「ああ、ちよっと待ってて下さい。あと少しなんで」

正也と鯉沼は、歩いてくるカメレオンに狙いを定め、一体ずつ倒して行く事しかできなかった。

「お待たせしました。装填完了です」

寿は、そう言うとダネルを構え「ファイヤー！」と叫びながら引き金を引いた。

大きな銃口からは、ポンツという音が鳴り、その音とは裏腹に、飛んで行ったグレーネードはカメレオンの周りで大爆発を起こした。

「おおおお！」

唸り声を上げる中、正也は今のうちに弾を装填しようと思い、ポケットの中に手をつ突っ込むが、手には弾の感触が伝わってこなかった。
「ヤバイ！弾切れだ」

正也の叫び声に、銃を装備する二人の顔は一気に青ざめた。

「えっ、どうするんスか！・・・俺の銃じゃ、カメレオンは一撃じゃ倒せないっすよ！」

「私のだって、直撃しなきゃ、ただの足止めにしかないんですよ」

何となく、緊張感が持てないのは何故だろう、後ろに山田がいるからだろうか？マリの心配を和らげようと山田が自分の武勇伝を言っているからだろうか？

「マズイって！小野寺達、さっさと帰ってこい！」

次第にカメレオン達は、こちらに近づき始め、鯉沼と寿は、必死に銃を撃ちまくっていた。

その時、カメレオンの集団の後ろから、三人の人影がこっちに近づいてくるのが鯉沼の目に映った。

「ちよ、あれ・・・こっちに近づいてきますよ」

爆発音が鳴り響いている事に気が付き、豪達は音がする方へ駆け寄ってきていた。

「秋葉っ！俺と仁が正面から斬り込む。お前は彼等の護衛に回ってくれ」

秋葉は、豪の指示に軽く頷き、大きくジャンプするとカメレオン達を大きく飛び越え、正也達が隠れる瓦礫の上に着地した。

上から正也達を見下ろし、ある二人と目が合うと「よお」と軽く挨拶をした。

「あ・・あんだ、一体」

人の跳躍では、あり得ない動きをした秋葉を見て戸惑う正也。

「共生者だ。お前の知るべき事柄ではない。お前等は、ここで見物でもしている。面白い物が見れるぞ」

秋葉にそう言われ、正也は瓦礫から顔を出し、カメレオン達の方を見ると、そこには必死になって戦っていた相手を、バツバツと切り崩す男の人影と、その男を援護する一人の女性の姿が目飛び込んできた。

「なんだよ。・・あいつ等。本当に人間か？」

正也がそう呟く中、瓦礫から出てきた顔を噛み砕こうと襲いかかってくるカメレオンの首を秋葉は、一瞬にして撥ねた。

「ああ、あいつ等はまだ、自分を人間だと思い込んでる。そして、そこにいる二人は、人間を演じている」

秋葉は、そう言つと顔色を悪くする鯉沼と寿に目をやった。

「おいおいおい、さつそくばらしてんじやねえよ！秋葉」

さつきまでの後輩色の強かった鯉沼の態度は一変した。

「っていうか、秋葉ってそんなにお喋りだった？」

「何を言うか。俺だって人間を演じたい事だつてあるさ」

寿の質問に秋葉はそう答え、さつきまでの二人とは全く異なる光景に、正也だけでなく後ろに隠れていた由美や山田までもが硬直していた。

「皆さん、大丈夫ですか？」

硬直している人達がいる事に気付かず、カメレオンの血を体中に浴びた豪が、近寄ってきた。

「えっ・・・豪？」

正也の言葉に、豪はライフルを持つ正也を発見し再会の喜びを噛みしめようとするが「嘘、豪なの」という、女性の声に目をやり、喜びを噛みしめる前に何とも言えない感情で、表情が固まってしまった。

「由美……？」

犬派と猫派

小谷野「さあ、遂に再会を果たしてしまった、豪と由美」

小野寺「揺れ動く豪の心！そして、上条と由美の壮絶な闘いがこれより繰り広げられる」

淳「なあ、お前等、本来、豪の事知らないだろうが」

小谷野「いや、なんか紙に書いてある奴を読めって手渡されてさ」

小野寺「ああ、しかもそんな昼ドラ展開の所にこれから戻らなきゃ、行けないのか？」

小谷野「勘弁してくれよ・・・呉越同舟の騒ぎじゃないぞ、これは・・・」

豪「あつ、大丈夫です。俺、そう言うの面倒なタイプなんで」

正也「そうそう。そんなだから、淳に顔を斬りつけられちまうんだよ」

由美「はあ・・・恋って恐ろしいものですね」

上条「その通り・・・ヤオイの方でもそう言うのはわかるんですね」

小谷野「おおつと、ここで早速、上条が先制パンチ！」

由美「ま、まあ、ヤオイとか言っている時点で、素質あるんじゃない？フッフ、高校生なのにね」

小野寺「あぁつと、由美選手。自分の事を棚に上げて、上条選手を猛烈に批判！」

鯉沼「なあ、豪さん。面倒なら二人とも物にしちゃえば？」

豪「な、何を言うか！俺は案外、純心な心を持っているんだぞ！」

寿「うわっ、自分で言ってる人ほど、心はどす黒いんですよ」

小谷野「おおおつと、遂に二人は髪の毛の引っ張りあいが始まった！」

淳「うわっ・・・女同士の喧嘩って、いつ見ても恐ろしい物だ

な」(棒読み)

由美 「ちよつと、そんな事してないからね」

上条 「そうよ。なんで、そんな事しなきゃいけないのよ」

正也 「あああ、言っちゃったよ。台無しだよ・・・せつかく、豪にその気にさせようとしてたのに」

豪 「はあ？俺が何？」

由美 「何、もしかして豪って、争う女性を見て笑ってるんだ」

上条 「うつそ・・・ああ、だから変な歌を歌ってたんだ」

豪 「えっ・・・ちよつと二人とも」

上条 「サイテー、しばらく話しかけないで」

豪 「いやいや、仁・・・ちよつと、距離を置かないで下さい！
お願いします！」

上条 (ログアウト)

由美 (ログアウト)

豪 「・・・」

淳 「へっ、女ったらしが」

豪 「・・・」

淳 「・・・おい、どうした。反感しろよ」

豪 (ログアウト)

淳 「えっ、おい豪！ちよつと、俺が酷い奴みたいじゃねえか！」

正也 「いや、お前は元々サイテーな野郎だろ」

淳 (ログアウト)

小谷野 「あああ、おい、正也。この気まずい空気どうにかして閉めるよ」(ログアウト)

小野寺 「全くだ」(ログアウト)

正也 「えっ・・・ちよ、俺一人？どうしろと？ええ・・・ええつと、
じゃあ二日目突入！」(ログアウト)

「そうか・・・幸助も」

「ああ、でも仁志には会ったんだな。そりゃよかった」
「今まであった事を語り合う正也と豪」

「久しぶりだね。豪」

「あ？・・・ああ、由美、よく生きてたな」

豪と目が合い、由美は思わず顔にある大きな傷に、心を痛めた。

「その傷・・・じゃあ本当に淳と・・・ご、ごめん」

謝ってくる由美に対し、思わず顔の傷を隠す豪。

「いや、謝らないでくれ、俺が悪かったんだ」

地面に座っていた豪はゆっくりと立ち上がり、秋葉に声をかけた。

「秋葉、お前はここに残って、正也達を守ってろ」

「・・・構わないが、お前はどつする気だ？・・・いや、お前らかな？」

薄気味悪く笑う秋葉に対し、豪は顔をしかめた

「俺・・・俺達は、他の生存者がいないか、探す。正也、悪いが俺達は別行動を取る」

「なんでだよ。俺達と一緒に・・・」

「さっきの戦いを見ただろ。俺達と一緒にいたら、危険だ・・・後2日、お互いに生き残ろう」

豪が差し出した手を正也が強く握りしめ、豪は由美に対し「じゃあな」と軽く別れを告げると、上条と共に、正也達から離れて行った。離れて行く二人を見送る黒服メンバーの三人は、二人の反応を見て思わず口をニヤつかせていた。

「あいつ等、共生者になったばかりだからな。仕方ないよな」

高校生の成りをした鯉沼が、ダネルの点検をする寿に声をかけてた。
「まあね、やっぱりシヨックなんじゃないかな？人間じゃないって
気付かされた時って」

「・・・理性暴走」

三人の会話を聞いていた山田が「どういう事だ？」と声をかけてきた。

「あんた等は、二人に救われたって事よ。良かったじゃない、私なんて、始めて人間じゃないってわかった時、目の前にいる友達を肉片に変えちゃってたわ」

寿の言葉に対し、鯉沼も「俺も」と共感し、意味がわからんと山田は三人から去って行った。

「ねえ、豪・・・私・・・私だけだよ。おかしくなっちゃったの、私だけだよ」

ただ無言のまま、歩いていた二人だが、上条が言葉を震わせながら、豪に尋ねていた。

「お願い、こんな気持ち、私だけだよ・・・そうだって言って」

「いや・・・お前だけじゃない、俺もそうだ。・・・なんだよ、なんだよ共生者って・・・俺達は、人間じゃないって言いたいのかなよ！」

豪は刀を取り出し、瓦礫に思いつき叩きつけた。

「なんでだ！なんで、正也や由美にまで殺意を覚えなくちゃいけないんだ！・・・あいつ等が、俺達を見て怯えているのが手に取るよ

うにわかる」

豪はそんな彼等を見て殺意が芽生えた事に腹を立て「最低だ。俺」と口ずさんでいた。

「そんな事・・・そんな事言わないで！ねっ、これからは誰とも会わないようにしよ・・・もう二人だけ・・・誰とも会いたくない・・・」

今の状態で、ただの人間に出会ってしまうと、いつ自分が持つ武器が動いてしまうかわからない上条にとって、一緒にいる事が出来るのは豪だけで、それは豪も同じ事だった。だが、豪は上条の提案に首を横に振った。

「・・・そうはいかない。秋葉が言ってた・・・もう一人、黒服がいる。そいつは、正也達を狙ってくるかもしれない・・・それに、他にも生存者がいるかもしれない」

理性と良心がぶつかり合い、頭を抱える豪。

そんな豪を見て、上条はただ黙って突っ立っている事しか出来なかった。

「フフフフ・・・自分の正体に気付き、傷心したと言った所か」

項垂れる二人の前に、不気味な笑い声を出しながら黒い雨合羽を羽織った親父と呼ばれる男が登場した。

突然の登場に、上条は銃を構えるが、親父は待てと言った感じに手を前に出した。

「別に今回は殺して貰いに来た訳じゃない。助言をしに来たのだ」

「助言だと？」

豪は横で銃を構える上条の手を下ろしながら、親父に話しかけた。

「今、お前達には三つの選択肢がある。白服、自衛軍、はたまた黒服」

「何の事だ」

「いずれわかる事だ・・・それと貴様にこれをやろう」

親父は豪ではなく上条の方を向き、持っていた銃を放り投げ、上条はそれを捕った。

「もう必要のない物だ」

だが、上条は銃を手に取りながらも「要らない」と親父の方に銃を突き返した。

「要らない。．．．こんなの要らない．．．なんなの共生者って！あんたがこんな事をしてるの！？」

喚く上条に対し親父はただ黙ったまま動かず、痺れを切らせた上条は「なんか言えよ！」と叫んだ。

「フフフフ．．．私が菌をばら撒いていると？．．．違う．．．私は

『北の最悪』の被害者．．．いや、自然に選ばれたと言うべきか．．．そして、お前達も」

「自然に．．．だと？」

「知りたければ白に会え。．．．だが、今のお前達は彼等の考えに共感できるとは思わんがな」

親父は、不気味な笑いと共に闇の中に消えて行つた。

親父が姿を消し、結局銃を返し損ねた上条は、頭を抱え発狂していた。

「ああ！！もう、意味わかんないし、訳ワカメ！」

「うん．．．確かにな．．．」

髪をかき乱す上条を横に豪は、何か思い悩んでいた。

「ねえ、さつきから何悩んでんのさ」

「いや．．．『北の最悪』の事さ．．．」

「北の最悪？．．．原子力発電で起きた事件の事？」

十数年前、北海道に点在する原子力発電所の一つがレジスタンスに占拠され、軍を保持していなかった北海道は、中央に応援を要請。

中央政府の強引なやり口により原子力が爆発し、放射線が漏れ、人質やレジスタンス、近隣に住む住民の全員が死亡した。

「中央の人間は無人兵器で介入してきたから、その場に居ないはず。

生存者が一人も出なかったから北の最悪って呼ばれたんだ」

「でも、あいつは被害者とか言ってたわね・・・」

「・・・保佐を探そう」

「えっ？・・・なんで？」

「あいつは北の最悪の時、中央防衛軍の指揮官だ・・・何か知ってるかもしれない」

「・・・まあ、特にやる事もないしね。いいんじゃない」

豪と上条がいなくなり、正也達は二人がいなくなった事に対し、何故かわからないが安心感を抱いていた。

「・・・なんだよ、この気持ちは・・・まるで豪の事を怖がってるみたいじゃねえか・・・」

正也は嫌な脂汗を拭いながら、自分の気持ちに腹を立てていた。だが、同じ感情を抱いているのは由美も同じだった。

「豪は・・・自分達の事を共生者だって言ってた。一体何の事？」

由美の問いかけに秋葉は「突然変異」と答え、意味のわからない返答に鯉沼が代わりに応えた。

「簡単に言えば、あの二人は人間じゃなくなっただけで事。緑の化物となんら変わらない存在って事だよ」

鯉沼の答えに寿は頷き「私達と同じ存在って事」と付けくわえた。

「つまり、豪はウイルスに感染していると言う事か？」

「そうだよ。ウイルスの発症について、正也の考えは半分正解って言ったところかな？ウイルスの発症は人によって異なる。大概はウイルスに侵され理性を失って緑の化物になっちまうけど、まれに自覚症状なしに共生者になる奴もいる」

「それが、豪と横にいた上条だと言うのか？」

「残念ながら違います。あの二人は半ば強制的に共生者にされた奴だよ。体内に大量のウイルスを注入されてな」

「ウイルスを注入？一体どうやって・・・」

「二人の持つている武器を見なかったのか？・・・あれはな」

続きを言おうとする鯉沼は突然、ヘラヘラした顔を止め、何かに気がついた。

「敵混在」

「ああ、みたいだな・・・」

秋葉の言葉に鯉沼はそう答え、銃を構え寿も武器を構えた。

「すまない、遅くなった・・・って誰？」

そう言いながら小谷野達が正也達に合流するが、秋葉が新しくいる事に気がついた。

「さて、お三方。責任追及はしないつもりだけど、そこからどけた方が身のためだぜ？」

後輩色の強かった鯉沼の変貌ぶりに小谷野が「はあ？」と首をかしげるが、秋葉が三人に向かって走り出した。

「なっ・・・！」

思わず小野寺は銃を構えるが、秋葉はそれをスルーし、小谷野を押し倒し、飛んできた矢を掴み取った。

「・・・尾行」

「そう言う事。俺達が足止めしとくから、さつさと逃げな・・・寿、後はよろしく」

「了解です！・・・みんな、こっち」

訳のわからない状況で、寿は小谷野達を先導し始めた。

「何？どういう事だよ！」

飛んできた矢に対し淳は混乱し、正也に話しかけていた。

「俺が知るか、ボケ！とにかく、今はこいつ等の指示に従った方がいい」

秋葉は手に持っていた矢を飛んできた方向へ投げ返し、遠くで悲鳴が上がった。

「一体撃破・・・夜の雨」

「さつさと離れる！矢の嵐が飛んでくるぞ」

空気を切り裂く音が鳴り始め、上空を見上げると大量の矢が空の一部を隠していた。

「瓦礫の下に隠れる！」

小野寺の言葉に、全員が瓦礫の下に潜り、鯉沼は飛んでくる矢を銃で撃ち落とし、秋葉も負けじと刀で自分に飛んでくる矢を切り落としていた。

「淳ちゃん！」

山田はボケつと突っ立っている淳にダイブし瓦礫の下に隠れた。

「お、おう・・・悪い山田」

「ったく、頼むぜ淳ちゃん」

矢が降り止み、寿が「今のうちに！」と全員に言った。

寿の答えに全員が瓦礫から飛び出し、由美はマリを抱えて走り出した。

互いに瓦礫の上に立つ秋葉と鯉沼は後ろを振り返らずに足音が聞こえなくなってから会話を始めた。

「ん・・・全員行ったかな？」

「一人残留」

「はあ？」

鯉沼が後ろを振り返ると小野寺の姿があった。

「お前、何やってるの？」

「いや、お前等といった方が生き残る可能性が高いと思ってな・・・援護ぐらいは出来ると思う」

笑いかける小野寺に鯉沼は思わず、大声で笑い出した。

「ハハハハッ！状況が読み込めない状態で、俺達についたか！面白い奴だな」

「正解か？」

「・・・残念不正解だ」

小野寺の額と喉に矢が突き刺さり、目を閉じる間もなく仰向けに倒れた。

「矢を目で追えない奴が、生き残れる訳ないだろ」

後ろで小野寺が倒れる音が聞こえた時、ようやく敵が姿を現した。

白い服に身を包んだ二人で弓を構える奴と槍を持つ奴が秋葉と鯉沼の前に現れた。

「よう、黒服。いいのか？一人、殺っちまったぞ」

「別に問題はないね。クライアントからは『極力守れ』の指示だからな。一人ぐらいどおって事無い・・・ただ、俺達の後ろにいる奴を追うってんなら、相手してやるよ白服」

鯉沼は銃を彼等の足元に乱射し、二人は高々とジャンプした。

だが、それを追って秋葉もジャンプし、弓を持つ男に向かって刀を抜いた。

「油断大敵」

弓を持つ男は宙で真つ二つに割れ、槍を持っていた男を地面に蹴り飛ばした。

「・・・くそっ」

地面に叩きつけられた男は起き上ろうとするがその前に鯉沼が男の額に銃口を突き付けた。

「くそじゃねえよ。馬鹿鹿」

「ああ、駄目だ。弓は完全に割れちゃってるわ」

鯉沼は死体から弓を見つけ状態をみるが、使えない事がわかり放り投げた。

「秋葉、槍の方はどうよ？」

秋葉は頭の無くなった死体から槍を取り出すが見事に壊れている所を鯉沼に見せつけた。

「あちゃ、駄目じゃん。道理で張り合いのない訳だよ」

頭を掻きながら鯉沼は、矢の刺さった小野寺を発見した。

「可哀想に・・・救ってやりたかったんだけどね」

矢の刺さった傷口から緑色に変色した小野寺を見て秋葉は小野寺の首を切り落とした。

小野寺を埋葬し終わると二人は正也達を追って歩き出した。

「ねえ、豪って犬派？猫派？」

飛び掛かってくるケルベロスを蹴り飛ばしながら上条は豪に尋ねていた。

「ん、犬派だったけど・・・なんか猫派に鞍替えしようかな・・・」
変貌を遂げた犬達を見て豪は、本気で悩んでいた。

「でも猫って自由気ままなんだよな……それに比べて犬は忠実だし……おすわり！」

目の前で威嚇するケルベロスに対し一応、言ってみるが全く効果がなく逆に襲いかかってきて豪に首を切り落とされていた。

「うわゝ豪って束縛するタイプなんだ……あつ、でもドーベルマンとか似合いそうだね」

「はあ？何を言うか！俺はダックスフントの方がいいと思うぞ！もしくは柴犬！……って言うか飼うなら断然、柴犬！」

「なにムキになってるのよ。言っておくけど私は猫派ですから……敵め！」

「いや、別にどっちでもいいだろ」

「嫌！将来、飼う事になるかもしれないでしょ！」

「猫で良いんじゃない？」

「なによ、その冷め様は！家庭事情に無関心な夫って最低だと思えます！」

「飼う時になったら考えようや」

ようやくケルベロスもいなくなり二人は一息ついていた。

「……ねえ、本当に私達結婚するの？」

「はあ？突然どうした」

「いや……だって……」

思わず由美の事を思い浮かべる上条だが、そんな思いをかき消した。「何でもないわよ！馬鹿」

その時、正也達がいた方向から銃声が鳴り響いた。

「まさか……」

走りだそうとする豪だが、そんな豪の腕を上条は引きとめた。

「待って、何しに行くの？」

「何って……正也達が襲われているのかもしれない」

「助けるの？助けたとしても……私達から、助けれるの？」

「……だからと言って見殺しにするのか？」

「……そんな事はしたくないけど、豪はこの気持ちを抑えつけ

る事が出来るの？」

上条の言葉に、豪も自分の感情を制御できるか悩んでいた。

「ねえ、豪……」

「接触しなければいい。遠くから……正也達が気付かない所から敵を排除していけばいい」

「……でも、豪の武器じゃ」

「頼む、仁……お前しかいない。お前の武器で」

豪の頼み事を断る理由も見つからず上条は「わかった」と頷いた。

「よし、急ぐぞ」

「正也！あんた達は、ここから少しでもいいから、離れてなさい！」

白い服を身にまとった奴等から逃げたまではよかったが、正也達の前に立ちはだかったのは大量のカメレオンだった。

寿は、カメレオンと正也達の間立ち、時間稼ぎをしだす。

「みんな付いて来い！」

小谷野を先頭に走り出す中、寿は正也を呼び止めた。

「いい？最後の砦はあんたがしっかりと守りなさい」

寿は最後の砦と言って淳に目をやった。

「……」

正也は寿の言葉に返事もせず、小谷野達の後を追って行った。

寿は、ゆっくりと近づいてくるカメレオンに向かい、グレネードを何度も打ち込み、瓦礫の陰に隠れ銃にグレネードの弾を詰めていた。「……どうも、あいつ等の動きが妙ね・誰かに操られてる」確か黒服の新人にも化物を操る奴がいたっけか？なんて思いながら、弾を詰め終え、再び瓦礫から飛び出し、カメレオンに向かって引き金を引いた。

寿の撃つグレネードの爆発音が遠くで鳴り響いているのを耳にしなから、小谷野達は全員、息を乱し、小休憩をとっていた。

「はぁ・・くそっ小野寺の奴、どこに行きやがった」

考えられない身体能力を持つ奴等と離れてしまい、そんな中、主戦力として活躍していた小野寺の行方がなくなつた事で、不穏な空気が辺りを埋め尽くしていた。

「どうするんだよ！・・おい、鷺田の娘！お前の父親はテーマパークに行けって言ってたんだよな！だが、テーマパークで待ってた奴等は、明らかに俺達を殺そうとしてた」

声を荒げる小谷野だが、一番ショックを受けていたのは由美だった。

「そんな・・・なんで・・・」

その場に膝をつき、気が動転する由美とその由美に当たる小谷野の間に入つたのは淳だった。

「おい、落ちつけよ・・・由美だつてわざとじゃないんだ。そんなに、こいつの動転する様を見ればわかるだろ」

淳の言葉に、小谷野も黙り込み頭を掻きむしり始めた。

「……3日だ。俺達は3日間、生き残ればいい。豪がそう言った」

「ああ？豪だと？」

正也の呟くような言葉に淳は反応し、正也の方に近寄って行った。

「おい、今、豪って言ったか？」

「ああ・・・言った」

「あいつに会ったのか」

「さっきまでいた」

「なんでここにいる」

淳の問いかけに正也の目つきが変わり、さりげなく手を腰の後ろに回した。

「同じくバイトだ・・・そして、あいつは共生者になった」

「共生者？・・・一体何の事だ」

「信じられないような身体能力を持つ奴の事だと・・・そして、お前も！」

正也は、腰からハンドガンを抜き取り、淳に向けて引き金を引いた。

新たな共生者

豪 「はい……というわけで、なるべくテンションを低くして、やっていきましょう」

淳 「おい、お前どんだけ、前回の事で傷ついてんだよ……」

豪 「だから……俺は腹黒くないし……それなのに、未だに仁も由美も口きいてくれないし……」

淳 「ハア……これだからお前は駄目なんだよ」

豪 「どうせ、俺はガラスのハートですよ……」

淳 「いや、ガラスなんかじゃねえよ。お前はチキンだ」

豪 「おいおい、誰が鶏肉だ！……お前なんかミミガー的なマイナーな喰いもんだろぅが！」

淳 「いや、そう言う意味じゃなくて……って誰がミミガーだ！ミミガー舐めんなよ！なまら美味いだろうが！」

正也 「おいおい、お前等二人は、合びき肉みたいな物だろうが」
豪と淳「黙れ、煮卵！」

正也 「なんでだよ！煮卵ってどんな存在だよ！……ラーメンに入れたら美味いだろうが！」

淳 「馬鹿、単品で喰ってみろ。口の中がヤバイ事になるぞ」

豪 「つまり誰かが横にいないと、目立たない存在って事だよ」
正也 「はああああ？意味わかんねえし！」

上条 「ねえ、だったら私は？」

三人 「……ワカメ？」

上条 「なんで？」

豪 「いや、……よくわからないけど、なんとなく」

淳 「あゝあゝ、つまりどうでもいい存在だって、遠まわしに言っちゃまったよ」

豪 「いや……そう言う訳じゃなくて……」

上条 「うわっ、サイテー」

保住 「なら、ワシなら高級食材のなにかだろうさ」

淳 「いや、見た目からして食用ガエルだろ」

保住 「・・・クスが」(ログアウト)

上条 「あゝあ、保住さんって結構、傷つくんだよ」

淳 「はあ？関係無いし・・・っか、どうでもいい」

山田 「なあ淳ちゃん、だったら俺は？」

淳 「・・・玉ねぎ？」

山田 「ああ、駄目、玉ねぎ苦手」

淳 「じゃあ、キャベツ」

山田 「いや、野菜系全般駄目なんだよね」

淳 「じゃあ肉類？」

山田 「いや、喰い物全般がちよつとね・・・」

淳 「お前、一体、何食ってんだ？」

一発の銃声が鳴り響き、しばらくの静寂がその場を包み込むが、そんな空間を淳は引き裂いた。

「な・・・いきなり何しやがる！」

「・・・それは今、握っている物を見てから言うんだな」

正也は銃を下ろし、訳のわからない淳は知らぬ間に握っていた右手を開いた。

淳の握られた手の中には正也の撃った弾丸が入っていた。

「何だよ・・・これ」

「間違いないな」

戸惑う淳を横に、正也は淳に銃を向け、後につられるように小谷野も淳に銃を向けた。

「正也・・・こいつ、発病したのか」

「ああ、鯉沼が言っていた。自覚症状なしで発病する奴がいると・・・だが、まだ発狂する可能性も捨てきれない」

「発病？発狂？・・・何言ってるやがるんだ！俺にもわかるように説明しろ！」

「・・・淳、腹は減ってないか？」

「ああ？さつきもその質問したな！・・・ああ、もうペコペコだよ！腹減って死にそうだ！これでいいのか！」

その言葉にホテルにいた連中の顔は一気に引きつり、「冗談半分で答えていた淳は全員の顔色を見て、しまったと後悔していた。

「・・・縛ろう。鯉沼達が合流してから、判断してもらおう」

「同感だ」

小谷野は、銃を向けたまま正也にロープを手渡し、正也はロープを片手に淳に近づいて行った。

「おいおい、待てよ・・・正也、何考えてやがる」

「いいから、今は黙って俺の指示に従え」

二人から銃を向けられ、無意識に両手を上げる淳に正也はジリジリと歩み寄ってくる。

淳が後ずさりをしようと足を少し動かすだけで「動くな！」と小谷野の厳しい声が飛んできた。

「おいおい、この状況をよく考えろよ！指示に従えだ？従える訳ないだろ！正也、お前は俺を殺そうとした！それに、銃を突きつけて

俺を縛り上げようとしている」

「今のお前は危険な状態にあるんだ！だから、お前を保護しておく必要があるんだ」

「ああ、今この状況が危険な状態だよ！」

互いに譲らず銃を突きつけられた淳は動けず、正也は化物と化した淳に動くのを躊躇していた。

硬直状態が続き、そんな中「淳ちゃん！」という声が正也と淳の間に入った。

「山田」

「淳ちゃん、先に行け後から追いかけるから」

割って入った山田の片手にはナイフが握られ、そのナイフはもう片方の手で捕まえているマリの喉元に突き付けられていた。

「お前等！動くなよ、俺が狂ってる事わかってんだろ？・・・マジでやっちまうぜ」

山田はナイフを強く握りしめ、マリは今まで優しかった山田の態度が一変し、冷たい物を喉元に押し付けられ、恐怖のあまり悲鳴すらあげられないでいた。

淳は山田の行為に甘え、正也達から背を向けて走り出した。

「淳！待て、行くな！」

「動くなって言うてんだろぅが！」

「止せよ、山田！お前だつてわかってんだろ？俺達は引き金は引けない。お前だつてそのナイフは動かせない！」

「確かに！でもよ、こっちはナイフだぜ？この硬直状態が続いて、俺の腕が疲れてきたらうつかりやつちまうかもしれないぞ」

歯を食いしばり悔しさをにじみ出す正也と小谷野。そして、山田はゆっくりとマリを連れて後ずさを始めた。

その時、突如として地面が大きく揺れ出した。

その揺れの大きさは地面が大きく割れる程で、全員が地面に手を付き揺れが収まるのを待った。

だが、山田のすぐ後ろで地面が大きく割れ足を取られた山田とマリ

は地割れの中に吸い込まれていった。

マリの名前を叫ぶ由美の声が地面が揺れ動く中、響き回った。

「……淳を追うぞ」

正也の言葉に崖の前で蹲っていた由美が正也を睨みつけた。

「俺達には力が必要だったんだ」

「正也の言う通りだ。ホテルの時のように銃がそこ等じゅうに転がってるのと訳が違う。残弾数も残り少ない」

何も反論しない由美に正也が行くぞと促すが、由美は首を横に振った。

「……行くなら二人で行けばいいじゃない」

「死にたいのか？」

「死にたくは……ない。……でも、もう誰を信じていいのかわからない！何なの！なんでこうなるのよ！」

その場で地固太を踏み始め、二人の事が目に入っていないらしく由美は頭を抱えて蹲ってしまった。

「……駄目だ。錯乱状態にある」

由美の反応を見て、正也は小谷野に話しかける。

「どうする……ここに留まって、鯉沼達に戻ってくるのを待つか？」

「……いや、この街だって広いんだ。ここに辿り着ける可能性だってかなり少ないだろう。だったら、淳を追った方がマシだと思う」

「……わかった。まあ同じ所に居坐るのは得策ではないからな」

二人は錯乱状態にある由美の手を無理やり引っ張りその場を離れ、淳の後を追った。

（数分前）

「・・・おい、大丈夫か？仁」

その頃、同じく地割れに巻き込まれた上条を救おうと地割れに飛び込み、上条の手を掴み崖に刀を突き刺し、豪達はぶら下がり状態にあった。

「ああ、死ぬかと思った」

「いや、それよりもはやく登ってくれないかな？肩が脱臼しそうです」

「うん、ごめんね」

上条はそういうと豪の腕を使って壁を上がり始め、豪も付いて行くとした。

だが・・・

「マリちゃああん！！」

由美の叫び声が出来あがったばかりの崖の上から聞こえてきた。上を見上げると先ほど、正也達と一緒にいた男と少女が落ちて来ていた。

だが、手を伸ばそうと届きそうにない。

「おい、手を伸ばせ！」

豪が必死に叫ぶと、男がこっちに気付きニタリと笑いかけてきた。

「受け取れ、化物共！」

男はそう言つと、少女を豪の方へと放り投げてきた。

豪は、その子を受け取り、それを確認した男は、笑い声を発しながら崖の下へと落ちて行き、奈落の底へと姿を消した。

崖の上に登るが、そこには正也達の姿はなく誰一人としていなかった。

「・・・名前、何て言うんだ？」

「福井・・・マリ」

泣きじゃくる少女に豪は名前を聞き、泣きじゃくる少女は泣きながら自分の事をマリと呼んだ。

泣きじゃくるマリだが、二人は妙な違和感を抱いていた。

「なあ・・・俺達が怖くないのか？」

流れる涙を拭いながらマリは、目の前に屈んでいる豪を見つめ「傷がちよつと怖い」と答えた。

「仁・・・これは俺の勘違いか？」

「いや、そんな事は・・・多分、無いと思う」

二人は曖昧なやり取りをして、ある共通した考えを抱いていた。

・・・この子は俺達を恐れていない

泣きじゃくるマリを横に二人は、顔を見合わせ首をかしげていた。

「・・・もしかして、すり込みか？」

「すり込み？卵から孵化したヒヨコが初めて見た物を親と思うやつ？」

「そんな感じ。まだ人間と共生者との区別がつかないんじゃないか・・・」

豪の推測になんとなく納得する上条。

同じ共生者かと思っただが、秋葉のような感じはマリからは感じ取る事が出来なかった。

「マリちゃん。ここで何があつたの？」

「あのね・・・あのね、マリの喉に冷たい物を押しつけられてね、地面がグァーって揺れてね、それから」

上条の質問に必死に答えるマリだが、さっぱり理解できず、そんな中、異様な気配を感じ取り、豪と上条は武器を構えた。

「グルルルル・・・」

異様な気配を出す奴は喉を鳴らしながら、豪達の前に姿を現した。

「くそつ、ケルベロスか・・・」

豪は瓦礫の中から出てきたケルベロスに舌打ちをしながら、刀を抜

いた。

だが、ケルベロスの様子がどうもおかしい。明らかに尻尾を振り、こっちに好意を示していた。

「ああ・・駄目だ。俺、犬派だから斬れないかもしれない・・・仁、お前がやってくれない？」

「じよ、冗談でしょ？・・・私にあの犬を殺せって言うの？」

「グルルル」

相変わらず恐ろしい声を発してくるケルベロスだが、声と態度が全くの逆で、二人はどうすべきか迷っていた。

「ああ！ワンちゃんだ」

マリは泣きじゃくるのを止め、戸惑う二人を無視してケルベロスに近づいて行ってしまった。

「あつ、馬鹿！その犬に近づくな！」

豪の声に、マリは振り返り「ええ〜でも〜」と駄々をこね始める。だが、ケルベロスは背を向けたマリに飛び掛かった。

「しまった！」

マリに目を取られていた上条と豪は全く動けず、ケルベロスはマリを押し倒した。

「キヤハハハハ、くすぐったいよ〜」

ケルベロスは、マリを殺そうとせず何故か顔を舐めまわしていた。

「・・・・ああ、わかった」

呆氣にとられていた豪は、このケルベロスの正体に気付き、武器を下ろして頭をかいいた。

「こいつ・・いや、この犬、共生者だ」

「共生者？・・・・えつ、だって犬じゃん」

「武器だってウイルスに感染するんだ。犬が共生者になろうが不思議じゃないだろ」

二人がそんなやり取りをする中、マリはケルベロスに「お座り！」と命令し、犬は素直に従っていた。

マリの言う事を聞くのだから自分だって大丈夫だと上条が指示を出

すが、噛まれる始末で、

「ああ、もうやっぱ私は猫派だ！」

銃を両手に構え、怒り狂う上条を豪は必死に抑え、マリはこの犬に『ボチ』と名付けた。

必死に逃げていて今まで気付かなかったが、今、淳は瓦礫の上を飛ぶように走っていた。

「うおっ・・・すっげ・・・」

自分の身体能力が異常なまでに上がっている事を疑問に思わず、むしろ淳は楽しんでいた。

目の前にいるカメレオンに飛び掛かり、頭の上に着地するとカメレオンの首を捻じ曲げ、周りにいるカメレオン達を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされたカメレオンはすぐに体制を立て直し、淳に襲いかかるが淳の突き出した拳がカメレオンの腹を貫通し、それを見たカメレオン達は思わず、後ろに下がり始めた。

「逃がすかよ・・・さっきは俺の腕をめちゃくちゃにしゃがって、お返ししちゃらねえとな」

気が付けば、折れていた腕も元通りに治り、淳は後ろに下がるカメレオンを睨みつける。

その睨みが効いたのか、カメレオン達は一斉に、背を向けて走り出した。

「殺す！」

淳はそう叫びながら背を向けたカメレオン達に襲いかかろうとするが、その前にカメレオン達の頭が何発かの銃声と同じタイミングで吹き飛んだ。

頭を失ったカメレオンはその場に倒れ、淳の目の前に現れたのは、ショットガンを手に持った男だった。

緑の返り血を浴びた男は銃を肩に寄せながら、淳に話しかけた。

「あれ？先客がいたのか、悪い事したな」

「あんた誰だ」

「俺？・・・黒服の・・・って言ってもわからないか、香田 伸司だ。ところで、今、人探ししてるんだけど、刀を持った男を知らないか？」

「刀？・・・あの変なしやべり方する奴か？」

「変なしやべり方？・・・『敵・発見』とか言っやつか？」

「そう」

「ああ、そりや秋葉だろ・・・そっちじゃねえわ」

「なら知らね」

「そっか、じゃあな」

そう言って立ち去ろうとする香田を淳は呼び止めた。

「おい、待てよ！・・・あんたはこれから何するんだ？」

「何って・・・仕事・・・お前は対象外だから、どうでもいいんだよね」

「仕事？・・・何の？」

「人間殲滅・・・かな？」

「人間？・・・俺だって人間だろ」

「本当にそう思ってるのか？・・・お気楽な奴だな。だったら、聞くんが、お前は今、なんで一人になってる？」

「はあ？」

「利用されそうになったんじゃないのか？・・・人間に」

「・・・なった」

口籠る淳を見て、香田はそんな淳を鼻で笑った。

「フツ・・・許せんのか？それ？」

「許せる訳ねえだろ・・・あいつ等、意味わかんねえんだよ」

「だろ？・・・だから、殺すんだよ。・・・付いてくるか？付いてくるんなら、色々教えてやるよ」

再び香田は歩きだし、淳はそんな香田の後を追って歩き始めた。

「クツフツフツフ、お前、俺より強そうだな」

不気味に笑う築地は、黒のレインコートを着た親父に対面し、ボロボロになった包丁を嬉しそうに鳴らしていた。

「フフフフ・・・己よりも弱者ではなく、強者を望むか・・・それもまた良し」

親父はレインコートの中を探り始め、二対の長いシザーナイフを築地に投げ渡した。

「使つと良い・・・その包丁よりは使えるだろう」

「御親切に・・・試し斬りをしてもいいのかな？」

「フフフフ・・構わん。だが、お前は何を望む？」

「強者」

「求めてどうする」

「極める」

「なるほど・・・では、見極めさせてもらおう」

親父はレインコートの中から腕を出し、築地を挑発し始めた。

築地はシザーナイフを両手に構えると叫び声と笑い声が混ざった音を口から出しながら親父に立ち向かって行った。

「なあ、ポチ・・・どこに連れてくつもりだよ・・・」

「グルルルルル・・・ワン」

あれからどれほど歩いただろうか、マリはポチの背中に乗り大はしやぎで、ポチは相変わらず低い声で受け答えをしてくる。

「絶対にポチとか似合わないし・・・」

先ほど腕を噛まれて未だに不機嫌な上条は、豪の後ろでぶつくさとはき、その度に豪に宥められていた。

「まあポチで反応するんだし、いいんじゃないの？・・・マリも気に入ってるみたいだし」

先頭をあるくポチは鼻を地面に付けながら歩き、鼻をスンスンと鳴らしていた。

「大体、犬が先頭って私達は犬以下か！」

上条の呟きに、反応したポチは「ワン！」と一鳴きし、上条は肩をビクつかせ噛まれた腕を隠した。

「まあ、今の反応見たら、正直、仁は犬以下に見えるかもしれないな」

「そんな〜・・・酷いよ、豪・・・」

「冗談だって、面白いからちょっとカラかってみただけ」

落ち込む上条の肩をバンバン叩き、笑い飛ばす豪。

そんな二人のやり取りをジーっと見つめてくるマリに豪が気がついた。

「どうした、マリ？」

「二人は付き合っているのか？だって」

マリから思いもよらぬ質問に二人は硬直し「はああああ？」と上条が悲鳴に似た声を出した。

「えっ？そう見えるか？」

「ちよつと、少しは否定しなさいよ！・・・ってマリちゃん、なんでそんな言葉知ってるの？」

「ABCでどこまで行っただの？」

マリの質問に上条は顔を真っ赤にし「Bか？」と尋ねてくる豪を蹴り飛ばした。

「マリちゃん！・・・まさか、あの女に何か吹き込まれたのか！」

「違うよ。ポチが聞いているの」

「ポチい？」

マリの下にいるポチが軽く「ワン」と答え、マリが「ABCって何？」とポチに尋ねていたため、上条が必死に止めた。

「待て！ポチ！・・・その子に犬視線で下手に説明しようとするな！」

「痛ってえ〜・・・マジで蹴るとか止めてくれよ〜」

「うるさい！馬鹿！」

頭を抑えながら近寄ってくる豪に見事な突きをし、今度は腹を抑え

て倒れた。

「えっ？・・・ポチ、思春期って何？」

おそらくポチは上条を見て『思春期だな』とでも呟いたのだろう。

上条は「ヒイイ」と悲鳴を上げ、「思春期ってのは仁のような奴の事だよ」とマリの質問に答える豪の頭を踏みつぶした。

「ああ！もうこの馬鹿犬！これ以上、何も言っな！」

未だに興奮が鳴りやまない上条を横に、ポチが毛を逆立てて唸り声を上げ始めた。

「何だ・・・どうした？」

豪はポチが威嚇する方向を見ると、そこには炎上した車。その車を取り囲んだカメレオンと戦う風の姿を目にした。

「妙だ・・・保住がいない」

豪は風の近くに保住がいない事が気になり、辺りを探していると、ガマガエルが息を切らせながらこっちに逃げているのが目に入った。

「貴様等！何をしている！ワシを守らんか！」

保住がこっちに気付き、ガニ股で歩み寄ってきていた。

「おい、ガマガエル・・・風はどうするつもりだ」

「フン、知るか・・・車もロクに運転できない、出来損ないがどうなるうと知った事ではないわ」

馴れ馴れしく近寄ってくる保住だが、豪は刀を抜き保住の喉元に突き付けた

「勘違いするなよ。俺は、お前に聞きたい事があるから助けるだけだ。死にたくなかったら、そのでかい口を閉じてろ」

豪は刀を保住から放すと、風の方へと向かい走りだし、上条は何か喋ろうとする保住に銃を突き付け「しゃべるな」と釘を刺した。

「どけるー！ー！！」

豪は叫びながら、カメレオンの群れに突進し、邪魔するカメレオンを次々と切り崩し、中心で戦う風と合流した。

「風さん！」

向かい合わせに立つ二人。

風は、豪に向かってナイフを投げ、豪はそれをしゃがんで避けると、そのナイフは豪に襲いかかるうとしていたカメレオンに刺さった。豪は風に向かって刀を振り下ろし、風が横に避けると、カメレオンが真つ二つに割れた。

互いに背中を合わせに立ち、飛び掛かってくるカメレオンを柔道技で倒すと風が止めを刺し、風がカメレオンの足にナイフを刺し、怯んだカメレオンの首を豪が刀で撥ねた。

最後の一体が倒れた時には、二人は息を乱し、死体の山の中心に立っていた。

「どうして・・・」

「風さんが言っただろ」

「何も言ってない」

「いや、言っただ・・・ガマガエルを守りたいと」

「それは、父が私を必要としているから」

「違う、そうじゃない。・・・ガマガエルは完全に風さんを見捨ててた。けど風さんは、そんなガマガエルを守るために、必死に戦っていた。そうだろ？」

「・・・」

「風さんは確かに、作られた人間かもしれない。・・・けど、風さんは人間だ。ただの女の子だよ」

豪の言葉に、風は思わず視線をそらし「ありがとう」と口籠りながら答えた。

大きな揺れが起きた事で、崩壊したホテルの瓦礫が完全に崩れ、そ

の瓦礫の一部が大きな音を立てながら吹き飛んだ。
不気味な分厚い雲を見上げ胸に刺さったナイフが印象的な化物が空
に向かって大きく吠えていた。

最強メンバー

由美 「ねえ、私ってそんなに捻くれてそう？」

上条 「えっ？何ですか？」

由美 「ええ、だってマリちゃんに変な事、吹き込んだと言ってたでしょ」

上条 「ああ、いや、あれは口から勝手に出ちゃって・・・」

由美 「勝手に出たって事はさ、だからさ・・・その」

上条 「いや、だから・・・その」

カリン 「まあまあ、お二方。落ち着いて・・・せつかく女性陣のみの会話なんだから」

上条 「でも、何話せばいいんですかね」

カリン 「んゝ・・・恋ばな・・・とか？」

上条 「ええ！こ、恋ばなですか！」

由美 「なによゝ、そんなに慌てて」

上条 「えっ、いや、慌ててなんか・・・いませんよ」

カリン 「ふふふふ、青春ねえゝ」

由美 「ねえゝ私もそんな時期があつたのよねゝ」

上条 「なっ、なんですかゝ！それじゃまるで、二人ともオバサンみたいな発言ですよ」

カリン 「あつ・・・今のは聞き捨てならないなゝ」

由美 「確かに、今のは酷いよねゝ」

上条 「いやゝこれは苛めですね」

カリン 「ええゝ全然違うわよ」

由美 「そうそう、苛めるんだつたらもつとえげつないよ」

カリン 「うんうん。もしかして上条ちゃん、苛めて欲しいの？」

上条 「へっ？」

由美 「なんだ、そうなら全然言つて良かったのに」

上条 「いやいやいやいや、全っ然イヤです！」

カリン「ああ、やっぱり苛められるなら豪君がいいのかな？」

由美「えっ・・・」

上条「いや、だから違います！そんなんじゃないんですってば！」

由美「ま、まあきつとそんなだと思っけどね」

カリン「ふふふ、面白いこの二人」

風「・・・」

カリン「ねえ、何かしゃべれば？」

風「・・・あの」

カリン「うん？」

風「話す内容がないです」

カリン「いや、その場合はダジャレにしなくちゃ」

風「ダジャレ？」

カリン「内容が？」

風「ない・・・よう？」

カリン「そうそれ！」

風「父が良く言ってる気がします」

カリン「ええ、あのガマガエル、ダジャレとか言っの？信じてない」

風「はい、カリンさんと同じです」

カリン「えっ・・・それじゃ私、おじさんみたいじゃない」

風「はい・・・」

カリン「ええ、ちょっとその場合は、否定するもんでしょ・・・」

マリ「カリンさんは、おじさん」

風「はい」

カリン「もう・・・いいです」

「・・・さてと、色々と聞かせて貰おうか？」

風を救い、保住の元に戻ってきた豪は刀を保住にチラつかせながら圧力のある言葉を発した。

保住は、イライラを抑えるために煙草を口に咥え、瓦礫の上にドンと構え座っていた。

「北の最悪・・・その時、お前は中央指揮官だったな」

「ああ、間違いない・・・だが、釈明するつもりはないぞ。最善の判断だった」

「どうか・・・全員が死亡した訳だしな」

「それで？・・・何が聞きたいんだ？」

「生存者は本当にゼロだったのか」

「ん？・・・ああ、間違いない」

「おい、冗談は無しでいこうや」

険しい顔で豪は刀を抜き、上条は撃鉄を引いた。

「おいおい、お前達は俺に何を求めている？・・・意味のわからない質問で殺されたら、たまったもんじゃなぞ」

「・・・ある男が、北の最悪の生存者だと言っていた」

豪の言葉に、保住の顔色が変わった。

「誰だ、そいつは？」

「名前はわからない。・・・ただ、俺ですら見上げる程の長身の男

だ」

「まさか・・・」

「・・・やっぱり、知っているのか？」

「いや、知らない」

明らかに嘘を付いている保住の態度に、豪は立ちあがり刀を振り下ろし、保住の頭の上で止めた。

「っ！・・・風！何をしている！何故止めない」

「殺意が感じられません」

「だとしても、止めないか！」

怒鳴り散らす保住に風は、ただ黙って成り行きを見守っていた。

「ポチ・・・マリを連れて少し離れてろ」

豪は刀を下ろし、ポチはマリの背中を鼻先で押すように豪達から離れて行った。

「生存者はいたんだな？・・・何を隠してる」

「違う！生存者は存在しない！」

「だったら、あの長身の男は一体何だ！・・・仁！」

豪の指示に上条は銃口を保住の頭に擦り付けた。

「止めるっ！・・・奴は生存者ではない！奴は・・・無人兵器だ」

「無人兵器？・・・中央政府の無人兵器の事か！」

保住は顔を真っ赤にし、喉を詰まらせながら口を開いた。

「そ、そうだ！・・・北の最悪で投入した兵器は無人ではなく、有人の兵器だ。原子力が爆発しても耐えられるフレームを装着させ、投入したのだ」

「何故、無人と嘘をついた」

「世界と並び立つためだ！無人兵器の優位性を世界に示す為に、必要な事だったんだ」

保住の言葉に、豪はある憶測を浮かび上がらせた。

「・・・原子力を爆発させたのは・・・お前だな？」

「・・・そうだ。この国の威厳を保つためだ」

「崩壊した中央の威厳を保つために・・・何人死んだと思っている

んだ」

「フン・・・何人死のうが知った事ではないわ」

保住の言葉に、風がナイフを抜き、構えた。

「風、何をしている」

「彼女から殺意が芽生えました」

風の言葉に保住は、上条の向ける銃口から離れようとするが「動くな」と上条が答えた。

「仁、落ち着け」

「無理・・・何なのこいつ」

「こいつは利己主義者だ。どうしようこいつの考えは変わらない」

「そ、その通りだ。利己主義者でなければ、この国の政治はやっていけない」

豪の言葉に便乗しようとするが、豪は保住の喉元に刀を突き立て、剣先で喉仏に触れた。

「黙れ、てめえの皺くちな喉に穴あけるぞ・・・まだ聞きたい事がある。ただそれだけだ」

保住はなるべく喉を動かさないようにして、口にたまった生唾を飲み込んだ。

「他に何かがあると言うのだ！・・・ワシは全て話したぞ！」

「腑に落ちないんだよ・・・お前の事だ。有人を無人と偽ってたんだ、それが漏れるような事はしないはずだ。なのに俺達は何故ばれた」

「・・・奴は・・・逃げたんだ。中央政府軍に所属していた奴は、軍部に背き現場から立ち去った。無論、搜索したが見つける事が出来なかった・・・一人がどんなに騒ごうが、圧力で抑える事は出来る。だから搜索を打ち切った」

保住の喉元からは血が垂れ始め、それに気付いた保住は何かの糸が切れたかのように、喋り始めた。

「奴は、狂ってるんだ！まるでゲーム感覚で人を殺し、自分の命すら簡単に放り投げるような危険な奴だった。あいつは特殊部隊の中

でも異様な存在でクレイジーモンキーと呼ばれていた」

「だったら、てめえは何だ。ただの牛ガエルだろうが」

「頼む、殺さないでくれ」

保住の命乞いに豪にも殺意が芽生えたのか、風がナイフを強く握り、豪に向かつて構えた。

緊張状態が続く中、ポチの鳴き声が豪達の耳に届いた。

「仁・・・見に行ってくれ」

上条は、銃を下ろしポチの鳴き声がする方へと向かって行つた。

「風さん、どうする？・・・こんな男のために、まだ忠を尽くすのか」

「はい・・・私の父ですから」

「風！何をしている。奴を殺せ！奴は一人だぞ」

「おい、牛ガエル。風さんが動くのと、お前の首が飛ぶの・・・どつちが早いと思つてゐる。頼むから黙つてろ。風の判断が鈍るぞ」

「豪！」

そう言つて上条が、豪達の所に急ぎやつてきた。

「・・・どうした？」

「こつちに来て・・・築地さんが倒れてる」

豪はその言葉に反応し、風から視線をズラさないようにしてゆっくりと後ろに下がり、刀を鞘に戻した。

風はナイフを下ろし、腰に戻した。

「ガマガエル・・・どうする。正直、風さん一人ではこれ以上、お前を守る事はできそうにないぞ。本意ではないが、俺達と一緒に行動するか？」

脂汗を垂らす保住は質問に答えられる状況ではなく、代わりに風が「はい」と答えた。

「仁、案内してくれ」

「フヌウウウウ・・・くそつたれめえ・・・」

仰向けに倒れている築地は、体中に痣を作り、悔しそうに薄暗い空を見上げていた。

「築地さん！大丈夫ですか？・・・一体、誰に」

急ぎ駆け寄ってきた豪に気付き、築地はシザーナイフを手に取り、立ちあがった。

「ちよつと、築地さん！」

「くそつたれがあ！」

ナイフを構え、豪に襲いかかろうとするが、足元がふらつき再び前のめりに倒れてしまった。

「無茶しないで下さい。傷がまだ治ってませんよ」

切り傷はすでに治り始めているが、打撲系の傷はまだ癒えきってはいなかった。

うつ伏せから、体を仰向けに変え築地は悔しそうに空に向かって吠えていると、後からやってきた保住が築地を見て、息をのんだ。

「・・・貴様は」

「ああ？・・・よう、指揮官。元気にしてたか・・・相変わらず横にぶくぶく太りやがって」

「・・・築地さん。知り合いですか？」

豪の言葉に保住が「何を言うか」と割って入ってきた。

「こいつがお前達に言ったんだろが、奴がクレイジーモンキーだ」
「クツフツフ・・・懐かしい呼び名だ」

二人のやり取りに、豪と上条は首をかしげた。

「おい、ガマガエル・・・やはり、嘘をついていたのか！」

「何を言うか！お前達は、この男から全てを聞いたのだろうが！」
「違う！・・・築地さんじゃない！」

声を張り上げる二人に水を差したのは築地だった。

「おう、うるせえぞ。傷に響く・・・それとな、豪。奴は現場を知らない。何が起きていたのかも何も知らないんだ」

「何だと？クレイジーモンキー・・・ワシが何を知らないと言うん

だ！」

「クツフツフツフ……哀れな奴だ。自分の記憶だけが全てだ
と思っっている」

治り始めた体を無理に起こしながら築地は笑い、保住は煮え切らな
い顔を浮かべていた。

「築地さん……北の最悪では一体何があつたのですか？」

「さあ？知らないね……。ただこれだけは言える。後^{のち}に、この街も
生存者はゼロだと、語り継がれる」

築地は気味の悪い言葉を言い残し、この場を去ろうとし始める。

「築地さん、どこに行くつもりですか」

「調子が狂った。今度会ったら、次こそお前を殺す」

「いやいやいやいや、だから意味がわからないですって」

立ち去ろうとする築地だが、ポチの唸り声に気付き、辺りを見渡し、
ニタリと笑みをこぼした。

「クツフツフツフ……。どうやらその前に一悶着、ありそうな
気配だな」

築地の言葉通り、周りにはこれまで見た事のない数のカメレオンと
ケルベロスが豪達を囲んでいた。

「これは……。一体、こいつらに知性でも生まれたと言つのか？」

刀を構えながら豪はそう呟くが「残念ながら違いまゝ」と言いな
がら、寿がカメレオン達の合間を縫い豪達に合流してきた。

「はあい、元気にしてた？二丁拳銃の彼女だけじゃ、援護は物足り
ないんじゃないの？」

「違うというのはどういう事ですか？」

豪の問いかけに、寿は頭を掻きながら答えた。

「おそらく、白服の誰かよ……。本来、白服は共生者は狙わな
いんだけど、この中に共生者じゃない人間が混ざっているからね……。
あいつ等を操って殺そうとしているのよ」

「つまり、あのガマガエルとマリの事です」

「あら。マリちゃんは立派な共生者よ。その犬と一緒にいたおかげ

でね」

武器を手にして共生者となった豪や上条と同様、ポチの背中にしがみ付いていたマリも知らぬ間に共生者となっていた。

「まっ、自覚はしていないみたいだけど」

「つまり、ガマガエル一人のせいって事ですか・・・」

二人の会話を聞き「つまり、こいつを殺せば、襲われないって事ですよね」と上条が保住に銃口を向けるが、寿はわからんと肩を竦ませた。

「・・・くだらん、要するにこいつ等を全滅させれば良いって事だろうよ」

築地はシザーナイフを両手に構え、周りを囲む化物共に興奮していた。

「まあ、正直、このメンバーだったら、足手まといが一人居ようが、問題ないと思うけどね」

同じく豪も刀を手にとって肩を振り回していた。

「私の後ろに」

風が保住にそう促すが、保住は風が指示する前に後ろに隠れていた。

「ハア・・・なんでこんなガマガエルを助けなくちゃいけないのよ・・・」

「まあいいじゃないの。このメンバーはきつと面白いわよ」

愚痴をこぼしながら嫌々銃を構える上条を寿は宥め「ポチ」頑張ろうね」とポチの背中にしがみつくマリはポチに話しかけ「ワン」と答えていた。

ガマガエルを囲むように豪達が立ち「最強メンバーだ」と豪が呟くと同時にケルベロスが走り出し、豪と築地が切り込み隊長として走り出した。

その頃、正也達も数体のカメレオンと対峙し、残り少ない弾を慎重に使っていた。

「小谷野！ライフルの弾は無いのか？」

「そっちこそ、マシンガンの弾を持つてる・・・訳ないか」

「くそっ・・・一発で仕留めなけりゃ、マジで死ぬぞ」

正也は手の中にある弾の数とカメレオンの数が同じである事に気が付き、悔しそくに呟いていた。

「頼むぜ、当たってくれよ・・・」

正也は手に握った弾に念を込め、ライフルに装填し対峙するカメレオンの頭に狙いを定め、引き金を引いた。

一体目は見事に命中し、膝から崩れ落ちた。

「よくやった。正也、援護するから落ち着いていけ」

小谷野はカメレオン達に弾幕を張り、その間、正也は集中し順調に近づいてくるカメレオン達を一体ずつ倒して行った。

「神様、いるのならマジで頼むぜ・・・」

だが、神は存在しなかった。銃口から飛び出した弾丸はカメレオンの手によって止められてしまった。

「小谷野！後退だ！」

「冗談だろ。あと二体だぞ！」

「弾があと一発しかない。どうやって倒せって言っただよ！」

「その一発を使い切れ！後の事は考えるな！」

「・・・くそつ、南無三！」

正也の放った最後の弾丸は、見事に命中し残りは一体となった。

「小谷野！どうするつもりだ！」

小谷野は肩にかけていたマシンガンを正也に手渡してきた。

「鷲田の娘連れて逃げる！後は俺がやる」

腰からナイフを抜き取り、小谷野は勇敢にも瓦礫の陰から飛び出しカメレオンに走って行った。

だが、ナイフはカメレオンに刺さる事はなく、小谷野はカメレオンに掴まってしまった。

大きく口を開くカメレオンに小谷野は死を覚悟し目を閉じた。

「グギヤ・・・」

カメレオンの口は、小谷野の頭を飲み込もうとするが、その前に大きな鉄の手によって閉ざされていた。

小谷野は、横に立つ鉄の塊に思わず息をのんだ。

「すまない、出勤するのが遅くなったな」

鉄の塊は小谷野にそう言い、カメレオンの顔を掴んでいた手をさらに強く握りしめた。

カメレオンの顎が砕ける音が鳴り、自らの顔を抑えようとカメレオンは小谷野から手を放した。

だが、鉄の塊はそんなカメレオンに強烈な拳をお見舞いし、頭の潰れたカメレオンは仰け反るように宙を待った。

小谷野は、正也達の方へ目をやると正也達の周りにも鉄の塊が何体も立っていた。

「あんた等、一体・・・」

「俺達は北海道防衛軍所属、特殊部隊の花形隊だ・・・ちなみに俺は花形悠介だ」

鉄の塊達は正也達に弾丸を手渡し、正直、どれが花形なのかすらわからなかった。

「さあ、移動しようか」

花形が口を開くが、どこに向かうのすら正也達にはわからなかった。

「待てよ、どこに向かうんだ」

「なんだ。鷺田由美から聞かなかったのか？・・・テーマパークだ」
花形の言葉に正也は首を横に振った。

「駄目だ。あそこには白い服を着た奴がいる」

「何・・・そうか白服の奴が・・・」

白服と言う単語を花形が言くと、それ以外の隊員達もザワザワとざわつき出した。

「でも、そこにしか脱出ルートは存在しないんだろ？」

「虎穴に入らずんばなんとやら・・・」

そう言いながら新たな登場人物に鉄の塊達は戦闘態勢に入るが、新たにやってきた鯉沼と秋葉に構えを解いた。

「貴様等・・・黒服か」

「ああ、しかも俺達はお前達に雇われてる。ここで戦っても何の意味もないだろ」

鯉沼の言葉に「その通りだ」と花形もようやく構えを解いた。

「さてと・・・パワードスーツが登場したと言う事は、この街もかなりヤバイと言う事だな・・・化物の数が多い事に何か関係はあるのか？」

「観光シーズンと重なったんだ。自衛軍は今、ウイルスが広がらないように町全体をバリケードで封鎖している」

「つまり、陸路は無理か・・・テーマパークに何がある」

「脱出方法は二つだ。極秘裏に作られた地下トンネルを抜けるか、ヘリだ」

表情の全く読み取れない花形はここで話していても仕方がないと、足を動かし始め正也達も後を追いつき始めた。

大量に囲まれていた豪達だが、そんな化物達も数が減り最後の一体を築地が化物染みた叫び声と共に切り裂き、ひと段落ついていた。

「ようやく、終わったあゝ・・・」

上条は両手に持った銃を下ろし、その場に腰を下ろした。

「ああゝもう制服がボロボロ・・・」

制服の可愛い学校を選び、念願になって着た制服も幾戦の戦いで白いはずも制服もどす黒い色に変わり、短パンを履いていて良かったと心から思えるほど、スカートは破れていた。

「ああゝなまら疲れたああ！」

豪は叫びながら仰向けに倒れ、ポケットの中に入れていた仁志の携帯パソコンが動き始めた事に気付き、パソコンを取り出した。

全てのシステムが治った訳でもないらしく、唯一使えるのはラジオだけだった。

パソコンに備え付けられたイヤホンを引っ張りだし、気分転換に何か音楽でもと思ったのだが、イヤホンからは信じられない声が聞こえてきた。

「豪兄ちゃん、どうかしたの？」

ポチが豪の反応に気付き、マリが尋ねてくるが「ちよつと待ってる」と耳に付けたイヤホンの音に集中した。

「どうなってるんだ・・・」

豪は、遠くに座る保住を見ながら呟き、そんな豪の態度を見て築地

がゆつくりと近づいてきた。

「クツフツフツフ・・・だから、言っただろ。哀れな奴だと。自分が何者なのかも、どれが本当の記憶なのかもわかっていない」
豪の聞くラジオでは、この街がテロにより、完全に陥落した事を告げる保住の声が聞こえていた。

『我々はテロには決してくじけない。断固として戦い続ける事をここに宣言する！私にどれだけの泥が被ろうと構わん。だが、後^{のち}にわかる事だろう・・・これが最善の選択だった事を！』

「つまり・・・あの保住は偽物？」

「偽物かどうかなんて、そんな事はどうでもいい。生き残っていて、国民の前に立っている方が本物なのさ」

ラジオでは保住が中央政府と連立を組み、二日後に特殊なクラスター爆弾を投下する事を宣言していた。

「・・・なるほど、生存者ゼロか」

イヤホンをつけたまま、豪は起き上り寿に近づいて行った。

「なあ黒服はあと二日でどうやって逃げるんだ？」

「ん・・・クライアントが脱出方法をちゃんと準備してくれてるから問題はないわよ」

「なら、そこに向かおう。秋葉達もそこに向かっているんだろ・・・どこにあるんだ」

寿は豪の提案に少々迷いながら「まあいつか」と軽く承諾した。

「で？どこにあるんだ？」

「テーマパークよ」

テーマパーク再び

豪 「おい、やばいぞ」

正也 「ん？何がさ」

豪 「話すネタが無いんだよ。何を話せばいいと思う？」

淳 「話すネタって言っても、これまでだって、このスペースはいつも適当だろうが」

豪 「まあそれもそうなんだけどさ・・・」

上条 「たまには、ストーリーにそってみたら？」

豪 「いやいや、俺と淳が会ってる時点でストーリーとか駄目だろ」

淳 「わかった。だったら、俺等、帰るわ」（ログアウト）

豪 「えっ、ちよっと」

正也 「上条！頑張れよ、俺はお前と豪ルートを応援する、数少ない人間の一人だからな！」（ログアウト）

上条 「ちよっと！数少ないってどういう事よ！」

豪 「どうするんだよ。マジでいなくなったぞ・・・」

上条 「本当にどうしよう・・・」

風 「あの・・・豪・・・さん」

豪 「はい、何すか？」

風 「いえ・・・その・・・この後、ご予約が無いのであれば・・・あの・・・一緒に御食事にでも・・・」

豪 「ご飯って言っても・・・この瓦礫の中で営業してると思えないんですけど・・・」

風 「その・・・まずは食事からだと・・・本に書いてありました」

豪 「はい？」

マリ 「豪兄ちゃん、暇なら遊ぼう」

上条 「あっ、二人とも！何やってんのよ！」

ポチ 「ワン！」

上条 「ゲツ・・・出たな馬鹿犬。邪魔立てする気か！」

ポチ 「グルルルル・・・ワン！ワン！」

上条 「なっ・・・なんでそんな言葉知ってるのよ！犬のくせに！」

ポチ 「ワン、ワンワン！」

上条 「ヒイイイ、止める、馬鹿犬！これ以上言つな！何も言つな！」

豪 「仁の奴・・・犬の言葉理解してるってどういう事だよ・・・」

カリン 「まあ、犬並つて事じゃないの？・・・ちなみに豪。案外、私ルートつてのもありだと思っただけど？」

豪 「なんですか？ルートつて」

由美 「いやいや、私は断然、豪と淳。もしくは豪、築地でもモウマントイです！」

ポチ 「ワン！」

由美 「『黙れやおい』つてどういう事よ！雑種！」

豪 「おお・・・由美の奴も犬の言葉理解してるぞ・・・つて言うか雑種つて」

ポチ 「ワンワン！」

由美 「ええゝ私、別にそんな事言われても、動じないしゝ」

ポチ 「グルルルル・・・」

由美 「なあにゝ？負け惜しみにしか聞こえないんですけどゝ」

上条 「・・・凄い、あの馬鹿犬に勝ってる」

小谷野 「いや、その前に犬が喋ってる事に突っ込めよ・・・」

特殊なパワードスーツを着た花形隊は、かなりの戦力でカメレオンに対し、鍛え抜かれたチームワークで確実に頭を握りつぶしていた。

「当たり前だ。俺達は人類を守るため作られた化け物退治専門の部隊だ」

「まっ知力の低いこいつらなら、楽勝なんだけどな」

花形の言葉を切り捨てるように鯉沼が面白おかしく言い。花形は侮辱されたと言うのに反論する事が出来なかった。

「だから、黒服を雇った。そうだろう？」

「・・・その通りだ。だから、共生者が出た場合はそちらで対処してもらう」

「はいはい、噂をしてればなんとやらだ・・・離れてな」

鯉沼と秋葉が花形隊を押し分け、前に立ちはだかると同時に一発の銃声が鳴り響き、大量の散弾が花形隊の一人に当たり、その場に倒れた。

「強敵登場」

「馬鹿。確かに、お前にとっちゃ強敵かもしれないが、俺にとっちゃ白服メンバーの奴と大差ないね」

「総員、防御態勢！」

花形の指示で花形隊は正也達を囲むような隊形を取り、腕に付けた縦を弾が飛んできた方向に構えた。

「あれ？秋葉に鯉沼じゃん・・・なんか久しく会ってない気がする

な」

ショットガンを構えた香田が鯉沼達の前に現れた。

「元気にしてたか？香田」

「まあね。・・・それより秋葉。お前、あいつに会ったんだろ？どこにいるか知らないか？」

「消息不明」

「そっか・・・全然、会わないな・・・」

「なあ香田？・・・お前、仕事の内容覚えてんのか？・・・お前は白服に雇われてんだぞ」

「いやいや、白服の考えに賛同しなさそうな奴だったら、別にいいだろ」

「それに、俺達にはもう一つ、仕事があるだろ？」

「ああ、それもそうだな・・・まあじゃあ見極め程度でいいかな？」

「まあ、殺さなきゃいいけど、殺したら秋葉が怒るぜきつと、久しぶりの同類なんだから」

鯉沼の言葉に横で秋葉が何度も頷いていた。

「殺さないように気を付けるよ・・・ところで。お前等も今は仕事中か？」

「後ろを見たらわかるだろ。仕事中だよ」

「その割には、俺さっき一人殺しちゃったぜ？」

「馬鹿。自衛軍を助ける必要がどこにある」

「じゃあ、その自衛軍の後ろにいる奴等を殺そうとしたら、お前達は止めるのか？」

「実行してみろよ。答えがわかるぜ」

「・・・いや、止めとこう。お前等二人を相手にするのはマジで勘弁だ」

香田は残念そうに、ため息をつき、鯉沼達を横切って行こうとしていた。

そんな中、正也は香田の後ろに淳がいる事に気がついた。

「淳！・・・お前、なんでそんな所に」

「よお、正也。たしか、豪に会ったって言ってたよな？」

「・・・ああ、それがどうかしたか？」

「あいつは何か武器を持っていたか？」

「聞いてどうする」

「いいから、答えろよ。言っておくけど、今の俺はそこにいる鉄の塊なんか一瞬で倒せるぜ」

「・・・試してみるか？」

花形が淳に挑発し、花形隊は淳に対し攻撃態勢をとった。

その挑発に乗ろうとする淳だが、香田が淳の肩を掴み止めた。

「よせ、そいつ等を倒せても、後ろには黒服のナンバーを持った奴等が控えてるんだぞ」

香田の言葉に淳は軽く舌打ちし、香田の手を振り払った。

「・・・正也、答えろよ。豪は何を持っている」

「日本刀だよ・・・なんか問題でもあるのか・・・」

「いや・・・別に」

正也の答えに淳は思わず笑みを溢し、淳の横に立つ香田も淳に負けないくらいの笑みを溢しながら、去って行った。

「さてと、テーマパークに向かうか・・・」

香田と淳が去った後もしばらく銃を構えていた鯉沼がようやく、銃を下ろし花形にそう言った。

「共生者の考えはよく理解できんな」

花形はそう言いながら、テーマパークへと歩き出した。

「クツフツフツフ・・・あの日にそっくりだ」

「あの日?・・・北の最悪の事ですか?」

「この空の色、崩壊した建物、唯一違うのは、変色した化物の数ぐらいだ」

光り輝くテーマパークを前にして、築地と豪の会話を聞いていた保住が「そんな事はありません」と築地の言葉を否定した。

「貴様等に命令したのは、街に住む住民の排除と破壊工作のみだ。」

こんな化け物がいるとは聞いていないぞ」

「おうよ、いかにも・・・化物と化した人間を殺してたはずだ」

「おい、待てよガマガエル。この薄気味悪い雲の色は否定しないのか」

「フン、これだから何も知らない奴は嫌いだ。・・・あれは外部との通信を立つために電子妨害の粉末を中央の奴等が上空にまき散らしたんだろうよ。外部と連絡を取る事が出来るのは、有線の電話か旧式のラジオぐらいだろうよ」

保住の言葉に親から連絡が無いのはそれが理由かと納得する上条。

「そういえば、仁。お前の両親は大丈夫なのか?」

「えっ?全然、大丈夫。北の最悪のお陰で、周囲の土地が一気に安くなったでしょ。それで、夢の一軒家を建てて向こうに住んでるから」

「そっか、なら安心だな」

「豪の両親は?」

「んっ・・・多分、大丈夫だろ」

「なにそれ」

「最近会ってないからな・・・老衰してるかもな。まあ気にすんな、そんな感じの家庭だから」

そんな中、ポチが低い声で唸りだし、豪達はこちらに近づいてくる何かの気配を感じ取っていた。

「ありや・・・香田がこっちに來てるな」

寿が面倒そうに頭を掻きながら言った。

「それって黒服の最後のメンバーの奴か？」

「ん？まあ番号を持ってるメンバーなら最後だね。秋葉から聞いてる？」

「うん、色々と・・・面倒事は勘弁だ。さっさと中に入ろう」

「・・・クズが、入ろうにもどこから入ると言うのだ」

テーマパークの出入り口は、明らかに人為的な瓦礫で埋め尽くされていて、コンクリートの壁で覆われたテーマパークの周りを先ほどから豪達は歩いていて。

「そうなんだよな・・・どおしよ」

よじ登ろうにも見上げる程の高さで、保住やポチには絶対に無理だろう。

「ブルアアアア！！」

ニタニタしながら壁に近づいて行った築地は、豪快な掛け声と共に大きな拳を振り上げ、目の前の壁に振り下ろした。

「クッフッフッフ・・・開いたぞ」

土ぼこりが収まるとそこには何メートルもある厚さのコンクリートにぽっかりと穴が一つ開いていた。

「凄いや、重火器要らずね」

グレネードランチャーを持つ寿はそう言いながら開いた穴へ入って行き、その後に豪達も付いて行った。

開いた穴を抜けるとそこには、いくつもの店が建物内に連なり、壊れた音楽が鳴り響いていた。

そして、地面には死体がいくつも転がっていた。

豪達は穴を抜けると、どうやらそこは洋服店のようで、色々な服が並べられていた。

「ここでも、あの化物がいたのね・・・」

そんな上条の言葉に豪は「そうかな」と否定した。

「ここにいる死体は喰われていない」

倒れている死体は全て斬られたような跡があり、齒型は一切付いていなかった。

「おそらく、この地下トンネルから白服達は侵入してきたのね・・・」

「なあ、聞きたかったんだけど白服って一体なんだ？」

「自分達を新人類だと気取る奴らよ」

「新人類？」

「そつ、古い人間を殺して新たな世界を作るとか大それたこと言ってたわね」

「馬鹿な・・・元は人間だろ」

「だとしても、古い人間は極限状態になると、そこにいるガマガエルみたいな奴等ばかりよ。嫌気がさすわ」

保住は自分の事をガマガエルと呼ぶ事が定着してしまった事を怒鳴り散らす気力もなく、大きな口を開いて荒く呼吸することしか出来なかった。

「そもそも、このウイルスは一体何なんだ」

豪の質問に寿は「知らない」と肩を竦ませた。

「ただ一つ言えるのは、このウイルスは地球上のどこにでも存在する・・・白服も私達も、この現象の事を『第二生命の爆発』と呼んでるわ」

「生命の爆発か・・・」

なるほどねと納得する豪だが「生命の爆発って何？」と上条は首をかしげた。

「俺達、人間や犬、魚なんかも元を辿れば一つの微生物から進化して現在に至るって言われてるんだ。まあどっかの宗教では、禁断の果実がどうか言っている所もあるけど・・・地球上に生命が誕生した事を『生命の爆発』って呼んでるんだ」

「そんで、北の最悪や私が共生者になった時、そして今回もそうなんだけど、共通する物があるの。大地震よ。おそらく、このウイルスは地下からやってきた」

「だけど、このウイルスは三日で死滅するんだろ？」

「私達、共生者を除いてはね・・・私達、共生者は思考がある程度、制限されるのよ・・・マリちゃんがいい例よ」

犬の上にしがみ付くマリは下に転がる死体を見ても全く動揺せず、ポチのハゲ散らかった残り少ない毛を^{むし}毛づいていた。

「それが人間にとっては気に食わないんでしょうね。まあそれは白服も同様だけど・・・お互いに殺し合ってる。縄張り争いのようにね」

「なるほど・・・あの親父が白服の考えに俺と仁が賛同できないなんて言ってたけど、まさにその通りだ。・・・理解できん！」

豪は刀を抜き取り、服が並べられた棚を切り崩した。

そして、棚の向こうで身を潜めていた白服の一人が、胸から血を流しながら倒れた。

「クツフツフツフ・・・なんだ。ようやく、動いていいのか、待ちくたびれたぜ」

洋服店の物陰から、白い服をきた共生者達がぞろぞろと現れ出し、気付いていなかった保住は慌てて穴の中に自分の身を潜めた。

「なあカリンさん。聞きたいんだけど、テーマパークには自衛軍がいる筈じゃなかったの？」

「いるわよ・・・多分、最上階ね。下は地下からやってきた白服に占領されたって感じがしら？」

「つまり、白服を倒しながら上を目指してことか・・・」

豪の言葉に上条は拳をぶつけ合い「上等じゃない！」と意気込んでいた。

「ホテルでも化物相手に上を目指してたんだから、その化物が共生者になっただけでしょ。やってやろうじゃないの！」

「クツフツフツフ・・・いいねえ、嬢ちゃん。いい感じだ」

にらみ合いが続く中、上条の銃声を合図に豪達は白服に向かって突進していった。

ようやくテーマパークに到着した正也達は、崩れた入口を目にして唖然としていた。

「どうすんだよ・・・これ・・・」

正也の呟きに花形は「気にするな」と言い、壁に向けてロープを飛ばした。

勢いよく飛んで行ったロープの端は、見事に壁の頂上にくっ付き「登るぞ」と花形は言ってきた。

「おいおい、待てよ。登ってる最中に化物に出くわしたら、どうするつもりだ」

小谷野の問いかけに花形は合掌してこう言ってきた。

「祈れ」

信じられねえ……

「あれ？いないな……気配は感じたんだけど」

香田は豪達の気配を頼りにテーマパークにやってきたが、そこには誰もいなかった。

「おい、どうすんだよ……この壁、登るのか？」

淳の言葉に香田は悩んでいると後ろから大きな足音が聞こえてきた。振り返るとそこには5メートル以上はあるうかと言う、大きな化物がこつちに近づいてきていた。

「なんだ……あれ？」

胸には小さなナイフが突き刺さり、顔の筋肉は死んでいるらしく顎が垂れ下がり、開いた口からは気味の悪いよだれをダラダラと垂らしていた。

「よお、香田！いいだろ、これ！……ホテルの近くで拾ったんだ」
化物の肩に乗る男は、香田に気付き話しかけてきた。

白い服を着こなし、真っ白な髪を靡かせた男を香田は「坂野」と呼んだ。

口からは酷い悪臭を漂わせる化物に淳は顔をしかめた。

「坂野、相変わらず悪趣味してんな」

「まあ、いいじゃねえか。扉開いてねえだろ？……こいつで壁をぶっ壊してやるよ」

すると坂野は化物に指示を出し、化物は壁に近づいてき、巨大な拳で目の前の壁を突き破った。

大きな壁は、音を立てながら崩壊し、化物に乗った坂野はそのままテemapークの中へと入って行き、後を追って香田と淳も中に入って行った。

「うわっ！……築地さん！カリンさん！」

白服との混戦中、大きな地鳴りと壁が崩れ出し、固まって進んでいた豪達を別々に分けてしまった。

「こっちは大丈夫よ、そっちはどお？」

寿の声に豪は辺りを確認するが、風と保住の姿がどこにもなかった。

「ガマガエルなら、最初の時に姿を消したってさ」

ポチの言葉を翻訳し、マリが豪に伝えてきて、上条が怒った。

「ああ！もう！ガマガエルの野郎！・・・やっぱり殺しておくべきだった」

「こつちも怪我人はいません・・・なんだ・・・あれ」

瓦礫を挟んで寿にそんな報告をしていると壁が崩れ、大きな穴が開いた所から巨大な化物が大きな声を響かせながらやってくるのが豪の眼に入った。

「なんなの！あの巨大な化物は・・・」

「あちゃ・・・やっぱり、一体は出てくるのよね」

上条の声に寿も巨大な化物に気付いたらしく、面倒そうに呟いていた。

「カリンさん、あの化物の事知ってるんですか？」

「豪、よく聞きなさい。あの化物には私や上条ちゃんの武器じゃ、歯が立たないわ。当然、私の横で闘争心メラメラの巨人君にも無理」

「・・・つまり、俺しかないって事ですか」

「それも正直わからない。私の時は、秋葉と他に二人、日本刀を持った共生者がいたけど、二人ともあれにやられたわ」

「・・・でも、勝つ見込みはあるって事だ！」

気合を入れ直す豪だが、そんな豪の姿を見つけ、ある男が「豪」と叫びながら近寄り、反応の遅れた豪の顔を捕え、蹴り飛ばした。

瓦礫の山に吹き飛ばされた豪は、顔を持ち上げると、そこには殺気だった淳の姿があった。

「よお、豪！」

「・・・お前、・・・淳か！」

今日の敵は明日の・・・

「久しぶりだな、豪」

「いや、いつもの適当スペースは今回、無しなのか？」

「うるせえ！そんなスペースもともと存在しねえ」

「大体、なんだその格好は！頭に剃り込みなんか入れやがって！力ツコ悪いし、俺はお前の親になんて報告すればいいんだ！」

「だああああ！もう、相変わらず、その能天気振りは変わらねえみたいだな！マジで腹立つ！」

豪は怒り狂う淳を放置して瓦礫から立ちあがり、大きな化物に目をやっていた。

「おい、淳。そんな事よりも、あの化物をどうにかして、倒さねえと」

「ああ？あのビックフットは白服の坂野って奴の飼い犬だよ」

「白服の・・・だったら、なおさらだ！」

「させるかよっ！」

刀を抜き、ビックフットに向けて走り出そうとする豪に淳は再び攻撃を仕掛けてきた。

豪は思わず淳の攻撃を受け止め、瓦礫に向かって淳を放り投げた。

淳は体を捻り、着地を決めると豪に勝ち誇ったかのように笑いかけてきた。

「淳！さっきから何しやがる！」

「あのビックフットはこれから自衛軍のヘリポートを崩しに行くんだ。邪魔はさせねえよ」

「何考えてやがる！正也と由美がいるかもしれないんだぞ！」

「ハッ、俺を殺そうとした奴だ。知った事か！・・・どうせお人よしのお前の事だ。白服の考えに賛同しないからこんな事になったらろ」

「お前は賛成だと言っのか！」

「当り前だ！だから、てめえを殺す！」

豪に向かつて勢いよく飛び出してきた淳の腹に豪は「ふざけてんじやねえぞ！」と叫びながら見事な蹴りを入れた。

鳩尾に見事に入った淳は腹を抱え、その場に倒れた。

「がつ・・・豪、てめえ・・・」

「お前の相手をしてる暇はない」

豪は倒れる淳にそう言い放ち、ビックフットに向かつて走り出した。

「仁、マリとポチを連れて、先に上に行つてろ！」

上条は立ち去る豪に向かつて「わかった」と言い、倒れる淳に全く見向きもせず立ち去り、豪に全く相手にされなかった淳は「ちきしょおおお！」と叫び声をあげていた。

〈数分前〉

大きな音と共に正也達が登っていた壁が大きく揺れ、思わず由美がロープから手を滑らしてしまった。

花形隊の一人が落ちてくる由美の腕を掴み、由美とその花形隊の一人は宙刷り状態になった。

「由美！」

「大丈夫だ。そのぐらい、俺たちならすぐに体制を整えられる」

下で由美が宙づりになったのを目にし、正也が叫ぶが花形がそんな正也をなだめた。

「大丈夫ですか、とりあえず落ち着いてください」

宙づりになった隊員は由美を落ち着かせようと声を掛け、由美も「はい」と返事をした。

袖がめくれ、掴んでいた由美の腕に緑の発疹がある事に隊員は気がついた。

二人の間でしばらくの静寂が続いた。

隊員は腰から銃を抜き取り、由美に向けようとするが、その前に由美が動いた。

掴まれていた腕を使い、足を振り上げて隊員の頭を蹴り飛ばした。

隊員の頭は剃り立った壁に何度もぶつかりながら下に落ち、上から飛んでくる隊員の弾丸を避け、壁の一部を壊すと由美はそのまま姿を消した。

由美の名前を叫び続ける正也を花形は捕まえ、急ぎ上に登り、鯉沼と秋葉は顔を見合わせ、秋葉がロープ伝いに下に降り、由美が開けた穴から由美を追って入って行った。

（現在）

由美の後を追って走っていた秋葉は、吹き抜けのロビーで「ふざけてんじゃねえぞ！」という豪の声を聞き、下を見下ろすとそこにはビックフットの姿と、そのビックフットに向かって単身で突っ込んでいく豪の姿を見つけた。

「至難・・・确实」

秋葉は由美を後回しにし、下に飛び降りて豪の前に躍り出た。

「秋葉・・・」

「アホかお前は無知にも程があるぞ」

「でも！」

「奴の肩の上を見る」

秋葉の言葉に豪はビックフットに目をやるとそこには、シヨットガンを持った男と白髪の男がいた。

「香田と坂野だ・・・あいつ等は同じ町出身でな・・・化物とシヨットガンは無理がありすぎる」

「クツフツフツフ・・・ならば俺にあの巨人は任せて貰おうか」

「あれ・・・築地さん。あの瓦礫は」

「私が吹き飛ばしました・・・まったく、なんなのこの狂った巨人君は？保護する立場の事も考えてよね」

寿はため息交じりに呟いた。

「私と巨人君で、時間稼ぎしてあげる。だから、香田を倒しなさい」

「いや、普通逆じゃないですか？」

「文句なら巨人君に言いなさい」

「豪・・・邪魔するなら貴様も殺すぞ」

築地の言葉に豪もため息を漏らし「わかりました」と答えた。

「じゃ、行ってくる」

ビックフットの肩に乗っていた香田は坂野に言い、豪と秋葉の前に降り立った。

「さてと、親父の腕を切り落とした実力、見せてくれよ」

「そっちこそ、死んでから後悔するなよ」

シヨットガンを構える香田は、目の前で刀を抜く二人に話しかけ、豪もそれに応えた。

ショットガンの弾が何度も地面を削り、豪と秋葉はそれを何度も回避しながら、香田に近づき刀を構えるが、香田は刀を振り下ろされる前に、体を密着させ、打撃を加えてきた。

「秋葉、両翼に展開する！」

肘鉄を食らった豪は腹を摩りながら、秋葉に言い、秋葉はそれに応え、豪と秋葉は香田の左右に展開した。

秋葉が振り下ろした刀をショットガンで受け止め、後ろから襲いかかってきた豪に足を入れた。

だが、豪はモロに食らっておきながら、力任せに刀を横に振り、香田はそれを避けた。

「ハハッ、やつぱつえーな！でも、まだそんなんじゃ駄目だね」

香田は秋葉の刀を横に流し、豪に銃口を向け引き金を引いた。

弾丸が豪の顔の横をかすめ、そんな豪の後ろからはビクフットが踏みつぶそうと豪に襲いかかってきた。

豪は横に転がり、ミンチにされるのを回避した。

「くそ！築地さんの奴・・・時間稼ぎすらしてないじゃないですか・・・」

威勢よく飛び出した築地は、見事にビクフットのパンチを食らいまるで、アニメのようにテーマパークの外に吹き飛ばされ「ハーハハハハ」と笑いながら星空に消えて行った。

「面白い奴もいたもんだ。あのくらいじゃ死なないと思うがな」

「そりゃあんたもだろ」

肩に乗っていた坂野は吹き飛んで行った築地を思い合掌していると後ろから寿が銃の引き金を引き、炎に包まれた坂野はビクフットの肩から落ちて行った。

「でも、その怪我じゃしばらく動けないでしょ・・・しばらくの間、そこであんたのペットが切り刻まれていくのを見てなさい」

体を包んでいた炎は次第に収まり、皮膚が黒ずんだ坂野は、仰向けにビクフットの肩に乗る寿を睨みつけながら、咳をもらすと黒い煙が坂野の口から出てきた。

操り糸の切れたビクフットは、突然大声を出し、辺り構わず壊し始め、吹き抜けの階にいた白服にも被害が出ていた。

暴れ出したビクフットの肩から寿は飛び降り「後はよろしく」と上条達の気配を追い、姿を消した。

「あちゃー、遂に本性出ちまったか・・・おい、一旦、勝負はお預けだ」

香田は、未だに武器を構える二人に言い、豪と秋葉は武器を下ろした。

「ギャオオオオオ・・・」

ビクフットは、同じ視線の高さにいる白服達を大きな腕で振り払い、思わず白服達はその場から飛び降り、豪達に合流してきた。

「おい、お前等。今は仕事の事は忘れろ！まずはこのデカ物を喰い散らかすぞ！」

香田の指示で白服達は「おう」と声を出し、それぞれの武器を構えた。

「弓矢隊、奴の目を狙え・・・銃を持つてる奴！奴の手足の指を狙え！奴の指を引き千切るぞ！・・・刃物を持つてる奴！あいつのぶつといアキレス腱をぶった切れ！中でも日本刀を持っている奴は、黒服ナンバー？の所に行け！」

香田は、白服に的確な指示を出し、自分もビクフットの手の指を狙い、引き金を引いていた。

秋葉の所にやってきた白服はたったの二人だった。

「おそらく、アキレス腱を斬る事は無理だ。残念な事に、あいつは俺達と同様、いや、それ以上の超即再生を持っている」

香田が素早い動きで、ビクフットの体を登り、顔に到達して大きな目ん玉に目がけて引き金を引いた。

ビクフットは潰れた目を抑えながら、悶え苦しむがしばらくすると潰れたはずの目は元通りになり、抑えていた手も放し、下で構えていた白服達を捕まえ握りつぶしていた。

「だが、首と胴体を切り離せば、俺達と同じで奴も死ぬ」

「・・・つまり、あの太い首を切り落とさせて言うのか？」

「そうだ」

「秋葉、さすがにそれは無理だつて。あの太さの首を一太刀で斬れる訳がない」

「だが、やらなきゃならない。・・・まず、俺を先頭に奴に近づくと、そして、俺が奴の首を斬ったら、再生される前に次にお前が飛び出せ」

そう言つて秋葉は白服の奴等に指示を出し「最後は豪、お前だ」と付けくわえた。

「チャンスは一度きりだ。そして、誰も失敗は許されないからな」秋葉は全員にそう言つと「逝くぞ！」と声を出し、秋葉が特攻していった。

豪達は秋葉の後を追つて走り出し、秋葉達が動いた事に気がついた香田は白服達に一齐攻撃を命じた。

頭を集中的に攻撃されるビックフットは針が刺さる程度の痛みしかなかったが、それが数か重なるとかなりの物で思わず腕で顔を隠した。

その瞬間、秋葉は勢いよくジャンプしビックフットの緑色をした大きな首を斬り付けた。

四分の一を斬り、ブックフットの首からは緑の血が噴き出し後に続いた白服の一人も奴の首を斬り、二分の一にまで達した。

だが、飛び掛かつてくる豪達に気付いたビックフットは腕を振り下ろし、白服の一人を叩き潰してしまった。

「だあああ！斬れるおお！」

すでに飛び上がっている豪に選択肢はなく、刀を持った腕を大きく横に振り、肉の感触が豪の体に染み渡ってくる。

振り抜いた豪の刀はビックフットの首を切り落とす事が出来なかった。

ビクフットはぐらつく頭を両手で抑え、再生をし始めようとする。
「くそっ！」

豪は悔しながらビクフットの大きな背中を見てみると、奴の首の付け根に何かが刺さっているのが見えた。

「あれは・・・」

豪はビクフットの背中に刀を突き刺し、背中を登り始めた。

首の付け根に刺さっていたのは三本の鉤爪だった。

「・・・仁志」

豪は、奴の首から鉤爪を抜き取り、再生をし始める前にその鉤爪で残りのつながっている皮の部分を斬り落とした。

再生し始めていたビクフットの首は、頭の重みで繊維がブチブチと千切れ始め、胴体から切り離された。

斬り落とされた頭は、仰向けに倒れる坂野に落ちてきた。

「あれ？」

ニヤついた顔からそんな言葉を最後に出し、坂野は巨大な顔の下敷きになって潰れた。

「坂野・・・」

坂野の最後を見た香田は、頭を失ったビクフットの肩に立つ豪を見上げた。

頭を失ったビクフットは、しばらくの間、立ち尽くしていたが次第にバランスを崩し始めた。

前に倒れ始めるビクフット。そして、その倒れる方向にはショットガンを持った香田が立っていた。

「馬鹿野郎、お前、避けるよな!？」

豪は、ビクフットの肩にしがみ付きながら、下にいる香田に声を荒げた。

「イヤだね」

香田はショットガンを肩に担ぎ、倒れてくるビクフットを見ながら、豪に言ってきた。

大きな地鳴りがテーマパークに響き渡り、香田はビックフットの下敷きとなって消えた。

「何なんだよ・・・こいつ等」

豪は倒れたビックフットの背中から刀を抜き取り、下敷きになった二人の思考に理解できなかった。

「心身共有・・・片方がいなくなれば、その片割れも後を追う。そう言う奴等だ」

「・・・全然、わからねえよ」

「ああ、共生者の思考回路は、他人には理解できない・・・仕事再開」

秋葉の言う通り、その言葉を合図に、矢が二人に向かって放たれ、豪達は飛んでくる矢を刀で叩き落として行った。

「だああ！もう！・・・何なんだよ！さっきまで協力してたつてのに！」

「今日の味方は明日の敵」

「まさしくその通りだ！唯一違うのは、まだ日を跨いでいないって事ぐらいだ！」

豪は刀についたビックフットの血を振り払い、白服達に襲いかかって行った。

くおまけ

豪 「なあ、攻めの反対ってな〜んだ？」

上条 「えっ？守り？」

豪 「おう、その通りだ」

上条 「えっ？何さ、どうかしたの？」

豪 「いや、お前も誰かに聞いてみ」

上条 「はっ？・・・まあいいか、風さん。攻めの反対は？」

風 「・・・防御」

上条 「ですよネ・・・何が面白いんだろ・・・正也さん、攻めの反対は？」

正也 「はあ？守りだろ・・・お前、一体何を期待してんだ？」

上条 「いや・・・別に、聞いてみただけです」

カリン 「そう言うのはね、由美ちゃんに聞いてみるべきよ」

正也 「はあ？なんで、由美？」

上条 「まあ、一応、聞いてみますけど・・・由美さん、攻めの反対は？」

由美 「えっ？受け」

正也 「受けえ！？」

由美 「じゃない！守り！」

上条 「ああ・・・なるほど」

正也 「なあ由美、受けってなんだ」

由美 「何言ってるの！守りよ、守り！」

ポチ 「ワン」

由美 「うつさい、雑種！」

マリ 「ねえ、ポチ、受けって何？」

上条 「ヒイイ！言うな、ポチ！絶対に言うなよ！」

正也 「なあ、受けてなんだよ」

由美 「うっさい、裁縫部！」

上条 「あつ、小谷野さん。攻めの反対は？」

小谷野 「はあ？・・・受け」

全員 「・・・」

小谷野 「えっ？何？」

淳 「お前、本当に中央出身か？」

小谷野 「ああ・・・守りだ。間違えたな」

由美 「ああゝ見込みあるわね、彼」

上条 「あつ、築地さん、親父さん。攻めの反対ってなんですか？」

築地 「ああん？・・・守りだろ」

親父 「フッフッフ・・・守りだな」

全員 「えっ・・・」

三回目

正也 「なあ、黒服のナンバーを持つ奴！とか、香田が言っただけど、どういう意味？」

鯉沼 「えっ？ナンバーってのは、ただの主要キャラクターみたいなもんだよ。？が香田、？がグリム、？が俺。そこで、？がカリン、？が秋葉」

カリン 「黒服って別に私達だけじゃないのよね。白服ってやけに雑魚キャラが多いでしょ？そう言うのがわが社にもいるのよ」

正也 「えっ？でも、一回も出て来てないぜ」

鯉沼 「まああいつ等はテーマパークの外で、他に生存者がいないかウロウロしてるだけだから、多分、会わねえよ」

豪 「なんだ、その取って付けたような言い訳は」

カリン 「まあ、気にしない気にしない」

秋葉 「大人の事情」

淳 「大人の事情と言うか、書くのが面倒なだけだろ」

鯉沼 「まあそう言うなって」

小谷野 「なあ、本編で俺が最近、出番が無い気がするんだが、気のせいかな？」

正也 「お前な、それだったら俺はどうなんだよ。まともなセリフがふきだして無いんだぞ」

小谷野 「それでも出てるからいいだろ」

鯉沼 「だって、俺等、ずっと壁登ってるだけだろ？進展も何もないだろ」

豪 「まっ、脇役は黙って壁登ってるって事だよ。それだったら、最初の頃の俺なんか、ずっと冷蔵庫の中だぜ」

正也 「ま、まあ放置プレイされてた方が、お前は目立ちそうだな」

由美 「だよね」。豪は絶対に受けだね」

正也 「なあずつと気になってんだけど、受けて何だ」

豪 「おいおい、前回のを引つ張ってこようとするな・・・って、誰が受けじゃ！」

正也 「お前が引つ張ってんじゃねえか！」

淳 「フン、あいつ等は馬鹿か・・・俺なんて、せっかくライブ
ルの登場したつてのに、あの扱い」

豪 「あつ・・・いや、あの時はビクフットがいたからさ」

上条 「弱い奴には興味ないってことでしょ」

淳 「ああ？てめえ、喧嘩売ってんのか！？」

上条 「なによ、その時代遅れの髪型に弾丸ブチ込んでやるうか？
あああ？その剃り込み、もっと剃り込ませてやるうか」

豪 「あれ？・・・お前からってそんなに仲悪かったっけ？」

保住 「クズ共が・・・ワシなんてオマケにすら出てないんだぞ」

豪 「ゲッ！保住、まだ生きていやがったのか」

保住 「・・・クズが」

「いい加減しつこいのよ！」

襲ってくる白服の頭に、弾丸を撃ち込み、それでも佇む白服を蹴り飛ばす上条。

「大体、私は共生者であつて、人間は一人もいないのよ！」

冗談半分で言つたつもりだったが、その言葉を受け武器を構えていた白服達は「あれ？確かにそうじゃね？」「えっ？どうする？」なんて武器を下ろし、相談し始めた。

「ワン！」

相談する白服達にポチが威嚇し、その威嚇で完全にビビる白服達。

「と、とにかく！さつさと道を開ける！邪魔なのよ！」

上条は白服達^{バカ}に話を合わせ、無理やり道を開けさせ、ポチとマリを連れて、開いた道を通り過ぎようとした。

「ギヤアアア・・・！」

誰かの断末魔が廊下中に響き渡り、上条を含めその場にいた全員が悲鳴のする方を見た。

すると、そこには体を真つ二つに引き千切られた白服の一人と、緑の肌をした化物がいた。

だが、第一症状の化物とカメレオンとは違い、体の形に変化は見られず、人の形を留めていた。

例えるならあの親父がちょうどいいかもしれない。

「あの人は・・・」

上条はその化物に見覚えがあり、記憶を遡ろうとするが、その前にマリが答えた。

「由美お姉ちゃん！」

そつだ。豪の友達と一緒にいた女性だ。

「くそつ！最悪だ」

白服達は、由美に向かって武器を構えた。

「待って、待って！あの人は知り合いなのよ！・・・それにあれは、共生者でしょ」

「共生者？・・・そんな甘っちょろいもんじゃねえよ」

「何の事？」

「だから・・・」

続きを言おうとする白服が、由美から目を放した途端、その白服の頭に由美の足元にあった引き裂かれた胴体の一部が突き刺さり、白服が倒れた。

「えっ・・・」

思わず息を飲みながらも、上条は銃を構えた。

「わかつたろ？・・・あいつこそ本物の化物だ」

「どういう事・・・自我が無いの？」

「さあな？・・・奴は最強だ。時間制限つきだがな」

「時間制限？」

「このウィルスのタイムリミットまでだ・・・構えろ！」

白服達は、それぞれの武器を構え、由美に向けた。

「・・・ワン」

「どうするか？・・・だって」

ポチとマリの問いかけに、戸惑う上条。

だが、上を目指すためには由美の立つ廊下を進まなくてはならない。

「・・・黙って通り過ぎる事は、出来ないわよね」

両手に握る銃を強く握りしめながら上条は呟き、白服と同様に由美に銃を向けた。

「いい？馬鹿犬・・・あんたは極力戦闘は避けて、マリちゃんを連れて行きなさい・・・私も後を追う」

上条の指示にポチは小さく吠え、由美の指が微かに動くのを合図に白服達は攻撃を開始し、白服に混ざり上条達も由美に向かって走り出した。

槍を構えた白服が由美に向かって槍を突き出し、突き出された槍は由美に止められ槍と一緒に壁に放り投げられた。

上条はその隙をつき、由美の懷に潜り込み腹に拳を入れ、由美は前のめりに怯んだ。

「今だ！ポチい！」

マリを背中に背負ったポチは、由美の脇を通り過ぎ、背を向けて走り出すポチの姿を見て、上条は息を吐いた。

だが、由美にはそんな事はどうでもよかった。

自分の懷にいる上条の首を腕で捕えるとそのまま上へと持ち上げた。床と天井が逆さまになる光景を目にして、上条は「ヤバイ死ぬ・・・」と心の中でか口で呟いたのかわからないが、そう思った。

地面には先ほどまで元気に動いていた白服達の亡骸が転がり、その仲間入りを果たそうとする上条は意を決して目を閉じた。

高々と持ち上げた上条を由美は地面に叩きつけようと腕を振り下ろした。

「悪い、遅くなつたな」

そんな言葉を耳にし、目を開くとそこには自分を抱きかかえる豪の姿があった。

「・・・豪？」

「おう」

「し、死ぬかと思ったんだから！」

思わず豪の胸元を掴み、放そうとしなかったが豪の視線は由美の方へと注がれている事に気がついた。

「・・・ありや由美か？」

「う、うん・・・白服の話ではウィルスが死滅するまで最強なんだって・・・」

思わず手を放し、上条は戸惑いを見せるが、豪は全く気付いていなかった。

「最後の灯ってことか・・・」

豪は刀を抜き、由美の前に立ちはだかった。

「ま、待って、豪・・・どうするつもり？」

「斬る」

「えっ・・・だって、あの人は」

「お前には聞こえないのか？」

豪の言葉に、思わず口籠る上条。

聞こえないと言えは嘘になるが、確証がなかった。

「あいつは今、死を望んでいる」

蝕まれる自分の体に、自分の意思で制御できない破壊衝動。豪と上条も体験した初期の症状だった。

「殺す気でいかないと、マジでやられるぞ・・・覚悟しろよ由美」

「豪・・・私も手伝うわ」

上条は銃を構え、豪の横に立った。

終始無言のまま立ち尽くす由美は、そんな二人を見て一瞬笑みを浮かべたように見えた。

「あれ？上条ちゃん、どこに行つたのかしら？」

足元で虫の息の白服の頭を銃で撃ち抜きながら寿は、上条の行方を探していた。

「寿……」

辺りを見渡す寿の前に現れたのは秋葉だった。

「ああ、秋葉……って事はビックフットは倒したのね」

「香田死亡」

「そう……別にどうでもいいけどさ」

上条の気配を探し続ける寿だが、刀を持つ秋葉の様子に眉を吊り上げた。

「白服との契約不成立寸前」

「……そういう事、どっちが白服に付くかって事ね」

「意図理解……寿、選択権有り」

「だったら、私が白に付くわ。大体、保護なんて私には向いてないのよ」

面倒そうに頭を掻きながら寿は、そう答え、刀を持つ秋葉の方を向いた。

「同じ町出身でこんな事になるとは思わなかったわね」

「今日の友は明日の敵」

「ねえ私の彼の武器はまだ折れてないわよね？」

「白服との混戦中、行方知れず」

「そお……まあ豪ちゃんの事だから心配はないと思うわ」

「……寿、迷い有り」

「まあね。そつちはいいの？親友の武器をちゃんと見届けなくて」

「問題無、寿同様、心配無用」

「そお……ならいいわ。いつでもいいわよ」

「……覚悟」

刀を構えた秋葉は寿に突進し、寿は襲いかかってくる秋葉に向けて引き金を引いた。

弾が直撃し、黒煙が立ち込める中、黒煙から飛び出してきた秋葉に

向けてもう一度、引き金を引き、秋葉は持っていた刀を横に振り抜き、素早く刀を鞘に戻した。

寿の弾丸は秋葉の左肩を抉り、重みに耐えきれなくなった左腕は秋葉の肩から落ち、胴体を横に引き抜かれた寿の上半身は地面に落ちた。

「・・・やっぱり、露彦には敵わないわ・・・先に逝ってるね」

地面に倒れた幼馴染はゆっくりと目を閉じ、してしまった事を後悔せぬよう熱くなる目をしっかりと閉じ、溢れようとする何かを必死にこらえ、秋葉は幼馴染の名前を呟いた。

「白との契約不成立寸前、未だ変わらず」

秋葉は、深く深呼吸すると下に落ちる寿の武器を拾い「俺が白だ」と決意を表し、廊下を突き進んで行った。

「さ・て・と・・・安全圏に辿り着いた俺達だけど、これは一体どういう状況？」

テーマパークの最上階に辿り着いた正也達だがパワードスーツに身を包んだ花形隊に銃を突きつけられ、両手を上げる正也達に便乗し鯉沼も手を上げながらそう呟いていた。

「お前達には選択権がある・・・一生幽閉されるか、我々に付くか」
「おいおい、一体何の冗談だよ。俺達を助けてくれるんじゃないのか？」

小谷野は自分がレジスタンスだと言う事を忘れ、そんな事を口ずさむが「レジスタンスが口答えするな」と花形に言われてしまった。

「あつ・・・やっぱばれてた？」

「自衛軍に付くつてのはどういう事だ」

冗談を笑い飛ばす小谷野を横に、正也は花形に質問をぶつけていた。
「今回の作戦は人員補充だ。人命救助ではない・・・特殊部隊と言つても非公式の部隊だ。表立った動きも、表立った人員補充もする事は出来ない。故に俺達には戸籍が無い。そして・・・」

花形は顔を隠していたマスクを外し、顔中に作った痛々しい傷を見せながら笑った。

「この部隊では、戸籍も経歴もなにも関係ない・・・なあ小谷野」

指名された小谷野に目をやると、そこには口を開きっぱなしにし呆然と立ち尽くす小谷野がいた。

「・・・先輩？」

「久しいな。何年振りだろうか」

「そんな・・・だって先輩は、原子炉で死んだはず」

「ああ・・・だが、こうして生きている。そして、お前と巡り合う事もまた運命だ」

思わぬ出来事に目を泳がせる小谷野。そして、選択権があると言つて置きながら銃を突きつけられた状況で、選択権も口々に無い事を悟る正也。

「さて、どうする？」

「俺は行きます。先輩に付いていきますよ」

好き焦がれていた先輩の登場に小谷野は二つ返事で答え「お前は？」と尋ねられる正也は正直、戸惑っていた。

「少し、考えさせてくれ・・・下の様子が見たい」

「駄目だ。任務以外の事だが、お前を下に送り届けれる奴がここに

は存在しない」

そんな事はわかってるが、由美の事が気かりな正也。

そんな中、一人だけ「別にいいだろ」と答える人物がいた。

「自衛軍には、下に送り届けれる奴がいなくてもいいが、俺だつたら大丈夫だろ」

そう言つて銃を肩に背負う鯉沼が面白おかしく言つていた。

「構わないが、任務外の事だぞ」

「関係無いね・・・正直、クライアントの仕事なんてどうでもいいんだよ俺は・・・むしろ俺は正也こうちの方が興味があるね」

正也の肩を抱きながら鯉沼はそう言い。花形は「好きにしろ」と答えた。

「だってさ、さあお前の好き焦がれる彼女を探し行くか！」

鯉沼はそう言いながら少々ムツとする正也と一緒に最上階から降りて行つた。

白服達の攻撃を何とか免れた保住と風は、誰もいない廊下を突き進んでいた。

だが、進むといつてもうつ伏せに倒れた保住の襟を掴み風が一生懸命、引っ張っていた。

横に大きく太った保住を細見の風が必死に引っ張るが十数メートル進むのに数十分かかっていた。

「ゴミめ等が・・・ワシはこんな所で死ぬ訳がないだろ」

言う事の聞かない体を見無視しながら相変わらず口からは反吐が出る

ようなセリフを吐いていた。

ウイルスに感染していた保住の手足はすでに濃い緑色に変わり始め、酸素によって死滅し始めていた。

「ワシがこんな所で死ぬ訳がない・・・ワシが死ぬ訳がない」

すでに疲れ切った筋肉でこんな重たい物を引っ張り続けられる訳がなく、保住の襟が緩んだ指から抜け、保住は顔を強打するが、すでに感覚もないらしく、風に対し怒り狂う事はなかった。

休憩の意味も込め、風は保住の体を起こし壁に寄りかからせるが、首から下が言う事が効かない体を保住は首を動かさずに目だけを下にやり、自分の変わり果てた体を目にしてしまった。

「な、なんだ・・・この体は・・・」

立派なスーツも引っ張り続ける事で敗れ、敗れた服の下から緑色の肌が見えていた。

そして、その緑色の肌はすでに首元にまで達してた。

「ふ、風・・・どうにかしろ！このままでは、ワシがワシでなくなってしまう」

その通りだ。このままでは私が守り続けていた父の姿が変わってしまう。

だが、どうする事も出来ない。でも父は守らなければならない。

「風！」

そうだ。変わる前にどうにかすればいいんだ。そうすればずっと守る事が出来る。

「・・・おい、風・・・何をしている」

まだ変わっていない所を外さなければ・・・父が変わってしまう。

「風！・・・止めろ！何をする気だ！」

父を守らなければ・・・

手に握った剃り曲がったナイフを保住の首に当て、慎重にゆっくりとナイフを動かす風。

そして、テーマパーク中に保住の悲鳴が鳴り響いた。

三回目（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。
次回、最終話とさせていただきます。

淳 「いや、実行しておいて何言っただお前」

正也 「そういやさ、女性キヤラって少ないよな」

淳 「馬鹿か、お前？女性キヤラって死なねえだろうが」

正也 「ああ、確かに・・・何でだろうな」

淳 「女性には甘いんだよ・・・あの野郎」

カリン 「ちよつと、それって私が男だっけ言いたいのか？」

秋葉 「・・・！」

淳 「ゲッ！いや、そう言う意味じゃなくて」

カリン 「まあいいわ。じゃあね」（ログアウト）

秋葉 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・

鯉沼 「ちよ、秋葉！てめえ出てくるんなら、なんか喋れや！」

秋葉 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・（ログアウト）

鯉沼 「ああ！逃げやがったあのヤロ！逃がすか！」（ログアウト）

西田 「あの・・・私はいっつ出ればいいのでしょうか？」

淳 「今、出てるからそれでいいんじゃないか？」

仁志 「僕は？」

淳 「お前も別にどうでもいいわ」

豪 「さてと・・・一通り出たか？」

仁志 「そんな・・・豪まで」

豪 「まあまあ、後で飯奢ってやるから」

雑魚しやうぐ 「あのゝ我々は出てないんですけど・・・」

化物共 「ガルルルルル」

淳 「てめえ等みたいな斬られ役になんか構ってられるか！」

最上階から降りてきた正也達の前に、現れたのは小さな少女とその少女を背負う一匹の犬だった。

「マリ！・・・無事だったのか」

驚く正也にマリは、笑顔で手を振り、犬は向かいに立つ正也達に威嚇していた。

「こりやまた・・・一人の少女と一匹の犬が、ここまで生き残るとはな・・・スゲーな、おい」

鯉沼は戦闘態勢を解き、犬に上に行くように指示した。

「おい、ハゲ散らかった犬。餌が欲しけりやそのまま上に向かいな。黒服はお前等を歓迎するぜ」

鯉沼の指示にポチは「ワン」と答え、正也達の横を通りすぎて行った。

マリとポチがいなくなってから、正也は鯉沼に尋ねた。

「おい、黒服が歓迎するってどういう事だ？」

「わかんねえのか？・・・あいつ等は共生者だ。普通の人間と共生者が一緒にいられるとも思ったか？・・・間違いなく、どちらかが発狂するね・・・お前と淳みたいにな」

笑いながら言う鯉沼に正也は不快感を表すが反論する事も出来なかった。

「短時間で、そんな状況になるんだ。長時間も一緒にいてみる。どっちかが肉塊になる事、確定だね」

「・・・なあ、黒服ってのは結局どういう集団なんだ」

「ああ？・・・別にこれと言った理由はねえよ。俺はただ楽しけりゃいい・・・そうだな・・・秋葉は仕事に従順なだけで、カリンは生き残ればいいと思うだけ。香田や俺みたいに快樂主義の奴もいれば、たまに変な奴もいる」

「変な奴？」

「お前の友達でいただろ？・・・刀持つてる奴。なんだつけ？豪だつけ？・・・あと、二丁の包丁を持った巨人なんかもそうだ。自分よりも強い奴を求めてる」

「なんで、そんな者を求める」

「知らねえよ。理解しようなんて考えるなよ。無駄な事だ・・・自分より強い奴を求めて、そいつを食す事ころで俺と同様、快樂でも得てるんじゃないのか？」

巨人と言つのはおそらく築地の事だろう。だが、築地は確かにそのような雰囲気を出していたが、豪があいつと同じには正也には見えなかった。

「おっ・・・また生存者が来たな？」

鯉沼の言葉に、廊下の先を見るとそこには、細身の女性が小さな力バンを片手に持ち、やってきた。

「よお、お前一人か？」

「・・・父も一緒です」

「ん、そう・・・この先に自衛軍が待機している。さっさと上に上がってな」

「はい」

「さてと・・・俺達も移動しようか」

鯉沼は正也にそう言い、風の横を通り過ぎるが、そんな鯉沼を風は呼び止めた。

「あの・・・豪・・・さんは、この上にいますか？」

「いや、まだ来てないな。なんで？」

「いえ、なんでもないです」

風は鯉沼から答えを聞くと背を向けて正也達が来た道を辿って姿を

消した。

「なんだ？豪の知り合いか？」

正也の呟きに鯉沼は「知らね」と答え、歩き始めた。

「ああ！もう、マジで強すぎ！」

上条は、対する由美に対し愚痴を溢しながら、立ち尽くす由美の両足を蹴り崩した。

「良くやった、仁！」

両足を蹴り飛ばされ仰向けに倒れた由美に跨り、豪は刀を由美の首元に押し付けた。

上に跨る豪を振り解こうとするが、上条はそんな由美の手足の付け根に弾丸を撃ち込んだ。

「さあ！お前の負けだ！いい加減、由美に体を返せ！」

悔しそうに歯を食いしばる由美の表情は、次第に落ち着きを取り戻し始め、釣り上がっていた目つきも段々と落ち着いていった。

「・・・豪」

「おう、大丈夫か？」

豪と上条の体中に付いた傷は塞がり始め、超回復の激痛に二人とも

顔を歪めていた。

「ああ、もう痛いな！畜生め」

「豪……ごめんね」

「……気にするな。それに、俺じゃなくて仁に言ってやれ」

豪の言葉に、豪の後ろに立つ上条の方へ頭を向けるが、後ろに立つ上条は「問題無」と答えていた。

「ああ……やっぱり私、死ぬんだ」

首元に刀を押しつけられたままの由美は持ち上げていた頭を下ろしながらそう呟いた。

由美の手足は濃い緑色へと変化し始め、硬直し始めていた。

「……そうみたいだな」

「こんな事なら……お父さんの代理でパーティに出席なんてするんじゃなかった・娘すら政治利用する父親なんか見捨てればよかった。転校なんてしなければ良かった」

「……そんなに悪い事だらけだったのか？」

「そうね、かなり。……ああ、でも久しぶりにみんなに会えたし今回は良かったかな？豪にも会えたし」

「そうか……」

「ねえ……最後に聞かせて……あの時、私の事、好きだった？」

「ああ、何を隠そうお前があの村にやってきて白いワンピース姿で俺達の前に登場した時から好きだった……悪かったな、当時の俺はかなり奥手だったんだ」

「やっぱり……『だつた』なのね」

「お前がそう聞いてきたんだろ……」

「でもね……私は今でも現在進行形なのよ」

「悪いな……俺は過去形だ。後ろにいる奴が、俺の現在進行形だ」
豪の言葉に、思わず頬を赤く染める上条と力なく笑う由美。

「やっぱり、昔と変わらないね……普通、死にそんな人を落胆させる奴がいる？」

「目の前にいるだろ」

「それは、豪だけよ。きつと・・・」

由美の体を浸食する緑の物体は、遂に胸元にまで達していた。

「お願い・・・私のまま逝かせて」

「お前・・・それは」

「私を落胆させたのよ。・・・そのぐらいやってもいいでしょ・・・死だけが私を父から解放してくれる」

「由美・・・お前、それは違うぞ。お前はいつでも逃げれたはずだ。いつでも、あの村に戻ってこれたはずだ」

「そう・・・かも。・・・でも、いいの。今はその通りなんだから」
そう言くと由美はゆつくりと目を閉じ、豪の言葉にすら反応しなくなった。

「豪・・・私が」

上条は、銃を構えながら豪に変わろうとするが、それを豪は拒否した。

「いや・・・俺がやる」

豪はそう言つと由美の頭を抑え、首元に押し付けていた刀を勢いよく横に引いた。

「・・・嘘だろ。おい・・・」

一部始終を見ていた正也は、信じられない光景に目を疑い、正也がいた事に気付かなかつた豪は思わず顔を上げた。

「正也・・・」

「お前・・・何やってんだよ、豪」

「正也・・・これは・・・」

「何やってんだよ！てめえ！」

正也は肩にかけていたライフルを構え、豪に向けて引き金を引いた。豪は飛んでくる弾を斬り落とし、突然の攻撃に上条は銃を構えた。

「なんなの、こいつ、いきなり！」

「止せ、仁！」

豪の制止も間に合わず、上条は引き金を引き、二丁の銃から飛び出した弾丸は正也に届く前に鯉沼の弾丸によって撃ち落とされた。

「はい、そこまでだ。お前達は白服に付くつもりなのか？ だったら、構わねえが、そうじゃないんなら、それ以上やるんじゃないぞ」
鯉沼はこれまでに見せた事が無いくらいの笑みを浮かべて見せ、怒りに肩を震わせる正也の肩に腕を通した。

「なあ？ 俺の言った通りだろ？ あいつはお前の知っている友人じゃない。あいつは共生者だ。あいつはそういう奴だ。俺と変わらねえ、・・・化物だよ」

そう言い聞かせる鯉沼に「ああ、その通りだな」と答える正也。

「正也、違う。これは」

「止せ・・・なにも言うな。何を言おうが、俺はお前を許さねえ」
口を開こうとする豪にそう吐き捨て「俺決めたよ」と正也は豪から目を放さずに言い始めた。

「入ってやるよ・・・自衛軍に。あいつよりも強くなってる」

「正也・・・」

「おう、良い心がけだ。それが人間本来の姿だ・・・復讐心が己の生を充実させる」

鯉沼は、正也の肩に腕をまわしたまま、後ろに向きを変え「先にゴールで待ってる。こいつよりも後できな」と豪達に言い放った。

豪達がゴールにたどり着いた時には、正也達を乗せたヘリがすでに飛び立っていた。

ヘリに乗り込むとそこには、ポチとマリそして風の姿があった。

「風さん・・・無事だったんだな」

「はい・・・」

風は機内の席から立ち上がると手に持っていたカバンを豪に手渡した。

「・・・これは？」

「私は・・・私にはどうする事も出来ません。これからどうすればいいのかも・・・わかりません」

カバンを開こうとする豪にポチが一鳴きし、マリが「開けない方がいいだって」と通訳してきた。

大きな羽音を立て始めたヘリは、ゆっくりと離陸し始め、そんな中、豪は鞆を開き、その中にある物に表情が強張った。

「風さん・・・」

「私は・・・父を守りたい一心でこれまで生きてきました。でも、これからどうすればいいのか、わかりません」

「風さん、こいつはもう、ガマガエルでもあなたの父でもない・・・ただの肉塊だ」

「はい・・・取り除いてから気付きました。それは父であって、父ではありませんでした」

「人は新たな生き方を決めた時、これまで生きてきた物を決別するためにケジメを付ける生物です・・・俺にどうにかして欲しいからこの鞆を渡したんですよね？」

豪の問いかけに風は小さく「はい」と答えた。

「・・・捨てますよ。いいですか？」

「…………はい、お願いします」

豪は離陸したヘリの扉を開き、風の持っていた鞆を外に放り投げた。鞆は宙を舞い、ゆっくりと地面へと落ちて行き、ドサリと音を立てながら地面に落ちた。

落ちてきた鞆に気付き空を見上げると一機のヘリが、晴れ始めた薄気味悪い空に消えて行くのが見えた。

「フッフッフ・…これは始まりか、はたまた結末か」

黒いレインコートに身を包んだ親父はそんな事を呟きながら、積み重なった瓦礫をどかし始め、その瓦礫の中から意識のない築地を掘り出し、乱暴に引きずりだすと不気味な笑みを溢しながらゆっくりと歩き始めた。

肩腕を失った秋葉は、生き残ったもう片方の腕で淳の襟を掴み、白服の待つ地下へとやってきた。

「交渉成立」

秋葉はそう言いながら乱暴に淳を白服の方に投げ飛ばした。

「いってえな！もつと丁寧に扱え！」

苛立つ淳に対し、視線を泳がせ秋葉は地下トンネルへと勝手に歩みだし姿を消した。

「…………たく、何なんだよ。あいつは」

「さすが淳ちゃん。俺が見込んだだけはあるぜ」

「…………山田？…………生きてたのか！」

「うん…………死んだと思ってたのにさ…………なんだっけ？」きようせ

いしゃ』とか言う奴になっただだどの言っで、ここに連れてこられたんだよ」

「そうか・・・よく生きてたな」

「俺は淳ちゃんが死ぬ所を見るまで死なねえよ」

笑いながら恐ろしい事を言ってくる山田と淳は、大勢の白服達と共に地下のトンネルを突き進んでいった。

リゾートとして成功した町は、大地震とレジスタンスの登場。そして、中央政府の介入によりたったの三日で姿を消した。

人民解放軍に強い反発を見せる中央の判断により、レジスタンス介入から三日目の朝、街全てにクラスター爆弾を雨のように振り落とし、辺り一面、瓦礫すら見当たらない状態にまでした。

もちろん、生存者もゼロ。マイクの前で演説する保住の言葉に、道民はレジスタンスに対する対抗意識をさらに強くしていた。

知事の補佐役の鷺田も保住に賛同し、そんな鷺田の横には綺麗な顔立ちをした娘が華を飾っていた。

テレビに映る彼女が豪達と一緒に過ごした人物であるかは、定かではないが、彼女が最後に放った言葉は紛れもない本物であると豪が言っていた。

『北の最悪』以降、一軒家を立てた両親に手紙の一通も出してない私だが、何故だかわからないが、心配する両親の顔がすぐにでも浮かび上がるが、これと言った罪悪感が無いのは、私が共生者になっってしまったからなのだろうか？

それとも、これと言って報告する事が無いからだろうか？

・・・いや、報告する事が一個だけあった。

それは、今、パソコンに向かってどこかに出す訳でもない報告書みたいな物を作っている事でもなく、その机の引き出しに隠してある二丁のけん銃の事でもない。

ましてや、その拳銃と一緒に隠してある婚姻届でもない。

こんな物、この場所ではただの紙くずだ。

この場所では、市役所どころかスーパーすらない。

まあ、書く事と言ったらこれだろう・・・

お父さん、お母さん。今、私はゴーストの住む町にいます。

まあ食糧にも困らず、それなりに元気にやっているので心配しないで下さい。

それでは、また手紙書きます。

「ちきしょう！なんなんだよ！なんなんだよ、こいつ等！」

鉈を手に持ち、崩壊した建物の中を緑の化物に追われる青年は、正体不明の化物に対し暴言を吐きながら逃げ回っていた。

そんな青年は、下に転がる瓦礫に足を取られ、転んでしまった。

四足歩行の化物は、チャンスと見るや青年に向かって飛び掛かり、青年は悲鳴を上げた。

青年に向かって口を大きく開き飛び込む化物は、廊下の突き当たりから現れた二丁の銃を持つ女性によって弾丸を浴び、青年の前に倒れ込んだ。

「ハア・・・ハア・・・」

危機を回避した青年の口からは、乱れた息遣いのみが聞こえ、後ろに立つ黒い服を着た女性に目をやった。

両手に持った銃をクルクルと回し、その女性は軽い口調でこう言ってきた。

「どうも、何でも屋の黒服です」

それぞれのゆく道（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。

そして、こんな終わり方で申し訳ない。

また続きが出来あがり次第『崩壊した街2』として出そうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2618k/>

崩壊した街

2010年10月10日03時27分発行